

天翔け地這う

第六卷 人類はどこへ行くのか

生野以久男

プロローグ

突然、地球に異変が起きた。それは世界の終わりの始まりだった。だがそのことに誰も気付かなかった。

「天の組織」の規模縮小にともなう地球支部廃止を機に、ヨウとミサにはひとたび地上に戻ることも選択肢としてあった。だが、そのまま留まって地球の見守りをつづけ、地球（人類）の状況を報告する道を選び、「永遠の命」を与えられたのだった。

ヨウとミサには「永遠の命」のほかにタイムスリップや瞬間移動の技が与えられ、ふたりともそれらを自由に駆使することができた。このほかにもいくつかの特殊機能や超能力が備わっているのだ。

こうしてふたりはいつでもどこへでも時間と空間を超えて自由に移動していた。宇宙の時間や空間ばかりではない。たとえば人間の体内にも潜り込めることが可能だった。

ふたりは地球の異変に気づき、それを探りながら、人類の生き残りを探る旅（「終わりなき物語」をはじめ）。

「終わりなき物語」は「天の組織」から永遠の命を与えられたヨウとミサが過去を振り返りながら、人類の未来を探る「果てしない旅」の報告である。

なお、この旅（「終わりなき物語」）については、『天翔け地這う』の最終巻第五巻（ウェブサイト「キノコプレス」から公

刊（電子版）（二〇一四 一 一）のエピローグで予告した。この予告はこれからはじめ「終わりなき物語」の序章といつてもいいものなので、プロローグの一部として、以下にその全文を再録しておこう。

「終わりなき物語」の予告（二〇一四）

『天翔け地這う』は非意図的生成物である化学物質「ダイオキシ」をめぐる話からはじまる。

人類はいま、「ダイオキシ」汚染のような現代科学技術文明がもたらす全く意図しない事象の出現に悩まされている。

二〇世紀後半以降、現代科学技術文明が巨大化高度化大量化の高次段階にいたるにしたがい、ますますこのような非意図的生成物現象も巨大化高度化大量化し、ついに、人類は絶滅の危機に直面させられるまでになっている。科学技術文明の主人であるはずの人類が、自らの利益を求めて推し進めてきた現代科学技術文明の巨大化高度化大量化によって滅ぼされようとしているのである。

二一世紀に入って、「ダイオキシ」問題と同じようなような事象がつきつきと人類を襲い、人類はにつきもさつきもいかないうちに追い込まれていった。そして人類はついに絶滅の危機に直面していたのだ。

人類絶滅の危機的状況は、日本でも顕著に現われていたにも

拘わらず、これには一切目もくれず、経済成長一点張りで、なぜか、政治や行政はもちろん、人びと（社会）もこれに対する反応は鈍かった。

毎年台風にも見舞われる地震国日本では、人びとはともすれば地震や台風といった自然災害に目を奪われがちだった。たとえ夏に猛烈な熱波に見舞われ、熱中症に戦慄こうと、冬の寒波に地球温暖化の危機をすっかり忘れてしまうのだ。

こんなふうで、日本では現代科学技術文明がもたらす非意図的生成物や副作用への関心がいまいちの状況にあったのかもしれない。ことに、多くの人びとは自らの利益のためにつくりだされたものに対しては一切信じて疑わず、ひたすら信奉するのみといった生活態度だった。これは長年天候に支配されつづけた農耕民族のDNAのなせる業か。

このような状況のもとでも、ヨウとミサ（「天の組織」から永遠の命を与えられた耀と未佐）は人類絶滅の危機への対応をいろいろ試みる。だが、現代科学技術文明にとっぷりつかつた人びとは現代科学技術文明のもたらす見かけの「美酒」に酔い痴れ、まるで水から熱湯になる鍋のなかの「茹で蛙」のように忍び寄る人類絶滅の危機に気付こうとしなかつたのだ。

人類絶滅の危機をもたらした現代科学技術文明の非意図的生成物や副作用問題は、日本一国にとどまる問題ではなかつた。人類絶滅の危機も瞬く間に全世界に伝播していった。グローバル化している世界では一国の問題は全世界の問題だったのである。

二一世紀初頭、にわかに、現代科学技術文明の限界があらわ

になった。だが誰も気付かなかつた。世界経済の流れは実物経済の産業資本主義から金融工学のもとITを駆使したマネーゲームの博打型投機金融資本主義へと向かう一方、科学技術ではIT分野、遺伝子技術、ナノテクノロジー、分子生物学分野などの先端技術分野だけが極端に進展していった。

このような跛行的流れのなかで、大半の人びとは惑わされ、成果のおこぼれをあてがわれるだけで、置いてきぼりを食い、取り残されていった。

人びとの間のさまざまな格差が拡大し、格差の壁は乗り越えられない大障壁となつていった。このような格差は経済的な貧困格差にとどまらず、科学技術的な格差までが拡大し、人間に格差による差別が生じはじめていた。

このような背景のもとで、ヨウとミサは人間界へもどり、日本の地に足を踏み入れたのであつた。

ふたりはアムンやハクリの教えや助言を守り、打開策をいろいろ試みるが、日本は世界の大きな流れに乗り込もうとする一方で、なぜか取り残され、孤立化していた。

過去の文明史からみて、二一世紀は西洋文明から東洋文明への文明転換の世紀のはずだった。だが現代科学技術文明は西洋文明東洋文明の枠を超え、グローバル化をめざして、世界文明化していった。西洋文明を基盤とする現代科学技術文明の世界文明化は、西洋文明の世界文明化でもあつたのである。

それでも現代科学技術文明を東洋文明化へ導くチャンスはあつた。現代科学技術文明の最先端を進む日本、そのあとを猛スピードで追い越そうとする韓国、それに中国、この三国が連携協力して、他のアジア諸国や地域と手を携え、一大東洋文明圏をつ

りさえすればよかったのだ。

世界人口の半数を超えるアジアに一大東洋文明圏が形成されれば、人類は絶滅への道とは別の道をたどったかもしれない。生物である人類はいずれ絶滅するとしても、人類絶滅の危機はいささか遠のいていたにちがいない。東洋の考えの根底には、西洋文明に見られる直線的な思考とは異なり、古来から循環的思考が息づいているからである。もともと、世界文明化してしまつた東洋文明にどれほど期待できるか分からないが……。

世界文明化した現代科学技術文明は強力だった。西洋文明圏の反撃もしぶとかった。かつてアジアに点在した植民地の旧宗主国英仏蘭などの各種勢力による暗に陽の働きかけや米英政権らの分断的戦略外交などに加え、アジア諸国間の対抗意識や経済発展段階の違いもあつて相互理解相互協力が遅々として進まず、アジアが統一した歩調をとることはなかった。このような外在的内在的理由から、西洋文明から東洋文明への文明転換は消え、また現代科学技術文明に代わる新文明を提示されることもなく、人類は絶滅の危機を迎えることになつたのだつた。

二一世紀に入つて、現代科学技術文明がもたらした地球温暖化は確実に進んでいた。世界の平均気温は産業革命以前と比べ、すでに約一度上昇していた。

二一世紀初頭のある年を振り返つておこう。日本では、冬には北日本で大雪があり、五メートルを超える積雪をみた。夏にはほぼ全土が猛暑に見舞われ、秋には超弩級の雨台風に襲われた。

その年、世界を襲つた主な異常気象はつぎのとおり。

日本から中国中部で、三月、七〜八月に異常高温。米国東部で一月、四〜六月、一〇月に異常多雨。米国中西部で九月に記録的豪雨。ヨーロッパでは、一〜三月、五〜六月に異常多雨。トルコ・エジプト北東部で一二月に異常低温。インド北部で六月に大雨。フィリピンで一月に過去最大級の台風。オーストラリアで高温、一、九月には過去最高の月平均気温。

以上はほんの一例に過ぎないが、いままで雨の降らなかつたところで大雨が降るとかといった異常気象が毎年手を変え品を変えて世界各地を襲つた。それでも多くの人びとは地球温暖化に無頓着であつた。ましてこれらの異常気象が現代科学技術文明のもたらしたものであることも、自ら引き起こしているものであるとも、つゆにも思わなかつた。

こうして地球温暖化は年々深刻化していった。世界中の人びとはまさに「茹でカエル」の状態にあつたのだ。そして誰にも気付かれることなく、人類は自ら自分の首を絞めていつたのである。

世界の気温上昇の危険ラインは世界平均二度である。

平均二度上昇ということは、ところによつては一〇度上がる場所もあるれば、逆に、一度下がるところもあるのだ。これらを集計して平均して二度上がつていれば平均二度上昇ということだ。これを超えると、とてつもない異常気象が常態化するばかりでなく、海面も急速に上昇するなど、ケタ違いの影響が生じることになる。

世界の気温上昇を二度以内に抑えるには、二酸化炭素（炭酸ガス）などの温室効果ガスの許容量は炭素換算で総量約八〇〇ギガトンであると試算されている。それが二一世紀半ばにいたつ

て、温室効果ガスの大気中への排出量はすでにこれを超えてしまおうとしていたのだ。

これも別名エネルギー文明あるいは炭素文明とも呼ばれる現代科学技術文明のもとで、経済成長を優先に、豊かで便利な生活を追い求め、野放図に石炭石油などの化石燃料を湯水のように浪費した結果の全く意図しなかったツケなのだ。それも予期しないツケの「倍返し」だった。

まだ地球の平均気温は二度まで上昇していなかったにも拘わらず、異常気象が常態化してしまっていた。

世界各地で、猛暑、干ばつ、洪水、山火事、水不足、水質悪化、食糧減産、食糧不足、生物の絶滅、森林枯死、海岸浸食、デルタ地帯など沿岸土地（低地）の喪失、感染症の蔓延などが日常茶飯事となっていたのである。そして地球の温暖化による気候帯の変動にともない、温帯から寒帯にかけて森林破壊が極度に進み、棲息する動物も住み処を失い、追い出されていった。こうして人類の生存とも密接に関係する陸上の生物生態系の崩壊へとつながっていくのだ。

生物生態系の崩壊は陸上だけにとどまらず、海洋においても進行していた。海水温の上昇は魚介類の棲息域を大幅に変えてしまった。また大気中の二酸化炭素濃度の増大により、海水の酸性化が進み、海生生物、ことに貝類の生存域に著しい悪影響が生じていた。さらに、海面上昇による沿岸部の侵食で、干潟や漁礁が破壊され、魚介類の産卵場所や棲息域が奪われていった。

異常気象からもたらされる影響はこのようないわば一次的な影響にとどまらない。さらに二次三次のさまざまな影響を社会

や経済へおよぼしていく。さまざまな異常気象は言うまでもないが、陸上、海洋の生物生態系の崩壊は人類社会に致命的な影響をおよぼすのだ。そしてこれはまさに人類絶滅の引き金であり、そのはじまりであった。

まず、異常気象による農業生産量の落ち込みは人口増加のつづく世界での食糧減産は即食料難に直結し、数億にもおよぶ飢餓人口の増大をもたらした。ことに、異常気象による水不足は深刻で、産業用水や農業用水の不足を招き、生産活動はもちろん、さらなる食糧減産を招く。

食べ物と十分な飲み水の確保すら困難となっていた住民の間では食糧や水の奪い合いから小競り合いが日常化し、やがて地域間や国家間の争いを引き起す。ついに、近隣諸国を巻き込んだ大戦争へと発展していった。そして食べ物や水を求める大量の飢餓難民が世界を彷徨い出した。

その一方、じわじわと海面が上昇していた。海面上昇に加え、台風やサイクロン、ハリケーンの超大型化による強風等により、二〇〇〜三〇メートルを超える高潮が沿岸地域を頻繁に襲い、沿岸を浸食し、低地を水没させていく。多くの世界の沿岸大都市は水没するか、頻発する洪水に悩まされた。また大河川の河口に広がる広大なデルタ地帯も同様に水没して、人びとは広大な農地や生活域を奪われていったのである。

こうして数億人、いや数十億人におよぶ多くの人びとは居住場所や農地を失い、環境難民となった。人口稠密地帯であるアジアとアフリカから大量の環境難民が「北」へ押しかけていくことになったのだ。

食を求める大量の飢餓難民と住み処を探す大量の環境難民が

大挙して「北」諸国の大都市をめざした。これはまさに、かつての「北からの南下」した匈奴に代わって、食を求め住み処を求める大量難民の「南からの北上」であった。

だが「北」の大都市も疲弊し、以前の活気を失い、受け入れる余裕もなかった。年毎に激化していく異常気象に都市機能が追いつかず、大挙して流入する難民に食糧や水の供給も途絶えがちで、居座る大量難民に社会環境が急速に悪化し、衛生状態も極度に悪くなっていく。

都市は一大スラムと化し、一度感染症が蔓延すると、必ず大量死が発生した。現代科学技術文明の輝けるひとつの成果としての巨大都市の姿はすでになかった。大量の人びとが死んでいくただの死者の集積所にすぎなかった。

国連がいくら旗を振っても、各国は自国の対応で手一杯だった。とても他国の援助まで手が回らない状況だった。このような状況下で、食糧や水争いからはじまった小規模な戦争はやがて世界全体を引き込む大戦争への危機をはらんでいった。

大国が話し合いをはじめ、世界大戦争をなんとか食い止めたものの、大国も自国対応優先の姿勢を崩さず、さらに互いの利害と意思の違いから、一時の小康状態をえただけで、大戦争を完全に回避するまでにいたらなかった。

食糧不足は改善されず、異常気象のもとで、ところかまわず襲う大雨や洪水は農作物の生育を阻害したり、土壌を流出させるだけで、水不足を解消するどころかさなる被害を増大するだけだった。また世界を彷徨う難民はつぎつぎに力尽き行き倒れていくものの、いたるところで難民の列に加わるものが絶えず、さらに数は増えこそすれ減ることはなかった。

餓死者や感染症による死者がうなぎ上りに増えていく。その一方で、世界のここかしこで小競り合いや内戦がつついていた。各国とも増加する難民の越境を阻止しようと国境警備を強化し出していたのだ。だが時とともに次第に戦線が拡大していく。

現代科学技術文明のマイナス（負）の倍返しは地球温暖化だけではなくだった。化学物質でも見られたことだった。だがITや遺伝子技術、ナノ技術などの先端技術では、それが何倍返しになるか、いまだにその全容が把握し切れないのだ。人類は現代科学技術文明のプラスに酔い痴れたまま、なにも気付かぬうちに倍増し出したマイナスにうちのまさされて、やがて絶滅していくだけなのか。

現在地球上に発生している異常気象の原因について、いまなお人類の吐き出す二酸化炭素などの温室効果ガスのせいではないと言いつ張る科学者がいるらしい。なんと言おうと個人の自由だが、もし僅かでも人間のこころを持つているなら、それを真に受け、いやいや減んでいく人びとのいることをも考えて欲しいものだ。

専門知識を持つ科学者、権力を握る政治家や行政担当者、あるいは先端技術を駆使する大企業は、決して「想定外だった」などと言いつをせず、つねに最悪のケースを考え、対応策を考えるべきではないのか。ことに、現代科学技術文明が限界を超えて、巨大化高度化大量化してきたことを考えれば当然のことではないか。

現代科学技術文明は人類に絶大なプラスをもたらした。だが同時に、人類に絶滅の危機へ追いやっている。これは現代科学

技術文明はプラスを巨大化高度化大量化したと同時に、そのマイナスをも巨大化高度化大量化してしまっているということではないのか。

ITから人間を超えるロボットが作り出され、人間に取って代わって人間を支配していく。遺伝子技術を駆使して、超人類をデザインしたデザインベビーが誕生し、超人類社会がつくり出されていく。ナノ技術を用いて超錬金術が開花して、異次元の世界をつくりだしていくかもしれないのだ。

そのとき、どんなマイナスが現われるのだろうか。

目の前に、荒涼とした風景が広がっている。人影はない。ヨウはハクリが去った後、眠りのなかでみた夢を思い返した。

「あれは夢でなく、現実だったのか」

上空を機械音を轟かせ、無人機が飛び交う。時折、ミサイルが尾を引いて飛んで行く。獲物を見つけたのか。それとも、生き残りの人影に反応したのか。

拡大していった戦線が、ついに大国同士の争いへと発展したのか。

日本にも無数のミサイルが飛来した。東京、大阪、名古屋などの大都市が標的だった。さらに、沿岸部に集中立地していた原発や使用済み核燃料の再処理工場など各種の原子力施設も狙われ、つぎつぎに破壊されていった。

運転中の原発は少なかったが、日本列島を取り巻くように沿岸各地に立地され、廃炉を待つ休止中の原発には、行き場のない使用済みの燃料棒が炉内や建屋内のプールに一時保管という名目で大量に残されていたのだ。これらの使用済みの燃料棒は

崩壊熱を取り除くために常時冷却する必要があったが、ミサイル攻撃によって電源を絶たれ、冷却用設備も損傷を受け、冷却水の循環が途絶えてしまう。

やがて燃料棒は崩壊熱で溶融し出し、水素爆発を起こして建屋も壊われ、炉はメルトダウンの状態に陥る。建屋内にある燃料棒の一次保管用プールも破壊され、保管中の千数百本にもおよぶ大量の使用済み燃料棒が剥き出しのまま散乱し、広範囲に高レベルの放射能を放射しつづける。やがて、散乱した燃料棒は崩壊熱で溶融し出し、核分裂がはじまるのだ。

日本では「黒の集団」が仕掛けた化学物質の高度汚染に加え、全土のほぼすべてが放射能に汚染されていった。

そのなかで、永遠の命を有するヨウとミサは、なんら為す術も無く、じつと荒涼とした風景のなかに佇んでいた。

「ヨウちゃん、どうする……」

ミサはヨウに目を向ける。ヨウは地平に目をむけたままだつた。

とうとう人類は絶滅してしまうのか。ヨウは無力感に打ちのめされていた。

ヨウはふと、人類の絶滅と言いながら、絶滅すべき人間が一人もいないような気がした。もしかしたら、人類はずっとまえに絶滅してしまっていたのではあるまいか。そしていま人間面している人間は人間の皮を被った人間で、人間でない人間にすぎないのではないか。だから、すでに絶滅するような人間がいなかったのだ。

人間はいつから人間でなくなったのか。神を殺してしまった時か。それとも神になろうとした時からか。

人間が神になろうとした瞬間に、神になれない人間が生じた。それは人間としてのモラルも倫理も持ちえない人間の誕生であったというべきか。だから人間を人間と見ようとせず、人間が人間を殺してもなんとも感じないのだ。さもないければ年がら年中戦争に明け暮れ、殺戮をほしのままにすることなんか到底出来やしない。人間はずっと前から人間としての感性を失い、人を傷つけようが殺そうがなんとも感じない人間になっていたのだ。人間はもう人間でなくなっていたのだ。

それゆえに、人間は自ら創り上げた現代科学技術文明がその意図に反してもたらす巨大なマイナスをマイナスとさえ感じることができなかつたのではないか。現代科学技術文明が人類にどんなに悪影響をおよぼそうがなんとも感じないのだ。地球がどうなるうとお構えなしで、全く自分の行為を省みることがないのだ。いや、もしかしたら、人間は人間であることと引き換えに、なんら躊躇することなく、現代科学技術文明のプラスを享受する道を選び、その代償として人間であることを辞め、マイナスがもたらす人類絶滅の危機を甘んじて受け入れようとしていたのではあるまいか。そして人類は「茹で蛙」よろしく、自ら現代科学技術文明の生贄となる道を選んだのか。

ヨウとミサは人類の生き残り探しの旅へ出る。世界のどこかにまだ人間が生き残っているだろうか。

ふたりはようやく重い腰を上げる。行く先々にはなにが待ち受けているだろうか。人間社会に代わるロボット社会か、それともクローン人間あるいはデザイナーナーベビーの集団か、はたまた、超錬金術師たちのつくり出す偽金銀を張り巡らした欺瞞に

充ちた虚飾煌めく世界だろうか。

いや、その向こうに、きつとなにかがある。ヨウとミサはさらに旅をつづける。

以上が『天翔け地這う』第五巻のエピローグの全容である。

第一章 予感

「ヨウちゃん……」

ミサは壁一面のスクリーンタイプのデニスプレイに目を向けたまま、声をかける。返事はない。

いつものことだった。ヨウは返事せずに近寄り、背後からデニスプレイを覗き込むのだ。

だがヨウの気配はない。ミサは振り返る。

このところ、ふたりはかつての「天の組織地球支部」の残された建物にこもり、壁の巨大なデニスプレイに映し出される地球の状況をモニタリングしていることが多かった。

建物といっても高層のビルといったものではなく、ドーム型のいたってシンプルな体育館風の平屋で、壁際に大小に仕切られたブース用の空間が設けられているだけのものだった。

ふたりは一角の小さなブースを拠点としていた。といつてもべつにそこが専用の拠点ということではなかった。この建物にはふたりのほか誰も残っていなかったから、どこでも自由に出入りできるのだ。

ふたりにはそこが一寸だけ気に入っていただけにすぎない。というより「天の組織」のときからふたりが使用していたブースだったからだだった。

ヨウがどう思っているか分からないが、ミサにはここでなければならなかった。明くる年から小学校に入学するはずだったヨウと半死半生の状態で「天の組織」に連れて来られたとき以来馴染んできたところだった。

それにいまとなつては、ふたりには帰るところはどこにもな

いのだ。

地球支部の撤退にさいして、「天の組織」はふたりに地上に戻ることも提案したが、それには条件があった。組織を離れ、以前の状態に戻ることだった。ヨウが幼稚園児に返り、彼女自身も大学で助手兼教授秘書をしていた当時に戻ることになるのだ。

若さを取り戻すことはいいとしても、当時の状態に戻りたくなかった。彼女には耐えられないことだった。

「永遠の生命」を選べばその時点の資格好で身体の状態もそのまま永遠に継続するというのだ。これは他に変え難い魅力だった。

彼女は、そしてヨウもこの条件を受け入れ「永遠の生命」を選んだのだった。だがふたりとも忘れかけていたが、ふたりには共通の秘密があった。

「どこへ行っていたの……」

ヨウに気付いて声をかけようと思ったが、反射的に息を呑む。なぜか一瞬狼狽え、ミサは急いで壁の大型スクリーンに目を移した。

脳裏のスクリーンには二重写しになったヨウの長身の姿があった。ミサは目を落し、パソコンのキーボードを叩く。

「なにか、変わったことでも？」

いつもの声だった。ヨウが背後に立ってスクリーンをみている。

「ちよつと変な感じがするのよ、最近、地球が……」

ミサは息苦しきを感じ、ことばを濁す。

ヨウはスクリーンの地球に目を据えたままだ。

「うーん……」

「変よね、このごろ異常気象が多すぎるじゃない？ 突然、砂漠に大雨が降ったり、逆に、日照りが何日もつづいたり……」

最近といっても、二〇一八年のことだったが、アラビア半島の砂漠地帯を五月と一〇月にサイクロンが襲った。大雨が降ることのない砂漠に年二回もサイクロンが襲い、翌年、そのときの大雨で芽を吹いた草原に誘われるように異常繁殖したサバクトビバッタの大群が襲い、若芽を食い荒らし、世界中へ拡散していったのだ。

アラビア半島から中東の広い範囲へ広がり、アフリカ東部、南アジアへと移動したサバクトビバッタは、二〇二〇年には数千億匹もの大群となって、世界の二〇カ国を飛び回り甚大な被害をおよぼしているという。

最近頻発する極端な気象現象は大雨や干ばつにかぎらない。ヨーロッパ、アジア、オーストラリアでは熱波のような極端高温現象が増えているが、陸上だけではない。海洋でも「海面水温が極端に高くなる海洋熱波現象が起きている」という。その頻度も増え、強度も増しており、サイクロンやハリケーン、台風の巨大化ばかりでなく、海水の熱膨張や氷河水床の崩壊溶融による海面上昇も無視できないのだ。

「地球はどうなるのかしら？ 自然災害もますます巨大化しているようだし……」

ミサは低い声で呟く。ヨウはスクリーンに目を向けたままだ。

ヨウはなにを見ているのだろうか。スクリーンをチェックしているとき、不意にミサの脳裏を過った予感が浮かんた。

ミサは振り返り、ヨウをじつと見た。スクリーンに向けられたヨウの視線を追う。

「ヨウちゃん、どこか変なところある？」

「ううん……、でもどうして……。なにか変なことでもあったの？」

ヨウの瞳は大きく、幼稚園児のころと全く変わっていないかった。深く澄んでどこまでも透明だった。

「なんとなく変な感じがするの」

「変な感じって、どんな……」

「それは……」

ミサは一瞬スクリーンが暗闇に包まれたことを思い浮かべる。あれはきつとなにかの予兆に違いない。

「もしかしたら、地球に大きな異変が起ころうかも……」

「え？ ホント……、それはいつごろ……」

「さあ、いつごろかしら……」

「それじゃ、一寸調べてくるから待ってて」

声が消えると同時に、ヨウの姿も消えていた。ミサは急いで後を追う。だがすぐ諦めてスクリーンのまえに戻った。

第二章 第一 調査報告書

大新世紀（二〇〇〇年）に入っても、世紀末からつづいてきた世界のざわつきはおさまらなかつた。だがこれらはいまはじまつたことではないのだ。何年何十年、いや何百年もまえからつづいてきたのだろう。

人類の醸し出すざわつきは十八世紀後半にはじまつた産業革命で決定的になつたが、それよりもずっとまえから蠢き出していたにちがいない。

ヨウとミサには時間と空間を瞬間的に自由に往き来できる術があつた。ふたりは未来へ向かつてゆつくりと歩みはじめる。

未来への階段を一段一段上つていく。

ゆつくり一段一段といつても、スローペースで上つているわけではない。ふたりの階段の一段には年単位の時間があつた。一段上れば、一年、十年、あるいは百年の時間が過ぎるのだ。

それは突然の出来事だつた。

突如、世界の空を核弾頭を装備した無数のミサイルが飛び交つた。そして大気圏のいたるところで核爆発が起つた。

大気圏にかぎらない。地上や海中でも核爆発がつづく。

キノコ雲が立ち上る。地上から舞い上がった砂塵やさまざまな塵芥が空中に漂い、太陽光線を遮つた。

闇がひろがる。

ヨウとミサは天空の片隅で、地球がキノコ雲のなかに消えていくのを見守つていた。

なぜか。どうしてこんなことが起きたのか。

ヨウとミサは立ちつくしたまま、キノコ雲に包まれ薄れていく地球をじつと見つめていた。

「戻ろうか……」

ヨウは思い出したように、ミサを振り返る。

「……」

沈黙がつづく。

ふたりの視野から地球が完全に消えてしまつていた。

ふたりは気をとりなおして二〇〇〇年の地球へ戻るのだ。そして つぎはそこから、ゆつくり「核戦争（?）」が勃発した時点をめざそうと考えていたのだつた。

とにかく、「核戦争（?）」にいたつた経緯をたどり、勃発の瞬間を見極めなければならぬ。そしてその原因を探るのだ。

これがふたりに課せられた使命でもあつた。

ふたりは二〇〇〇年の地球へ向かつて、ゆつくり移動していつた。

(1) 二〇二〇年ー新型コロナウイルスとサバクトビバッタ

「でも、いまは二〇二〇年よ。ここがスタートラインね……」

「うん、でも……」

ヨウには二〇〇〇年から始めたほうがきりがよいように思える。

新しい大世紀（二〇〇〇年）を迎え、世界中が沸いたが、予期せぬ出来事が矢継ぎ早に起こる。

アメリカを襲つた同時多発テロ（9・11事件）、日本の原発大事故（東日本大震災）、世界不況（リーマン・ショック）な

どだった。

そして二〇二〇年。

その年、新型コロナウイルスが世界を襲った。新型コロナウイルス感染症は瞬く間に世界をパンデミックに陥れ、それから数年、各国は対策に右往左往する。

「それに『蝗害』もよ」

サバクトビバッタが大量発生して、大群が東アフリカから南アジアの諸国を襲っているのだ。

ミサは同意を求めるようにヨウの目を覗き込む。大きな黒目が一点を見ている。

地球を襲った新型コロナウイルスのパンデミックと大規模な「蝗害」は人類の未来にとって極めて暗示的な出来事だった。

これらは「突き詰めれば、原因は人類による過度な自然改造というところに行き着くはずだ」とか、あるいは「新型コロナウイルスのパンデミックは社会に大変革をもたらすにちがいない」などさまざまな指摘がなされた。

確かに、一四世紀にヨーロッパを中心に大流行したペストは封建社会の崩壊をもたらし、ルネサンスを呼び起こした。

全世界を巻き込んだ新型コロナウイルス感染症のパンデミックも現代文明社会の矛盾や国際体制の問題点を露にし、人びとや国々間の格差などがさらに拡大されていったものの、人びとには不満や不安が鬱積し、社会の変革への期待が渦まきだした。だが、いつまで待っても多くの人びとが指摘していたようなことはなにも起こらなかった。

人びとの期待を裏切り、なんの変化も変革も起こることなく、

いたずらに時が過ぎていつていた。

経済格差などもろもろの格差の根源である資本主義システムもそのままであつたし、ぐらつき出していた民主主義体制も手を打たれることもなく生き残っていた。

もはや、だれもが人類の未来を信じていなかったのだ。

いや、未来のこと考えることもなく、現実を忘れ、ネット社会の虚構に溺れてしまっていたのだ。

彼らには過去も未来もなく、瞬間のみで成り立つ虚構の世界でしか生きられないのだ。

新型コロナウイルス対策もひたすら御身第一で、他の人びとや社会は二の次だったにちがいない。まして世界や人類の未来に想いを馳せることなどさらさらないので。そして相変異して群生した「サバクトビバッタ」のように、彼らは電磁波渦巻く現代都市に群がり、いまの瞬間という「エサ」に群がり、「いまの瞬間」漁りの旅をつづけるだけだった。

(2) 新型コロナウイルス

二〇二〇年に新型コロナウイルスが感染爆発し、世界をパンデミックに陥れた。

二〇一九年一月二三日中国武漢市で二七人の「原因不明の肺炎患者」が発生した。これがはじまりだった。

二〇二〇年一月九日、政府が新型コロナウイルスを検出したと報道する。世界最初の新型コロナウイルス感染者だった。

新型コロナウイルスはまたたく間に世界に拡がっていった。約五カ月後の二〇二〇年六月一日午後五時現在、米ジョンズ・

ホプキンス大の集計では、世界全体で感染者は前日より約一二万人増えて計七二四万一〇七九人だった。死者は四一万一三二〇人に及ぶ。その月の末には一〇〇〇万人を超える。

だがこれらの数字は新型コロナウイルス感染爆発（第一波）のごく初期段階のものである。二〇世紀初めの「スペイン風邪」流行の例をみても、今後世界を襲うであろう第二波、それに続く第三波でその数は何十倍何百倍に増える可能性があるのだ。

ところで、ウイルスの形が太陽のコロナに似ているとして名付けられたコロナウイルスだが、これによる感染症の出現は初めてのことではない。今回が二番目で、新しい型のウイルスなので新型コロナウイルスといっている。これの正式名は『SARS-CoV-2』（重症急性呼吸器症候群を起こす二番目のコロナウイルス）である。なお、一番目のコロナウイルス感染症（SARS）は二〇〇二年中国で見つかり、アジアを中心に流行して約八〇〇人が死亡した。

新型コロナウイルスは感染力が比較的強いが、重症化するのはいないし二割程度である。その重症化原因のひとつとみられているのが免疫の暴走現象「サイトカインストーム（免疫暴走現象）」だ。これは人体の免疫細胞が異常に活性化する現象で、「サイトカイン（細胞から分泌されるさまざまな働きをもったたんぱく質の総称）」の過剰分泌による。細胞にウイルスが侵入すると、IL6などのサイトカインが分泌されるが、免疫細胞が増え過ぎると、さらに活性化し、コロナウイルスなどに感染した細胞だけではなく、正常な細胞まで攻撃して傷つけていく。コロナウイルスと闘う免疫細胞が患者自身に刃向かっていくのだ。こうして患者の病状は急速に悪化し、瞬く間に重症化する

のだという。

なお、「サイトカインストーム」は生体機能としては全く不可解な現象というべきであるが、この種の「狂い」がなぜか最近多いような気がする。あとでまた触れる機会があるだろう。

ところで、新型コロナウイルスの病理にはまだ分からないところもあるが、ウイルスの感染対策としては、大別して、つぎの二種が考えられている。そのひとつは「集団免疫獲得」をめざすものであり、もうひとつは「隔離政策」である。

前者はいわば新型コロナウイルスと仲よく共生共存しようというものである。これに対して、後者は新型コロナウイルスと敵対し、これから隔離して接触しないようにするものである。

今回の新型コロナウイルスパンデミックでは多くの国々で後者の隔離政策がとられた。その結果、「世界同時『鎖国』」の状況が生じ、グローバル化した世界で各国が孤立していった。「国境なき欧州」でもEU加盟国間の対立が見られ、国際社会には分断の危機が深まっていた。

パンデミック対応で必要とする国際社会における国家間の協調の乱れもさることながら、自国第一中心の国レベルや地域レベルの行動でいままで見過ぎされてきたさまざまな問題が一挙に吹き出し、拡大再生産されてあぶり出されてきた。

世界第一の新型コロナウイルス感染米国においては貧困層が大打撃を受け、感染による犠牲者もこの層に偏り、他の層に比して不釣り合いに多い。貧乏人と金持ちの階層間の格差は単なる所得の格差でなかった。それは社会的格差ともいえるべきもので、日常的に社会のすべての面での不平等が深刻で極端なのである。これに新型コロナウイルスがさらに拍車をかけている

のだ。

貧困だけをみても、「新型コロナウイルスの大流行により、世界中で四億人以上が貧困状態に陥り、貧困問題が十年以上前に逆戻りする恐れがある（国連大学の研究所二〇二〇年四月）」という。

このほかの問題も忘れてはならない。新型コロナ以前から、国連は「誰ひとり取り残さない」ことを目指すSDGs（持続可能な開発目標）では『貧困をなくそう』をはじめ一七の目標を掲げている。だが、それらすべても新型コロナウィルスの影響を受け、大幅な後退を余儀なくされることだろう。

二〇三〇年の実現を目指すSDGsの一七の目標はつぎのとおりだ。

- ① 貧困をなくそう
- ② 飢餓をゼロに
- ③ すべての人に健康と福祉を
- ④ 質の高い教育をみんなに
- ⑤ ジェンダー平等を実現しよう
- ⑥ 安全な水とトイレを世界中に
- ⑦ エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- ⑧ 働きがいも経済成長も
- ⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう
- ⑩人や国の不平等をなくそう
- ⑪ 住み続けられるまちづくりを
- ⑫ つくる責任つかう責任
- ⑫ 気候変動に具体的な対策を
- ⑭ 海の豊かさを守ろう

⑮ 陸の豊かさを守ろう

⑯ 平和と公正をすべての人に

⑰ パートナリーシップで目標を達成しよう

二〇二〇年からはじまった新型コロナウイルスの世界的な大流行が一段落したのは数年後であった。だがアフリカ大陸だけは別だった。大陸各地で新型コロナウイルスの小火がくすぶりつづけ、なかなか終息することはなかった。そして小火が大火になつて、さらにいつ拡がるか、世界中が固唾をのんで見守もつていたのだ。

だが問題は別のところにあつた。「パンデミック克服後には全く違う世界に向かう」という期待は完全に裏切られてしまつていた。

新型コロナで世界は大不況に見舞われた。打撃を受け破産に追い込まれる企業も多かつたが、そのなかで経済活動だけは活発に動き出していた。ことに米国の情報産業を担う巨大IT四社（GAF A）はコロナ禍の下でも着実に業績をのばしていたのだ。

だが新型コロナウィルスパンデミックで傷ついた国際社会はなかなか元に戻ることができずにいた。各国とも国際協調をすつかり忘れ、相変わらず「新自由主義経済」を掲げ、自国第一主義の弱肉強食を繰り返していた。

一層の成長を目指す新自由主義経済のもとで経済格差がますます拡大する一方で、社会格差も拡大していき、社会システム全体がますます不安定化していった。

新型コロナウイルス後の世界には自国第一主義が蔓延し、経済成長第一を目指す国々や企業活動の渦巻く国際社会はまるで戦後（第二次世界大戦後）の闇市のように混沌をきわめていた。

世界不況が長引くなか、誰もが新型コロナウイルスに追われ、パンデミック後の新しい世界を描くことを忘れていたのかもしれない。それともパンデミック後は自然に元の世界に戻ると信じきっていたのだろうか。

だがパンデミック後には元の世界は残っていなかった。というより、新型コロナウイルスはパンデミックの終息とともに前の世界をも闇のなかに葬ってしまい、空虚な空間だけが残されていたのだ。

新型コロナウイルスの温床であった人口稠密な大都市にはますます人びとが集まり、以前以上の混雑を取り戻していた。こうして一層の「感染症温室」化を押し進め、新たな感染症を迎え入れる準備が整えつつあったのだ。

人びとはすっかり新型コロナウイルスのことは忘れていた。それよりもひたすら以前の世界に戻ってきたのだと信じようとしていたのかもしれない。

一方、世界は、矢継ぎ早に、さまざまな国際的問題や地球的問題に襲われた。だが自国第一の国々のみで、リーダー役を欠く国際社会は全く対応しきれず、時を追うごとにこれらの問題が深刻化していった。それなのに、国連は未だに第二次世界大戦戦勝者クラブを脱しきれず、常任理事国は相も変わらず自国本位に「拒否権」を振り回していた。

国際協調が必要な時に、各国ともばらばらに新型コロナウイルスパンデミックの後始末に追われ、国際問題や新しい課題をかえりみ

る余裕がなかった。たいとえ問題の深刻化に気付いたとしても、手を出すことができず、見て見ぬふりをするほかなかったのだ。

(3) 蝗害ーサバクトビバッタの被害

同じ頃、新型コロナウイルスと競うように出現し、アフリカ大陸で暴れ出したのが、サバクトビバッタの大群だった。「蝗害」ともいわれ、この大群に襲われると、農作物は壊滅的な被害を被ることになるのだ。

「バッタの大群の被害がアフリカにでているの？（朝日新聞二〇二〇年二月一五日付解説記事）」によると、「サバクトビバッタ」数千億匹が発生、一日に三万五千人分の食糧を食べてしまふ」という。

バッタ（サバクトビバッタ）はアフリカ東部のケニア、エチオピア、ソマリア諸国で発生したが、ケニアでは過去七〇年で最大の群れが発生し、エチオピアやソマリアでも過去二五年の最大規模だといいい、全体で数千億匹以上になるというのだ。

昨年末、雨の減多に降らないこの地域をサイクロンや大雨が襲った。これがバッタ大群発生の原因となったという。四月にも大雨が続く、バッタのエサとなる草木が芽を吹き、バッタの大繁殖をよんだのだ。

国連食糧農業機構（FAO）は「対策を取らなければ、バッタの数は五〇〇倍になる」と予測している。

バッタは一日自分の体重ほどのエサを平らげる。バッタの群れは一日三万五千人分の食糧を食べてしまうという。大群に襲われると、豆やトウモロコシなどの農作物が壊滅的な被害を被

るのだ。

バッタの移動距離は一日一〇〇キロを超える。バッタの群れが通り過ぎたあとには抱腹のバッタの代わりに、食糧難にあえぐ飢えた人の群れが残されるのだ。

バッタ（サバクトビバッタ）は通常個体でばらばらに棲息しているが、砂漠地帯で大雨が降って環境状態が好転すると相変異を起こす。そして孤独相から群生相へ転換したサバクトビバッタは大発生し大群を形成して移動をはじめ。

群生相のサバクトビバッタはからだもひとまわり大きく、飛翔能力も高まる。一日一〇〇ないし一五〇キロも移動するといふ。

相変異したサバクトビバッタの大群は環境状態が変わり「えさ」が豊富になった地域を指して飛び立つ。そしていたるところで繁殖を繰り返しながら飛び回り、アラビア半島を越え、南アジアの諸国から中国に達するという。

(4)新型コロナウイルスパンデミックそしてサバクトビバッタの大量発生

二〇二〇年に人類を襲った新型コロナウイルスの世界的大流行（パンデミック）、そしてサバクトビバッタの大量発生は一見ありきたりの出来事のように見えたが、実は人類の未来にとって極めて暗示的だった。

二〇二〇年に人類社会を襲ったこのふたつの出来事「新型コロナウイルスのパンデミック」と「蝗害ーサバクトビバッタの異常大発生」はともに現代科学技術文明と密接に関係するもの

であった。

いいかえれば、両者とも現代科学技術文明下の異常な人間活動に起因するということだ。すなわち新型コロナウイルスのパンデミックは現代科学技術文明がつくりだしたヒトモノのグローバルな高速移動システムと人口稠密な現代都市システムにのってパンデミック化を引き起こしたといえるし、サバクトビバッタの大発生も乾燥地帯に突如大雨を降らせた気象異常が原因だ。これも人間活動による地球温暖化に起因するものである。

ふたつの出来事はともに人間の仕業にもとづくものであり、これらは現代科学技術文明と深く関係するということである。

三〇〇年ほど前の科学革命で誕生した近代西洋（科学技術）文明が石炭や石油などの化石燃料を基盤とする巨大エネルギーシステムを掌中にし、世界文明化していった。その武器となつたのが近代科学であり、それと技術が手を繋いで科学技術となつた。

その科学技術が大きく成長し、今日、人間のコントロールを離れて暴走し、人類に刃向い出しているのだ。

科学技術が化石燃料にかわるエネルギー源として原子力を手に入れ、さらに巨大化高度化大量化の道を進んでいった。そして近代科学を基礎に発展した科学技術文明が今日の現代科学技術文明へと様変わりし、いまや地球をも破壊しようとしているのではないか。

なぜか。なぜなのか。

新型コロナウイルスを覚醒させ、パンデミックをもたらしたのは、言うなれば、これも行き過ぎた人間活動のせいだったのである。無謀な自然開発によって野生生物の生息地を奪い、ウイ

ルスの宿主を追い出し、ウイルスを呼び覚ましてしまい、人間本位の自然改造でつくり出した人口稠密な都市社会システムが新型コロナウイルス感染拡大の温床となったのだ。

新型コロナウイルスパンデミックは高速移動かつ超効率を追い求めた人間活動のひとつの帰結にほかならず、現代人の科学技術を駆使した自作自演の悲喜劇というべきものではないか。

知的生きものと自認する現代人には分かり切ったことなのに、パンデミックを目の辺りにして慌てふためき、自ら招いた新型コロナウイルス感染症の退治に躍起となっている。すべてが自ら引き起こしたことなのにすっかり忘れて……。

もう一方のサバクトビバッタ大発生も同様だった。これも人間活動に起因する地球温暖化による異常気象が原因だったではないか。

地球温暖化のせいで、雨の殆ど降らないサバクに突然サイクロンが襲い、大雨を降らせ、それで芽を吹いた草木がサバクトビバッタに大量のエサを提供することになったのだ。

大発生したサバクトビバッタは産卵を繰り返しながら、群生相へと相変異して飛翔距離をのばし、広大な範囲を飛び回り、世界中で農作物を食い荒らし食べつくしているのだ。

サバクトビバッタの大量発生による農作物への被害をくい止め、多くの人びとの飢えや食糧不足の発生を防ごうとサバクトビバッタ対策として大量の農薬散布が実施されている。これには大量の殺虫剤や農薬が使用されるが、新型コロナウイルスのパンデミックのためにこれらの輸送に支障をきたし調達できずにいるらしい。

殺虫剤や農薬が使用できなければ、サバクトビバッタを退治

できないが、殺虫剤や農薬の使用が減る分だけ化学合成物質による土壌汚染や収穫農作物の汚染も減ることになるだろう。だが、食糧不足は幾多の飢餓犠牲者を招く……。

このように、サバクトビバッタの退治のために現代科学技術文明の産物である殺虫剤を大量に散布すれば食糧不足を回避できるかもしれないが、殺虫剤散布による化学物質の汚染被害を避けることができないのだ。これらはすべていうまでもなく人間が自ら引き起こしていることといえるだろう。

(5) 暴走しつづける現代科学技術——現代科学技術文明はどこへ向かうのか①

新型コロナウイルスパンデミックが終息しても世界はなにも変わらなかつた。というより、世界は以前より一層分断し、ばらばらになった。

もともと世界がひとつになって新型コロナウイルスに立ち向かうこともしなかつたのだ。グローバル化に向かっていた各国とも、新型コロナウイルス感染対策については「国境を越えて連帯」するよりも「国境で分断する」「自国本位の対応を選んでいたのだ。

新型コロナウイルスは現代科学技術文明社会の欠陥をあばき出した。社会的・政治的・経済的・文化的なさまざまな問題を突き付けたが、ウイルスの波が収まると、世界はこぞつて成長を求めて堰を切ったように経済活動に向かっていったのだ。

もし、このまま環境破壊や環境汚染が続けば、さらに新しいウイルスが暴れ出し、人間社会を脅かしつづけるだろう。

だが新型コロナウイルス対策もそこに経済活動にもどつてしまった国々には新たに出現したウイルスに果たしてうまく対応することができるだろうか。分断第一だった国々には新たなウイルスに向かう力や方策がどれだけあるだろうか。つぎつぎに出現する新たな感染症に対して現代科学技術にどんな手が残されているのだろうか。

科学技術開発の担い手は科学者個人であつたり、企業などの組織体あるいは国などが主体となつて行われているが、これらの主体の新感染症のための新薬やワクチン開発はどうか。科学技術開発活動においてはそれぞれの思惑や利益のもとで個々的におこなわれるのが通例である。それも多くは秘密裏にだ。いいかえれば、世界の科学技術開発は全体的視点に立つて総合的に行われることはなく、専門別に狭い範囲で個々の的にてんばらばらになされているのだ。それも秘密裏に自分勝手にそのうえ我先にだ。その結果、科学技術の進展はばらばらで跛行的になつていくことになる。

新型コロナウイルスのワクチン開発などの例をみても、個々の企業や各国はそれぞれの利益や思惑に左右され、国際的な連携のもとで行われるべきものであつてもなかなかそうはいかなかつたではないか。

最近のとくに著しい傾向は、AI技術関連の開発競争である。各国とも大学や企業に軍事関係が加わり、しのぎを削っている。というより、これらがひとつになつて協力しAI関連の技術開発に取り組んでいるとみるべきではないか。

というのも、技術開発も大型なつており、そのための費用も

巨額になり、個人で工面できない額になつていくからでもあるが、このような技術開発はどこへ向かうのだろうか。

AI関連（人工知能関連情報技術全般）のほかにも、遺伝子技術、ナノ技術などもさまざまな問題を抱えているが、やはり問題なのは軍事技術に関わる技術開発である。なかでも、自律型ロボット兵器に関わるAI軍事技術がとくに問題である。

今日、科学技術開発の分野では個々の担い手が勝手気儘に先陣争いを重ねているが、軍事用と民生用の区別もあいまいなものも多く、その区別が判然としないまま実行されているものもかなりある。

問題は技術開発に軍事関係の多額の研究費が絡んでくることであり、まるで闇夜をヘッドライトなしに猛スピードで競争するカーレースのような事態が生じ易く、なにが起る分からはなということだ。

最近の技術開発においては、技術の汎用性から軍事用が民生用に転用されたり、民生用と思つていたものがいつの間にか軍事用に変貌したりすることが多く、その区別が曖昧なことである。その典型例のひとつがAI関係の技術開発であろう。

それに合わせるように、最近「戦争」自体の概念も意味も変異し変化してしまつてきているのか、企業における技術開発の「軍事技術」関連のなかには軍のそれを超えているものもある。以前は軍人だけの戦争だったのが、近年では国民全員の総力戦となつたのもつかの間、いまではそれも超えてしまつていくといふことか。

戦争はいまではすっかり姿を変えてしまい、直接兵器を使用しないものの、戦線もグローバルに拡大し、外交といった国家

間のやり取りから経済分野における競争においても、戦争のようなりとりが平気で行われている有様ではないか。このような状況が国際社会全般に拡がってきているのである。

「いつのまにか、AI（人工知能）そのものが個々の国家や企業と直に競争することになったのかもね。こんな状況なかで世界は核戦争へ突入していくのかしら……」

後を追っていたミサはようやくヨウをつかまえる。そしてヨウと並んで歩き出した。

「技術（AI）と人間が戦争しているということ？」

ヨウは腑に落ちないのか、低い声で呟く。

「いいえ、そうではなくて、もしかしたら、AIが人類に戦争を仕掛けているのに人間はそれに全然気付いていないということかしら。その証拠が……」

「証拠？」

「……」

ミサは一瞬、言い淀む。そしてつづける。

「国家間の経済競争や政治の駆け引きもすべて形を変えた国家間の戦争と考えるべきだと思うわ。いま、世界はあらゆる面で戦争状態にあるのよ。各国とも軍備拡張に血道を上げています。これは狭義の戦争だけのものではなく、それもこの種の戦争を含む広義の戦争にも勝利するためのなのよ」

ミサは言い切る。

「でもそれは……」

ヨウがちらつと目を走らせる。

「いまは各国（大国とその同盟国か）が狙いをつけて着々と開

発が進めているのが『LAW S（自律型致死兵器システム）』ね」

これは人工知能（AI）を搭載して自律的（自分勝手に決めることができるということ）に標的（人間やモノなど）を定め、殺傷あるいは破壊できる兵器である。たとえば、ドローンなどの「無人兵器」の類いにAIを搭載するものであるが、実戦配備は時間の問題となつている状況にあつた。

とくに問題なことは、この種の兵器が人間のコントロールを超えるかもしれないことだつた。いや、超えつつあるのだ。

AIの判断で自律的に動き、標的を破壊するとしても、それよりもAIの情報処理能力が人間を上回り、人間がコントロールできなくなる恐れがある、ということが問題なのだ。だが軍事技術の開発において、そんなことは無視されがちだ。

「でもAIが経済競争をおこなうということは、それは人間がAIを使つてやっていることでは……」

「そうよ。でもそれがいつのまにかAIが独自の判断で行動するようになっていく、いや、もう、なっているかも……」

これは軍のことだけの問題じゃない。軍事関係の最先端の技術開発といえども、いまでは軍の専売特許じなくなつている。個々の企業でも軍以上の技術開発をおこなっているところもあるのだ。

「へー……、でもそんなことは別に問題となることでもないじゃないの。これまでもそんなことは無視されて問題にもならなかつたように思えるけど……」

「研究テーマは個々の研究担当者（機関）が決めることが多かったからそう思えるのかも。でも軍事関係の技術開発となると極

秘にする研究もあって、誰もが手を出すというわけにはいかな
いこともあるのよ。というより技術開発には垣根がないとい
うか、軍事用でも民生用になるし、民生用に開発されたものでも
軍事用へ利用されることもあるということかしら……」

技術開発においては軍事用民生用の区別が曖昧というより、
はじめからそんな区別は存在しえないというべきかもしれない。
大量殺戮兵器は軍事用ということになるが、この製造のための
個々の技術となると軍事用かそうでないかの区別は必ずしも判
然としない。大量殺戮兵器製造の技術であるとしてもその技術
が民生用の製品製造に使用されることもあるからだ。

このようなことは大なり小なり以前からあったことであるが、
デジタル技術などIT産業関連の技術開発が盛んに行われるよ
うになって以来両者間の区別の曖昧さが一段と増してきたとい
えよう。いいかえれば、どんな民生用の技術でもつねに軍事用
に転用されるおそれがあるし、その逆も当然ありうるというこ
とである。だが、人間以上の知力を持つ自律型AI技術はこれ
までの技術と質的に全く異なるものなのだ。

(6) 暴走しつづける現代科学技術——現代科学技術文明はどこへ
向かうのか②

『LAW S (自律型致死兵器システム)』を手に入れてなにを
しようとしているのかしら……」

ミサはため息をつく。

「どんなことが起こるといふの」

一瞬、ヨウの目が光る。

近代科学(技術)が現代科学技術へと変貌したのは、第二次
世界大戦(太平洋戦争)の末期である。核(原子力)爆弾開発
がそのモニュメントだった。

新しく出現した「現代科学技術文明」はひたすら巨大化高度
化大量化を目指してひた走り、瞬く間に、地球に刃向かうもの
となつていったのだ。

以前の「近代科学(技術)文明」と新しい「現代科学技術文
明」はともに科学技術中心の文明であるが、両者は質的にも量
的にも異なるものである。そしてその現代科学技術文明がいま、
AI技術で新兵器(「LAW S」(自律型致死兵器システム)な
ど)を育てながら未来へ向かつて一目散に走り続けているのだ。

科学技術は産業革命をもたらした西洋近代科学文明から現代
科学技術文明へと質的転換した。そしていまさらなる質的転換
を試みているというわけだ。

「もつと先へ行って見ようかしら……」

ミサは未来への扉に手をかけ、そつと押す。

地球は人類にとってかけがえのないものである。両者は切つ
ても切れない関係にあるのだ。地球は人類の単なる住み処では
ない。人類は地球で生まれ、地球に育てられたのである。

にもかかわらず、現代科学技術文明の土台となつた西洋近代
科学は人間と自然(地球)をすばつと切り離してしまつたのだ。

その結果、近代科学文明は自然(地球)を支配下に置き、自由
気儘にいじくり回すことになつた。そして今日の「地球に刃向
かう現代科学技術文明」へと変貌していったのである。

科学技術はそれを担う個々の主体(科学者(個々の人間や企
業など官民にわたる種々の組織体))の好き勝手な方向に暴走

をつづけている。

今日、現代科学技術文明は一層専門ごとに細分化され、それぞれが独立の道を進んでいる。すでにその全体像を把握することは難しく、取り返しのきかないところまで来てしまっているのである。

たとえば、遺伝子組み換えに関する研究においては対象である人間や自然の全体像を置いてきぼりして遺伝子の組み換え技術の開発のみを極めるとか、部分的専門的な特殊な技術のみを対象に研究を進め、全体を忘れた部分的でばらばらな技術のみを生み出しているのだ。そしてまるで機械の部品を取り換えるように人体の臓器移植がおこなわれているではないか。

遺伝子組み換えによって収穫量の多い稲や麦が開発されれば食糧不足対策にもなるが、健康への害はないか、生態系への影響はどうかといったことへの配慮も重要なことではないか。

物理、化学、医学等の自然科学等の分野では、たとえば、AIなどの情報科学、ミクロレベルの分子生物や化学合成技術、遺伝子組み換え技術などの驚異的な進展の一方で、一刻も早い解消解決が望まれる地球環境問題、資源枯渇問題、人口過剰問題等の全体的な問題は放置され、ますます細分化され専門化された分野の研究開発が激化している有様である。

「このままでは人間は自らの活動によって滅んでいくことになる……」

ヨウだ。ヨウがこんなことを言うとは考えてみたことがなかった。

ミサは振り返り、なぜか盛んに身体を動かしているヨウをま

じまじと見る。

目が合った。ヨウが立ち上がる。

「様子を見てくる」

じりじりしていたのか、突然ヨウが飛び出す。ミサは身動きせず、目で追う。

ヨウの姿が闇に消えた。

ミサは切り裂かれた闇を見つめたまま、新型コロナウイルスに襲われた大都市ののたうちまわる情景と、サバクトビバッタの大群に襲われた緑の大地が瞬く間に食い荒らされ、やがてサバクトビバッタの死骸に埋め尽くされて褐色の地に変貌していくさまを思い浮かべていた。

新芽を食べつくして死んでいったサバクトビバッタの大量の死骸の山に、新型コロナウイルスのパンデミックを呼び起こした現代科学技術文明のもとで息を絶えていく人びとの群れが重なった。

大地の片隅でじつと孤独の生活を楽しんでた孤独相のサバクトビバッタが突然相変異を起こし、羽の長い褐色の群生相に変異して地球を飛び回り、エサを漁り、大量の子孫（卵）を残していたのだ。

(7) 暴走しつづける現代科学技術——現代科学技術文明はどこへ向かうのか○

ブースに戻ってから、ミサは壁のスクリーンに目を据え付けたままだった。

葉を食い荒らされた灌木に無数のサバクトビバッタが重なり

合つてへばりついている。そのまま死んでしまったのか、それとも交尾の真最中か。

サバクトビバッタが動き出すのを待った。時が止まっているのか、それともサバクトビバッタは動くことをわすれてしまったのか。

ただ待った。

ヨウのことが頭を過る。

サバクトビバッタと人間は同じ生きものでありながらこうも違うのはどうしてか。

新型コロナウイルスのパンデミックに対する人間の行動（人体の反応）はまさにウイルスに敵対する戦闘行為そのものであるが、人間の戦闘行動（人体における防御反応）はお粗末過ぎる。

人間という動物にも健康を維持する生体防御機構がある。病原菌などの異物が生体に入ってくると、これらを排除して生体の恒常性を保とうとする仕組みが働く。これが「免疫」という生命現象である。

「自己」を認識し防御する免疫系の働きによって生命は維持され、その機能不全は病気と死をまねく」のだ。

この免疫機構が機能するには生体に侵入してきたものが生体を構成するもの（「自己」とそうでないもの（「非自己」と）に明確に区別され、非自己は異物として認識され攻撃の対象とされるのだ。そうなつてはじめて生体における免疫という生命現象が発現するのである。

ということとは、免疫が発現するには前もつて「非自己」と「自己」とを識別し、「非自己」を異物と認識することができな

ければならないのである。これが免疫機構発現のための第一のプロセスであり、つづいて異物（病原菌など）に対する免疫細胞の攻撃がはじまる。

問題は、まえにも触れたように、新型コロナウイルス感染者に「サイトカインストーム（免疫暴走現象）」が発生することがあるということだ。

新型コロナウイルスは感染力が比較的強いが、重症化するのはいないし二割程度である。その原因のひとつが免疫の暴走「サイトカインストーム（免疫暴走現象）」ではないかというのだ。

ミサの頭の中でひとつの考えが動き出した。

「サイトカインストーム」とは人体の免疫細胞が異常に活性化する現象で、「サイトカイン（細胞から分泌されるさまざまな働きをもつたんぱく質の総称）」の過剰分泌によるものだ。

細胞にウイルスが侵入すると、IL6などのサイトカインが分泌される。これに呼応して免疫細胞が増殖をはじめ、免疫細胞が増え過ぎると、免疫がさらに活性化し、コロナウイルスなどに感染した細胞だけではなく、正常な細胞まで攻撃して傷つけていくのだ。この現象が「サイトカインストーム」で、コロナウイルスと闘う免疫細胞が患者自身の細胞（自己）に刃向かつていくということだ。その結果、患者の病状が急速に悪化し、瞬間に重症化していくらしい。

なぜか。なぜこんな現象が起こるのか。これでは生命を維持するための免疫系自体の自殺行為ではないのか。

「サイトカインストーム」は生体防御機構の生体維持機能とつては全く不可解というはかない現象であるが、この種の「狂い」

がなぜか最近多いような気がする。

現代科学技術文明の進展に応じてさまざまな化学物質の人工合成があつたと絶えず、人体や自然（環境）を汚染する「異物」も増え続けていることもこれと無関係であるまい。たとえば、病院などの医療機関で使用されている多種多様な薬剤も化学合成物質のひとつであるが、これらのなかに「サイトカインストーム」を増長するものはないのか。薬剤のなかにはある病原菌に極めて有効に作用するものでも自己細胞を破壊する激しい副作用があることもあるのではないか。それも「サイトカインストーム」のように患者の体内でその種の副作用物質が作り出されることはないのか。

ミサはスクリーンに目を据えたまま、新型コロナウイルスに対する人間と環境条件の急変に対するサバクトビバッタの対処の仕方の違いが気になつて仕方がなかつた。

人間もサバクトビバッタも同じ生きもの（動物）であるのに、生命の危機に直面しての対応基準が全然異なるのだ。前者は現世個体主義であるのに対して、サバクトビバッタは種の強化永続を目指しているように見えるのだ。

人間の感染症対策はいま生きているひと中心であるのに対して、サバクトビバッタは大量の産卵を繰り返し、短期間に世代交代を頻繁におこなひ、よりよい環境適合種を生み出そうとしているのではないか。

これに対して、文明化した人間は文明の利器を手にした途端、現世主義に徹し、いま生きている個体の命だけに目を向け、全体の種の保存を放棄したのではないのか。そして今日の「いま生きるもの」第一主義の人間文明を築き上げてきたのだ。

「これでいいのかい？」

天の奥から半ばからかい気味の声が響いてきた。その声は衰えることなく地を這うように転がっていく。

ミサは声のした方に目を向け、それからゆつくり身体を回してまわりを見回す。スクリーンは消え、誰もいない。声だけがひたひたと押し寄せてくるのだ。

「『サイトカインストーム』か……」

ミサが呟く。いつもの声ではなかつた。

彼女は自分の声を確かめるように、「サイトカインストーム」と、もう一度ゆつくり呟く。

何度こころみても無機質の機械音だつた。

彼女はふと、世界が、現代科学技術文明で構築された世界が崩れていくのを感じた。

「そうか。そうであつたのか」

あれは人類が営々と築き上げてきた現代科学技術文明システムが内部から潰れた音だつたのだ。

第三章 第二調査報告書(一)

「もう終わりか…」

声が出た。途中から消え入るような細い声だ。だがその透明な声は減衰することなくどこまでもころがりつづけていく。

ミサは消えた声のほうに目を向ける。
闇になかで人影が動く。

「ヨウちゃん?…、ヨウちゃんね」

ヨウが足早に近づいてきた。白い顔が薄黒く汚れている。白いシャツにも黒い斑点のようなしみが無数にあった。

「どうしたの?」

「うん……」

ヨウは両手で顔を拭いながら、地球を一周してきたという。突然地球が崩壊し出しているように見えたので足をのびして見えてきたらしい。

「どうだったの? 崩壊したっていうけど、地球のどこがどうなってしまったっていうの?」

ミサはヨウが地上を点々と動き回っている様子を思い浮かべる。

「……」

「どんな様子なの?」

「どこにもヒトの姿がないんだ……、人類はどうしてしまったのか……」

考え込んでいるのか、ヨウは首を傾げたままだ。

ミサはスクリーンのままでヨウが見てきたという事象の断片を繋ぎ合わせていく。いくつかの組み合わせのなかから、もつ

ともありそうなケースを抜き出し、頭の中でシュミレーションを繰り返す。だが選んだケースが現実を起こるとは限らない。

地球に、この世界に、なにが起きたというのか。

ミサは口の中で同じことを呟きながら、頭の中でシュミレーションを繰り返していた。

ヨウは作業机から動こうとしないミサに近づき、「ふたりで徹底的に調べてみようとおもって急いで戻って来たんだよ、ぼくは……」と苛立たそうに叫ぶ。

「ヨウちゃんほどのようになにを調べればいいと考えているの?」

ミサはヨウをじつと見つめる。再び地球を歩き回ったところでヨウの報告以上のことはなにも分からないだろう。かといってスクリーンのままで映し出される映像のチェックをつづける気にもなれないのだ。

「ヨウちゃん、徹底的に調べてみようか? ねえ、一緒に……」

「……」
ヨウは急に態度を変えたミサに戸惑っているのか、大きく見開いた目をスクリーンに向けたままだ。

「さあ、ヨウちゃん……」

椅子から立ち上がり、ヨウをうながす。

ミサには地球がどう変化し、人間の世界になにが起きているのか自分の目でたしかめたい気持ちもあった。それよりもどうしてそのような事態にいたったのかを明らかにしなければならぬのだ。

これはかつて「天の組織」に半死半生の命を救われ、「永遠の命」を与えられたふたりのなすべきことでもあった。

「いつ、どこでどんなことが起つたの……」
ミサは何度も問い質す。だがヨウは応えない。

第四章 第二調査報告(二)

二一世紀に入っても、人間社会には平和が訪れることはなかった。世界のどこかで戦争や小競り合いが絶え間なくつづき、絶えることがなかった。五分の一世紀を過ぎた二〇二〇年までの二〇年のうちにも人類絶滅の予兆は何度もあった。

その度に、地球の見張り役のミサとヨウは時間との闘いに追われるものの、多くの予兆は予兆のまま消えていった。そしていつも何事もなかったかのように地球の時間は過ぎていく。だが今回は違っていた。予兆が予兆ではなかったのだ。

サバクトビバッタはどうだ。これも予兆といえそうだった。「世界最古の害虫」と言われ、異常繁殖による大発生はこれまでも何回も繰り返されてきた。

最近では、大発生による被害を予防するためのモニタリングや早期駆除システムなど国際的な対策も整備されていた。一例をあげれば、大群退治のためには大量の殺虫剤散布が行われるが、そのための国際協力も広くなされているのだ。もつとも使用される化学合成物質の殺虫剤には副作用があつて、人や家畜にはもちろん、農作物や生物生態系への悪影響もあるのだ。

このような新たな問題をも生み出しているが、対策面での国際協力が一段と進んできていたのである。

だが新型コロナ禍に災いされ、その「殺虫剤」の運搬もままならず、十分な対策ができずにいるらしい。

その間隙を縫うかのように、サバクトビバッタは着々と世代

を重ねて環境変化に耐える（あるいは人間のあみだす対策に対抗する）最強の種へと変異をつづけているのかもしれない。そしてやがて人間には手遅れの事態を招くことになるのか。

「ヨウちゃん、行きましよう」

ミサはちらりとヨウに目を向けたものの、そのままヨウを置いて歩き出す。なにも話さないヨウのことが気になっていたものの、一刻も早くなにか起きたのか自分の目で確かめたかった。

ミサを前にしてヨウはもう一度脳裏に焼き付いている出来事を思い返すが、口が動かない。それはヨウにとつてどうしても腑に落ちない出来事だった。

一瞬、地球全体がひとつの「火の玉」になったらと思つたら、次の瞬間、暗闇が襲つてきて、彼は暗闇のなかに閉じ込められていったのだ。

ヨウは暗闇が晴れるのを待った。だがいくら待っても暗闇のままだった。

いつの間にか眠り込んだらしい。目を覚ました時、暗闇が消えていた

朦朧とした状態で方々を彷徨つたのか、まわりの風景は一変しており、ヨウには自分が暗闇からどうやって抜け出したのか思い出せなかったのだ。

「ヨウちゃん、どんなことが起こつたの、この地球に……」

ミサはようやくやく追いついてきたヨウに目を向け、声をかける。

「うん……」

一瞬、ヨウは立ち止まる。言葉が見つからないのか、口を閉

じたままだ。

ミサはヨウを一瞥し、歩き出す。

ヨウはどんな未来を見たのだろうか。彼女はスクリーンの新型コロナウイルスとサバクトビバッタの画面を思い浮かべながら、ヨウが見た地球の未来を想像する。

未来への階段は地球から天へ向かって延びている。ミサは眼下に地球を見据えながら階段を一段そしてまた一段とゆっくり上っていく。

天へ向かう階段の一段の高さ（時間）はまちまちだった。一年の階段もあれば十年もの階段もある。左右に延びる階段の両端は薄闇の中へ溶けるように消えている。

ミサはヨウの気配を背中を感じながら、未来への階段の中央を一段、また一段と踏みしめながらゆっくり上っていた。ヨウもミサのあとを追う。

いつのまにか、ふたりは歩調を合わせて上っていた。

一段上るごとに地球は遠のき、まわりの景色も目まぐるしく変わる。

何段か上ったとき、突然、ヨウの足が止まる。その気配にミサもすぐ足を止め、振り向く。

「この辺だった……かな、地球が真っ赤に燃えていたのは……」

地球が「火の玉」になったときのことを思い出したのか、ヨウは身を屈め、透かすようにして地球を見つめる。

「どうかしたの……」と言いつつ、ミサは階段を上ることを止める。「しばらく様子をみる？」と言いつつ、ミサはしきり首を回して辺りを見渡した。

地球が一瞬身震いしたように見えた。

「地球が誕生したのは約五〇億年まえか……」

「そうね、正確には四六億年まえといわれているらしいわね」

ミサは訂正する。

「生命が誕生するのは……」

地上に生命の原形が生まれるまでにはまだ一〇億年以上の間が必要だった。

三五億年まえに生命があらわれ、還元バクテリアから藍藻類そして真核生物へと進化していった。その間に大気中の酸素濃度が増え、約五億年まえにはオゾン層も形成される。約四億年まえには陸上にも植物が進出して今日のような生物圏が形成されていったらしい。

「それで地球は……」

その地球は約五〇億年後最後を迎えることになる。太陽が膨張して赤色巨星となるからだ。地上の生物圏はそれよりもかなりまえに消滅することになるだろう（一億年から九億年後）。

「あの『火の玉地球』は……、なんだったのか」

「多分、それは……」というつと、ミサはなぜか口を噤んでしまう。

「地球は誕生時には『火の玉』じゃなかったの。無数の流星群が集まって星ができるんじゃないか？」

ミサは口を閉じたまま、じつとヨウを見ている。だがその目は空ろで、ヨウに向けられているだけだった。

「ヨウちゃん、ヨウちゃんが見た『火の玉』は地球の最後の姿だったかもしれない」

「え？　ほんと……」

ミサはヨウをじつと見た。

不意に、脳裏に火薬を詰めた茶筒を抱えた幼いヨウと手を繋ぎ小走りで駆けていたときのこと浮かんだ。火薬は線香花火を解体して貯めたもので、いつも悪臭のある黒い煙を吐き出しているゴミ処理業者の焼却炉を爆破する計画だった。

ミサはしばらくつぎつぎと現われてくる幼いヨウと過ごした遠いむかしの日々の出来事に身を任せていたが、ヨウの不審そうな視線に気付き、急いで目をそらす。

「ヨウちゃん、もうすこし地球に近づいてみない？」

「いいよ。でも『火の玉』にのまれてしまうかも……」

「そのときは、ヨウちゃん助けてね」

「うん」と応えながら、ヨウは地球に向かって下降をはじめている。

ミサもすぐあとにつづく。地球が近づいてくる。

「火の玉」の前と後に地球になにが起きたか詳しく知りたかった。というより、地球が「火の玉」となったということが理解できなかつたからかもしれない。

地球が「火の玉」となるとはどういうことか。全体がマグマに覆われ、地球が灼熱の球体となってしまったのか。もしそんなことになれば、人間はおろかあらゆる生命体が地球上から消えてしまうことになるだろう。

だが今の地球にそんなことが起こりうることなのか。

「ヨウちゃん、地球が本当に『火の玉』になったの？」

「……」

下降をやめたヨウは無言で頷くが、目は間近に迫ってきた地球に向けたままだ。

「ここですばらしく様子を見ましようか」

ミサは自分に言い聞かせるように言う。階段に腰を下ろす。そしてまた延々と思いを巡らしていく。

眼下の地球は何事もなかったようにゆっくり自転しながら、太陽の回りを回っている。誕生以来、こうして五〇億年もの年月を過ごしてきた地球がもうすぐ火の玉に化すというのだ。

地球の五〇億年もの長い歴史のなかで生まれ育てた人類も最後の時を迎え、やがて「火の玉」となった地球のなかで燃え尽きてしまうということか。

すでに五〇億年もの時を過ごしてきたのなら、地球もそろそろ終わりにしてもいいかもしれない。だが人類がいよいよ最後の時を迎え、明日にも絶滅することになれば、また別だ。

人類が地球上に誕生してから活動していたのは五〇億年の歴史のうちの何年間ぐらいだろうか。

正確には、地球が誕生したのは約四六億年前だ。生命のはじまりは三五億年ほど前で、真核細胞がつけられれば乳類などの真核生物が出現するのはその二〇億年以上もあとのことである。大気中の酸素が徐々に増え現在並になるのは漸く約四億年前のことだ。

そして人類が誕生するのは、それからずっと後のことであつて、約五〇〇万年前の出来事である。最初のホモ属は二四〇万年前から一六〇万年前のころで、ホモ・エレクトス（原人）は一六〇万年前から二〇万年前のころに出現した。そして現代人であるホモ・サピエンスの出現は一〇万年前で、それから人類が現代に向かって走り出したのだ。

社会生活をはじめた人類は、一年万年前に「農業革命」、六

〇〇〇年から五〇〇〇年前に「都市革命」を、三〇〇〇年前ごろには「精神革命」を成し遂げる。そして三〇〇〇年前ごろになって「科学革命」がはじまるのだ。

だがこの科学（「西欧近代科学」）にかかわる「科学革命」が今日地球をめぐるほとんどでもない問題を引き起こすことになっていくのである。

この「科学革命」は三〇〇年前ごろにヨーロッパを中心に本格化するが、その中身はそれまでのギリシャ、ローマ、イスラムの学問体系を「近代科学」としてヨーロッパ流の枠組みへ置き換えたものであったらしい。

「科学革命」を通して「新しい西欧近代科学」として確立した「近代科学」がヨーロッパ文明（「西洋近代文明」）の基礎となる。

第二次大戦中、米国の覇権のもと、科学と技術の結合も進み、「近代科学」を基礎とする科学技術文明（西洋近代文明）は世界各地へ広まり、やがて現代科学技術文明として世界文明化していったのだ。

「ヨウちゃん、『火の玉』となった地球はどうなったの」

「突然暗闇に覆われて姿を消した……」

「それで……」

「未来への階段を上り、暗闇を抜け出し、飛んで戻ってきたんだ」と言い、ヨウは口を尖らせる。

「ヨウちゃんたら……」

ミサは笑みを浮かべ、大げさに「そうだったの」と頷き、ヨウを見る。

ヨウは素っ気無く「そろそろかと思うけど、少し階段を上ってみるか……」と呟き、足早に階段を上り出す。「うん……」と短く応え、ミサも後を追う。

突然地球が真っ赤になった。「火の玉」となった地球だった。

一〇数秒後、暗闇が襲ってきた。「火の玉地球」は次第に暗闇に溶け、消えていった。

暗闇のなかで、ヨウはミサの手を掴むと、ぐいぐい引いて未来への階段を上っていく。何段上っただろうか。次第に周りが明らかになると、周りから暗闇が急速に消えていった。

ふたりは階段の中央に倒れ込み、そのまま横になる。ミサは急に眠気に襲われ、眠りに落ちていった。

「火の玉」が現われ、次第に大きくなる。よく見ると、真っ黒い暗闇のなかに浮いて真っ赤に燃えている地球がゆっくり迫ってくるのだ。

ミサは必死に身体を動かし「火の玉」から逃れようとするが、なにものかに身体が押しえつけられていて全然動かない。大きく目を開けてヨウを探すが、なにも見えない。いや、いくら目を大きく開けようとしても開かないのだ。

大きくなった「火の玉」が迫ってくる気配を感じて「ヨウちゃん、助けて」と助けを求めたが声にならない。

ミサはなんとか逃れようとして一心に腕が、いくら腕こうとも身体は固まったまま動くことはなかった。

灼熱に燃えた真っ赤な「火の玉」が直ぐそばに迫ってくる。熱風が吹いてくる。

「ミサは少しでも動いて「火の玉」の熱風から遠のこうとするが、全然うまく遠のくことができない。」

「もう直ぐ「火の玉」に呑み込まれていくのだと思った。世界中の一〇〇億人もの人びともこうして燃えたぎる「火の玉地球」に呑み込まれて生命を奪われていったのだろうか。」

「ふいに、ブースのスクリーンで見たサバクトビバッタの死骸の場面が浮かんだ。サバクトビバッタの大群が木々の枝に群がり新芽を食べ尽くし幾重にも重なって死んでいる画面だった。」

「ミサは観念して目を固くつむる。そのとき、どこからか低い声が響いてきた。その声は「サイトカインストーム」と告げ、細く長い余韻を引いて流れていく。」

「余韻が消え、完全に静寂をとりもどしたとき、ミサは暗闇のなかに放り込まれていた。」

「『サイトカインストーム』だというのか」「本当に『サイトカインストーム』だったのか」「『サイトカインストーム』『サイトカインストーム』……」と彼女は飽きることなく何度も繰り返していった。

「ミサさん、ミサさん」

「ヨウの声に彼女はようやく目を覚ます。」

「眠っていたのかしら……」

「……らしいね、それもかなりぐっすり眠っていたよ」

「じゃ、あれは夢だったの……」

「ミサは迫ってきた「火の玉地球」や襲ってきた暗闇を思い浮かべながら、ヨウをじつと見つめる。」

「え？ なんのこと……」

「『火の玉』が……」

「そのときは過ぎてしまったらしい、眠っているうちに」

「ホント……、そんなに眠っていたかしら……」

「ミサは夢のなかで迫ってきた「火の玉地球」と暗闇は本物だったということかと思いつきながら、周りを見渡すが、以前とにも変わったことは見当たらなかった。というより、ミサの目には見えなかったに過ぎないのかもしれない。」

「じゃ、もう一度やり直そうか……」と云つてから、ヨウはミサに「『サイトカインストーム』って、なんのことなの」と尋ねる。

「え？ 『サイトカインストーム』……」

「眠っていて、何度も言っていたんだよ」

「ヨウは好奇に満ちた目で見ている。」

「ミサはしばらく躊躇する。どう話せばいいのか整理がつかないのだ。それでもヨウの好奇心な目にさそわれ、つい口を開く。」

「ミサは「一寸思い付いただけにすぎないけど……」と言つて、しばらく口を閉ざしている。話し出しているのか迷っている風にも見えた。」

「『サイトカインストーム』とは……」と言いかけて、また口を噤む。まだ躊躇しているのか。」

「『免疫暴走』のことでしょう」

「待ちきれないのか、ヨウが口を挟む。」

「ヨウちゃんは知っているんだ。なら説明するまでもないわね。あのとき、『火の玉』の夢を見ていたらしいの。それで人間の世界にも『サイトカインストーム』のようなことが起こったの」

かなと思ひ、おもわず叫んでしまつたらしいのよね……」

ミサは夢を思い出し、空ろな目をして遠いほうを見ていたが、ようやくヨウに目を向ける。

「ヨウちゃん、地球に行つて見よう。『火の玉』で地球がどうなつたか、それを見れば、なにが起きたのか、それがどうして起きたのか分かるかもしれない。それが『サイトカインストーム』のようなものだったかどうか検討つくと思うわ。さあ、行くわよ」

ミサは地球へ向かつて走り出す。

生命は免疫システムの働きによつて維持されている。その機能が狂い出すと病氣や死を招くことになるのだ。「免疫暴走（サイトカインストーム）」が生じると、免疫システムの機能不全を引き起こすということだ。

免疫システムは生まれながらの汎用タイプの「自然免疫」と後で獲得する個別タイプの「獲得免疫」で構成されているが、第一段階で働くのが「自然免疫」だけである。

「敵」を発見し、免疫システムが機能して「自然免疫」が働き出すと免疫細胞からサイトカインというたんぱく質が出る。これが過剰に出ると「サイトカインストーム」が起き、「敵」ばかりだけでなく自分の正常な細胞をも攻撃するのだ。

これが「免疫暴走（サイトカインストーム）」である。こうなると「敵（たとえばウイルスなど）」だけでなく、自分の細胞まで攻撃される結果、新たな病氣や重症化をまねいたり、死に至ることもあるのだ。

免疫システムは自己を認識し防御する生命維持の要であるが、

「サイトカインストーム」はこれを否定する厄介な現象といふべきものであろうか。それでは済まず、生命にとつてはどうしても克服すべき課題であらう。

ミサは走りながら、ふと、「サイトカインストーム」に似た現象が現代科学技術文明の支配する人間世界にも起こるかもしれない、いや、すでに起きているにちがいないと思つた。

それにしても、「サイトカインストーム」の果てに、地球が「火の玉」と化すことがあるのだろうか。ミサには地球全体がひとつの「火の玉に」なるとはどうしても理解できないのだ。

地球が「火の玉」になれば、地上に棲む一〇〇億もの人間がばかりでなく、すべての生物が死滅してしまうことだろう。あのサバクトビバッタのように死骸の山を残して息絶えていくのだ。

地球が間近に迫つてきた。

「ヨウちゃん、本当に地球が『火の玉』になつていたの」

何度目かの同じ質問だった。

「うん」

ミサはヨウの不機嫌そうな顔を横目で見ながら、「火の玉地球」を想像する。水爆爆発時の極めて強烈な熱と光（閃光）で鋭く白光を放つ赤みがかつたキノコ状の雲が地球に覆い被さるように拡がり、中央の「火の玉」が大きく膨張し「火の玉地球」を演出したのではあるまいか。

「着地点をどこにする？ 大都市、それとも南極大陸……」

ヨウの声に、ミサはヨウを一瞥し、地球に目を向ける。

「大都市がいいかな、どう？ たとえば、東京……か、それと

もニューヨークか」

「じゃあ、ニューヨークにしようかな……」

このとき、ミサは地球で核爆弾の大爆発があったことを予感していた。だから、現代科学技術文明第一の大都市ニューヨークを着地候補に挙げたのだ。だが全世界を巻き込んだ核大爆発がどういふ経緯で起きたのか、その原因はなんだったのか、それがどんな方法で行なわれたのか、まだなにも分からなかったが……。

その経緯などは全くなにも知らないし、原因も思い付かなかったが、そのときすでに彼女の脳裏にはそれにいたるひとつのシナリオが出来てあったのだ。不思議なことに、そのシナリオは彼女がいろいろ考えた末に思い描いたものではなかった。そのシナリオはいつのまにか脳裏におさまっていたのだ。

さらに言えば、彼女はすべてを感じていたのかもしれない。夢のなかで「サイトカインストーム」と叫んだ時に、すでに、現代科学技術文明を襲う「サイトカインストーム」のことも予感していたにちがいないのだ。

「ニューヨークのどこへ……」

「マンハッタンのど真ん中がいいな」

ヨウは興奮気味だ。

「じゃ、セントラルパークの……ベセスタ噴水辺りでいいわね」

ミサは地上に向かって降下をはじめた。そして北米大陸の東海岸をゆつくり北上して行った。

「あら、海岸線が……」

「どうしたの……、あ、マンハッタン島はどこ……」

ヨウの声だ。

「海岸線が変わったのかしら」

「え？」

水際ぎりぎりまで建並んでいる摩天楼がない。ブルックリン・ブリッジもない。

「ヨウちゃん、自由の女神は？」

「どこにも見えない。ニューヨークも消えたのか。ああ、ニューヨークを乗せたマンハッタン島はどこへ行ってしまったのだ」

「島全体が水中に没してしまったのかしら……。それとも……」
そのとき、奇妙な考えがミサの脳裏を過った。

第五章 なにが起きたのか

「核全面戦争だったのかしら」
「……」

ヨウはずりと沈黙したままだ。そう決めているのか、一切口を開こうとしない。

ミサは水中に没したマンハッタン島を思い浮かべながら、まえに読んだことのある核兵器の攻撃対象となる選択肢についての記憶を思い出す。核戦争で攻撃対象とするターゲットは、都市の破壊か、軍関係施設と戦闘能力の破壊の二つだ。前者は敵の無条件降伏を狙うためのもの、後者は敵の戦闘をやめさせるためだという。

とすると、ニューヨーク攻撃は米国の無条件降伏のターゲットだったのだ。そして核弾頭を何発も撃ち込んだというのか。もしニューヨークが核攻撃を受けて消滅したとすれば、世界中の多くの都市も同様に地球上から姿を消していることになるのか。都市の消滅とともに、殆どの住民も生命を失ったことだろう。

「ヨウちゃん、世界中の都市も核攻撃を受けているにちがいないわ」

「え？ ホント……」

「都市だけが攻撃対象ではないと思うけど……」

「でも世界中で核の打ち合いをはじめているんじゃないだろう」

「だといんだけど……」

「そんなことってあるの……、でもそんなことをしたら、地球はどうなるんだ……」

ヨウはがなり立てる。だがミサは口を噤んだままだった。ヨウも口を開くことはなかった。

世界の核弾頭数は冷戦時代の軍拡競争時に比べてかなり減少してきていると言われているが、二〇二〇年現在、世界には一万発前後の核弾頭があり、米口でその九割前後を保有するという。世界の核弾頭保有国は米口のほかに、多い順から中国、フランス、英国、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮の七国である。

核弾頭の主な運搬手段には各種ミサイルのほかに、原子力潜水艦や航空機があるが、大半の核弾頭はミサイルで目的地を指したことだろう。

「二万発もの核弾頭を装備したミサイルが世界中の大都市や各国の軍事施設を攻撃したというの……」

「全面核戦争がはじまったのよ」

「一体、誰がなんのために始めたんだ。こんなことをすれば人類は絶滅してしまうだろう」

ミサはこんなことをいうヨウを見たことがなかったし、考えでもみなかった。

彼女は「火の玉地球」を思い浮かべた。

それは一万個におよぶ核弾頭が連続してつぎつぎに爆発したときの地球の姿ではなかったか。「火の玉」と化した地球は核爆発の強烈な閃光と灼熱の熱風を発生し、高濃度の放射能に塗れて、地球上の生命を奪っていくのだ。

ふと、彼女は人間の叫び声を聞いたような気がした。一心に耳を澄ませますが、二度と聞こえることはなかった。

「ヨウちゃん……」

返事がなかった。どこにも姿はなかった。

「ヨウちゃんてば……」とミサはさらに声を上げてもう一度呼ぶ。

つづけて何度も呼んだ。だがミサの声は宙に消え、声にならない。それでも彼女は呼びつづける。

彼女はふと、どこからとなく聞こえてきたあの叫び声は死に行く大勢の人びとひとの阿鼻叫喚だったのだと気付いた。ヨウもあの叫び声に誘われてマンハッタン島に降りて行ったのではないか。

彼女は呼ぶのを諦め、ヨウが戻るのを待った。

「セントラルパークは見当たらず、周囲の摩天楼も跡形もなかった。いや、地球上からマンハッタン島全体が消えてしまったんだ。人ひとりいない。もう、ニューヨークはないよ、地上には……」

ヨウは早口でまくし立てる。

「エンパイア・ステート・ビルも島もろとも水中に没してしまっただというの、でもおかしいわ、やはりビルは核爆発で粉々に破壊されてしまったんじゃないのかしら……」

「なんだって、核爆発？」

『火の玉地球』は全面核戦争によるものだったかもしれないわ」

核爆発が全世界を襲ったにちがいない。それで巨大ビルも粉々に破壊されてしまい、海の藻屑となったのだ。マンハッタン島全体が沈下したとしても、三百八十一メートルもあるビル（塔の上まではさらに六二メートルある）が頂上の先端の残さず水中に没してしまうとは考え難いではないか。

ミサは地球に何が起き、なぜ核戦争になったのか、もつと詳しく知りたかった。

「ヨウちゃん、さあ、誰か生き残っているひとがいなか探してみましよう」

ミサはヨウをせき立て、歩き出す。

彼女は自分がどこへ向かっているかも気に留めず、呪文のように、「なにが起きたのか」「なぜ起きたのか」と繰り返しながら歩いていった。

ミサとヨウは「天翔け地這う」旅をつづていく。

世界が核戦争の真つ最中ならまだ核兵器が飛び交うことだろう。

核爆発が起これば、第一に直面するのは、熱線、爆風、電離放射線の直撃等による空間的に拡がる死傷の危険だ。つづいて、核爆発後の比較的短時間では初期放射性降下物による強い放射線の危険がある。これらが過ぎれば、比較的安全に活動できるが、放射線の長期的影響が残る。このように核の放射線被爆被害は空間的な拡がりのほかに、時間的に長期間継続する被害がつづくのだ。

ふたりの探索の旅も地球上の時空にわたる全体が対象だった。

「マンハッタン島が水没していた原因は地殻変動や地盤沈下によるものか、それとも海面上昇によるものか、どちらだと思う？」

「ヨウちゃんはど思うの……」

「南極の氷床が融解して海中へ流れ落ちて海面が上昇しているところに核攻撃で島の表層が飛ばされたことも考えられるかな、でもどうしても腑に落ちないところがあるんだ……」

四〇〇メートルを超すエンパイア・ステート・ビルの塔の先端まですっぽり呑み込まれているとすれば、マンハッタン島はそれを超す水深に沈下していることになる。だがそれは考え難い。かといって、水面から破壊したビルの欠片すら見えない。水中深く沈んでしまっているとするれば、ビルの欠片が見えなくても不思議でないというのだ。

「……」

「海面上昇でマンハッタン島全体が水中に深く没しているとこゝろに核攻撃を受ければ、水中に没しきれないビル群は爆風で木端微塵に破壊されて飛び散ってしまうだろうが……」

「そうかもね……、じゃ、まず、南極をチェックして、それから東京へいつてみようか、生存者探しはそれから……」

「そのまえに世界に何が起きたのかチェックしなくてもいいの、ここで一度チェックしておいたほうがいいと思うけど……」

ミサは自ら核戦争を体験せずに生存者からの取材で済ませたかったが、ヨウが言うなら少々面倒で危険も伴うだろうがそれでもいいかと思う。

「いいわよ、それでは……」

ふたりは時間を合わせて過去のマンハッタン島へ飛ぶ。核攻撃がはじまったら一万メートル上空へ避難すればいいのだ。

ふたりはとりあえずタイムズ・スクエアを目指す。

ブロードウェイには老若男女さまざまな人びとが群がり往き来している。車の走行音のなかに人声が混じる。

街には核戦争のまえの喧騒があった。

ふたりは顔を見合せ、すばやく地上に降り、人影に紛れる。

「まだ間があるかな……」

ヨウが囁く。目は歩道に溢れた人波に釘付けだ。

ミサはヨウを無視し、しきりに空を見上げている。

サイレンが鳴った。

ミサはヨウの手を引き、大急ぎで上空へ舞い上がる。

下方で閃光が走る。熱風が襲いかかってきた。一発目の核爆発だった。二発目がつづく。近傍で数発が散発する。

爆発の度に巨大なキノコ雲が拡がり、大量の砂塵が舞い上がる。

太陽が消え、暗闇が拡がっていく。マンハッタン島が暗闇に呑まれ消えて行つた。

「長居は無用。さあ、行きましょう」

「どこへ……」

「南極ですか、それとも東京にしますか……」

「……」

ヨウが振り向く。ミサの改まった口調が気になったらしい。

「もう戦闘も終わったようだから、どこへ行つてもこれ以上変わったことは起きないでしょう。だから、生存者探しを先にしたほうがいいかもね……」

ミサは了解を求めるようにヨウに顔を向け、笑みを浮かべながらつづけた。

彼女は一刻も早く、世界でなにが起きたのか知りたかった。

なぜ、核弾頭がマンハッタン島上空に飛来したのか知りたかった。なぜだ。それにしても、一体、こんなことを考えたのは誰で、実際に手を下したどの誰なのか。

世界にはさまざまな問題がある。なかには一刻も早く解決しなければならぬものもあった。それもひとつや二つではない。

だからといって、核弾頭を撃ち込んで元も子もないではないか。

だが目の前で、マンハッタン島は数発の核弾頭を受けて水中に消されてしまったのだ。マンハッタン島だけではない。世界のいたるところで同じことが起きているに違いない。

マンハッタン島が水中に没していったのを目にしながら、ミサには人びとで溢れたブロードウェイの大通りから人影が消えてしまったことも、また、マンハッタン島全島が水中に没してしまつたことも、どうしても信じる事ができなかった。こんなことが世界中で起きているなんてどうして信じることができようか。

世界の核弾頭は一時（一九八六年）約七万発もあつたが、それ以降減つてきて、二〇二〇年には世界で約一万三千発超となつた。それでも一万三千発もあつたのだ。

当時、核弾頭保有国は米口のほかに、中国、フランス、英国、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮であつたが、その九割以上を米口の二国で保有しており、その運搬手段はミサイル、原子力潜水艦、航空機であつた。

マンハッタン島に投下されてその上空で爆発した核弾頭は、世界の一万三千発もの核弾頭の数発で、ミサイルなどによつて運ばれてきたものだらう。

これらの核保有国うちのどこが核弾頭をマンハッタン島へ打ち込んだのか。一体世界でなにがあつたのか。一万三千発のうち何発かの核弾頭がそれぞれ世界各地を襲い、その上空で炸裂し爆発したのか。世界はそして人類の未来は……。

「ここが南極大陸か、氷が全然ないじゃないの……」

ヨウが大声を上げる。

大雑把でもいいから、まず、地球全体の状況を掴んでおいたほうがいいという提案を受け、ミサはヨウに従い、南極へ飛んだのだ。

白い南極大陸はすっかり灰黒色の岩肌に変貌していた。大陸を覆っていた分厚い氷床は消え、純白の白い大陸が岩石の岩肌を露呈する大小の黒い島々に変つていたのだ。南極大陸はほぼ中央を西から東に走る南極横断山脈を挟んで大小の島からなる西南極と高い山々が連なる山岳地帯の多い東南極に分断されて海中に浮かんでいた。

「南極氷床が全部融けてしまうなんて……」

ヨウはまだ信じられないようだ。

これまでも南極の氷が融けてしまったことがあつた。約一万二〇〇〇年前の「ヤンガードライアス事件」だ。氷期の最も寒冷な時期がおわり、地球が徐々に暖かくなつていったころの出来事だつた。一時は気温も変動を重ね急激に寒冷化したこともあつたが、その後、地球の気温は急激に上昇に転じていったのだ。

南極大陸は南極横断山脈で東南極と西南極に分かれるが、西南極の基盤は海面下に没しているところが多く、海面から露出している部分が島状で小さいものの、東西両南極大陸の表面は二〇〇〇メートルから三〇〇〇メートルを超える氷床で覆われ、平均二四五〇メートルの厚さをもつひとつの氷の大陸を形成していた。

南極氷床の水の量は地球上の水の九〇・六パーセントを占める。その量は三〇〇〇万立方キロメートルもあって、これが全部融けると海面水位が約六五メートル上昇するという。残りの一〇パーセント弱の水はグリーンランド氷床（九・一パーセント）やヒマラヤなどの「山岳氷河」で、これらが融ければ、海面がさらに数メートル上昇するだろう。合わせると、海面水位上昇分は七〇メートルを超してしまうのだ。

「南極氷床が融ければ、ほかのところの水も全部融けてしまっているだろうから、それでマンハッタン島も水浸しになってしまったんだね……」

「そうね、東京も、いや、世界のいたるところでマンハッタン島現象が起きているんだわ、きつと……」

「うーん……」

「どうする、ヨウちゃん……」

ミサはこれで世界の状況はほぼ把握できたとして、つぎのステップへ進みたいと思っていたのだ。

海面が七〇メートルも上昇すれば、世界はどうなるか。世界の大都市の多くが沿岸部にあり、そのすべてが水没の危機を迎える。都市機能は崩壊し、都市全体が壊滅状態に陥ることだろう。

沿岸部に立地する工場群や発電所も破壊され、もろもろの港湾施設も水没して使用不能となる。

すべての都市活動はストップし、家を失い行き場を失った大量の難民で溢れ、現代文明都市は死を迎える。

都市や住民だけではない。現代科学技術文明そのものがすべて

て死んでいくのだ。

ミサは考え込む。現代都市を崩壊させたのは、海面上昇による海進が先か、それとも核爆発が先だったのか。

今となつてはそんなことはどうでもいいことだった。だが、彼女にはとても気になるのだ。

世界人口の大半を失い、人類の存続さえ危ぶまれるときに、そのことがなぜか気になって仕方がないのだ。

南極氷床融解による海面上昇ほどの程度のスピードで進むのだろうか。たとえば、巨大棚氷の崩壊によつて「水の壁」のような巨大な大波が発生したとしても、これが全世界を同時に襲うことはないだろう。

都市が海面上昇に直面し、水没最中に核攻撃を受けると同時に進行的状态も考えられる。また水没が先で、水没した都市が核攻撃を受けることもあろう。だが、せめて核攻撃で粉々に破壊され尽くされ放射能塗れの瓦礫となった都市の汚れを海面上昇によつて湧き上がる海水が洗い落としていったと思いたかつた。

ミサには現代科学技術文明に対する不信があつた。幼いヨウを駆り立てた「ダイオキシンの汚染」のことが忘れられないのかもしれない。いや、これはヨウだけに関わる問題ではなかつた。ミサ自身の問題でもあつたのだが……。

「ヨウちゃん、核攻撃は海面急上昇の前だったようね、多分……」

「南極氷床の滑落融解によつて海面が急に上昇し出したとして

も完全に氷床が融解してしまうまでにはかなりの時間がかかるんじゃないのかな……」

「そうね、それじゃ、やはり海面が急に上昇し出したので、そのまゝに核攻撃をはじめたということかしら……」

「……」

ヨウは遠方に目を向け、考え込んでいる。「火の玉地球」を思い浮かべているのか、それとも暗い闇につつまれた地球を思い出しているのだろうか。

ミサにはそんな様子のヨウをまゝにも見たような気がした。だがヨウがなにを考えているのか分からなかった。彼女はじつと待った。

あのときは、じつと考え込んでいたヨウは突然走り出したのだった。追いかけるまゝに、ヨウの姿は消えてしまっていた。

ミサは今度は逃げられないように、じつと身構えてヨウを見守っていた。ヨウには動き出す気配は感じられなかった。

「ヨウちゃん、はじめに、一度、大雑把に世界全体を見て回って、世界にながら起きてきているか、世界がどんな状態あるかをチェックすることにしようか。その後で、それがなぜ起こったか、そしていつどのようにして起き、どのような経緯を辿ったのかについて調べることにしようかしら」

ミサは半ば命令口調で言い、動き出す。ヨウが逃げ出すまゝに行動を起こすのだ。こうすることがヨウを逃がさないための最良な手段なのだといわんばかりに、ヨウを促し、彼女は歩き出した。

ヨウが付いてくるのを確かめると、ミサは宙に浮き、上空へと上りはじめる。天翔の術だ。ふたりに備わっているこの術を

用いれば、空中を自在に瞬間的に移動でき、地球全体を容易に俯瞰できるというわけだ。

まず、地球の全球を一望するのだ。それから、地球に接近していき、個別地点を選び、状況を調べて回ればいいのだ。

「さあ、行こう、ヨウちゃん……」

ミサは勢い良く声を掛ける。

振り向くと、下方に全球状態の地球が浮いていた。上昇を止め、ミサは地球に近づいていく。

地球は静まり返って見える。大きく変わっているところは見当たらなかった。「火の玉」だった地球の面影はなく、暗い闇に包まれた地球も遠い昔の出来事だったのか。

ミサはヨウを振り返り「大きく変わっているところはないようね」と声を掛ける。

「じゃ、もう少し接近してみましようか……」

南米大陸と北米大陸が眼下に現われる。

「南アメリカから北上して北アメリカへ抜け、北極圏に向かい、ユーラシア北部（ロシア連邦他）を経て、ヨーロッパの北部から中央部ね、それからイギリスを経て南下し、アフリカ大陸を回って、アジア（西、南、中東、北のアジア諸国）へ、そこからオーストラリア大陸を目指すといった順ではどうかしら。もちろんそれぞれの周辺部も忘れずに見て回るとして……」

ミサは一気に言い、翔だす。

大陸や島嶼の沿岸部には海進の影響が歴然と表れていた。低地が広がる平野は水没していることが多く、地形が著しく変

わってしまっているのだ。

南米大陸の南端部から北上を試みる。中央部から南部へ流れるラプラタ川流域に広がる平野部に広大な水没地帯がみられた。その河口に位置するアルゼンチンの首都ブエノスアイレスやウルグアイの首都モンテビデオは跡形もなく、完全に水中に没している。

南米大陸北部には大陸を横断するように流れ、大西洋へ注ぐアマゾン川がある。その流域と周辺に広がるアマゾン盆地は大陸の約五分の一を占めるほどの大きさがあるが、すっかり水没地帯と化し、東部には巨大な湖が出現していた。そのほか、西インド諸島の大半は水中に没し、カリブ海に面した大陸北端の沿岸諸国も海進の被害をまろに受け、ベネズエラの首都カラカスをはじめ多くの都市が周辺低地もろとも水没してしまっている。

北米大陸へ回ると、マツハタン島水没現象のように、東海岸はすっかり様相を変えていた。

まず、南端のメキシコ湾周辺は、その変わりようが激しく、以前の姿を思い浮かべることが難しいほどであった。

ユカタン半島が水没してしまい、メキシコ湾がカリブ海に広がった。フロリダ半島も水没してしまい、西インド諸島の島嶼も多くは水中に没し、この一帯は直接大西洋に面することになったのだ。

それに北米大陸の南端部を占めるミシシッピ川流域に広がる広大な平野が水没地帯と化し、ダラスやヒューストンも水没したり水浸しになったりしていた。

そのほか、北米大陸でとくに大きく変貌したところはハドソ

ン湾周辺であった。沿岸部が海進によって内陸部へ大きく後退し、湾自体が大きく広がった。入口を狭めていた突き出た半島や湾北方に点在する北極海諸島の多く島々が水没して姿を消し、北極海への開放口が大きく広がったのだ。

「南米北米の両大陸はこのくらいでいいかな、ヨウちゃん……」
「うん、気になるところもあるけれど、切りがないものね、一応いいんじゃない、先に行っても……」

「そうね、でも、気になってるところってどこ……」
「どこにも人影が見えなかった……、みんな避難しているのかな……」

ミサはまえに抱いた疑念を思い出した。

「ヨウちゃん、地球は一度『火の玉』になったんだよね」

「そう、確かに『火の玉』だったよ」

ミサには地球の「火の玉」が核攻撃によるものにちがいないという思いがあった。それは確信といてもよかった。だがその原因がいまいちはずきりしないのだ。核攻撃決行のきっかけとなったものはなにか。誰がなにをしてどんなきっかけをつづけたのか。地球に大洪水をもたらした海面上昇と関係はないのか。海進によって沿岸低地が水没することが事前に分かかっておれば、世界はどう動くか。被害国はどのような行動をとるか。競争相手国（敵国）が被害を被ることなく、自国のみが水没の危機に陥るならどうするか。競争相手国をさきぎに滅ぼしておくのが一番だと考え、行動に移ることはないか。

「海面上昇の到来が確実だと分かれば、世界は大混乱に陥ることにはちがいないわ」

「……」

「じゃ、ヨウちゃん、『火の玉』のほうが先だった？」

「それは『火の玉』のほうが先だよ。時間を逆転させてみれば分かることだけど……」

「やはりヨウちゃんはそう思うのね、わたしもそう思う……、でもね、海面の急上昇がはじまったとしても、南極氷床が全部融解するにはかなりの時間がかかるじゃないの、だから、核攻撃がいつはじまり、地球の『火の玉』化がどの時点でなされたのが問題なのね」

彼女は誰がいつ核攻撃をはじめたのかを知りたかった。いまとなつてはなにもかもが手遅れのように思えるが、核攻撃の原因を説明するにはそれが必要な情報だった。

「ヨウちゃん、海面急上昇がはじまつてから核攻撃がはじまつたのか、核攻撃後に海面が急上昇しはじめたのか、どちらかしら……」

ミサは同じことを何度も聞く。

「さあ……、どうして……」

「そのことは核攻撃の意図を判断するうえでとても参考になる情報だと思うからよ、でもいいわ、先へ行きましょう……」

ふたりは西へ向かって翔んでいく。まず、ロシア連邦だ。北極海に面している広大な領土には低地が多く平野が広がっている。長い海岸線には北極海へ注ぐ大小の河川が多い。それだけに海面急上昇の影響が大きく、沿岸部のいたるところに海進による被害が見られた。また北シベリア低地、エニセイ川とオビ川に挟まれた西シベリア低地には広大な水没地帯が出現した。

ウラル山脈西側に広がる東ヨーロッパ平原を流れる河川の流域にも水浸し範囲が広く見られた。

そして北ヨーロッパではバルト海沿岸諸国やボスニア湾の沿岸国（フィンランドなど）で海進による水没被害が多かった。

ヨーロッパ中央部の沿岸部には低地が多く広がっていることもあつて、水没地帯が方々に見られる。ことに、北海沿岸諸国のドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、イギリスには北海に注ぐ大小の河川が多く、デルタ低地地帯であることもあつて、水没被害が広がっていた。アイルランドでは海進で陸地の奥まで海となり、領土がすっかりやせ細ってしまった。

ヨーロッパ各国とも沿岸部は海面急上昇による被害を受け、大なり小なり領土を失つたのである。

このような被害は世界各国に共通することであるが、アフリカ大陸では沿岸低地が比較的少なく、東部の一部を除き、水没被害も少なかった。

つぎはアジア。中東、西南アジアではチグリスユーフラテス川、インダス川、ガンジス川のそれぞれの流域で水浸し地帯が広がり、インドシナ・マレー半島諸国でもエヤワディ川、チャオプラヤ川、メコン川の各流域での水没被害が目立った。

東アジアでは、まず、中国。東部には低地が広がり、大中の都市が密集しているが、すっかり水没してしまつているところが多い。東北地方にも低地が広がっているが、ここにも水没や水浸しの被害が広くおよんでいた。朝鮮半島、台湾、日本列島の沿岸部低地には海進被害が多く見られ、大きくない領土がますます狭くなつていた。

オセアニア。オーストラリアは南端のカーペンタリア湾に大

小の河川が流れ込んでいるが、それらの周辺に低地が広がっており、海進の侵食が広い範囲にわたって生じていた。それと南東部の沿岸からグレートアーテジアン盆地周辺に広がる平原にも海面上昇による水没現象が見られた。また、ニューギニア島南部の低地にも同様の被害が見られ、バファ湾に注ぐフライ川河口やアラフラ海に面した南西部の低地に水没被害が集中発生していた。

最後は南北アメリカ大陸だ。

まず、南米大陸では大西洋に面した北東部沿岸、なかでもブラジル・アマゾン川流域に広がるアマゾン盆地一帯が水没し、「地球の肺」と称された熱帯雨林地帯が消えてしまっていた。それとアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ諸国に広がる大きな平野部にも水没地帯が広がり、南米大陸の五分の一が水中に消えていた。

北米大陸では北東部と南東部に水没被害が集中していた。ハドソン湾沿岸とメキシコ湾沿岸の大半が水没地帯と化してしまっている。北米側の沿岸の海進が酷く、内陸部の奥深くまで水没地帯が広がっていた。さらに、フロリダ半島全域と北米の東海岸は北から南まで広く水没被害を被っているのだ。

「これで世界を一周りしたことになるけど……」

ミサはヨウに目を向け、大きく息を吸い込む。そして一度息を止め、それからゆっくり吐き出す。ひと仕事を了えたときのいつもの癖だった。それから彼女はソファでお茶を飲むのだが、ここにはソファもなければ、お茶もない。

「考えていた通りだった？ それとも……」

彼女はヨウが水没している世界を見てどのように感じたか聞いてみたかった。ヨウは自分から喋るタイプではないが、海面急上昇で領土を喪失した国々も多く、世界は一変してしまっているのだ。

ヨウはミサの目をじーと見ていた。覗き込んでいるようにも見えたが、彼女の目の奥を探るふうではなかった。なぜかただ遠くを見ているような目だった。

「多分、同じようだと思うけど……、ミサさんはどう思ったの……」

「じゃ、海面上昇で一番被害を被る核保有国があやしいと思うのね……」

世界の氷が融け出し、海面がじわじわと上昇し出している。南極氷床は東西に分かれているが、まず、氷床基盤が低く、水中に没している西南極で氷床の棚氷化が進み、不安定になった棚氷の大崩壊が始まっていた。

こうして南極氷床の大規模融解が始まったのだが、それに比べて、東南極氷床は氷床基盤が海面の上にあるのでは比較的安定していたのである。

ところが、地球温暖化が異常に進み、南極大陸を襲った異常高温のもとで東南極氷床の融解も急激に進み出していたのだ。

南極氷床全融解が避けられないことが分かかって、世界は大混乱に陥る。南極氷床が全融解すれば数十メートルにもおよぶ海面の急上昇が生じるのだ。それも南極氷床全融解は時間の問題だったのである。

これによって国土全域が水没してしまう国がいくつもあるこ

とが明らかになっていくし、海に面した国々の殆どが海面上昇による領土喪失を免れることはなかったのである。

「南極氷床全融解で海面が急上昇するまで時間的な猶予期間ほどの程度残っていたのかな……、氷床融解の予測なんてそう難しいものじゃないから、各国ともその予測に合わせて事前になんらかの対策を立てていたにちがいない……」

ヨウは呟くように独り言を言い、ミサは黙って聞いていた。だが彼女はもう一方で、長年にわたり世界が地球温暖化などの環境問題に対してなぜか協調して実効性にある対策が取れずに来たことを思い浮かべていた。

「でもヘンじゃない、ミサさん……」

「どうしたの……」

「遠くから見ていたので、よく分からないけど、どこにも人の気配が感じられなかったようだけど……」

「ニューヨークでもそうだったわね……」

「ということは、水没まえに人びとがいなくなってしまうっていったということ……」

「もしそうでしたら、核攻撃が先で、海面急上昇がその後ということになる……」

「そういうことかな……、海面急上昇を予測して核攻撃を執行するのか、それともそのことを全然知らずに攻撃を実行したかでは、同じ核攻撃先行パターンでも行動の意図に差異があるよね……」

ヨウは海面急上昇が来ると分かっていたら、それを回避するための核攻撃の実行もあるというのだ。たとえば、核爆発によ

る火災から生じる煙を利用して地球に到達する太陽光線の量を減して寒冷化を招くこともできるというのだ。こうして南極氷床の融解スピードを抑制し、海面の急上昇を回避しようとするものだ。でも、海面急上昇発生を予知できなければ、その対策のために核攻撃を用いることを考えることはないだろう。

海面急上昇がかなりの確率で予知されていることを考えれば、対策のための核使用が現実味を帯びてくるのだった。

「ヨウちゃんが見た地球の『火の玉』と『暗闇現象』ね、あれは核攻撃が先であることを示しているんだわ」

ミサには海面急上昇がはじまってからそれを抑制する手段として核爆発を利用する方法について考えることさえしなかった。だが、ヨウの指摘でひとつの可能性として考えうる手段と思うようになっていった。そしてこのことが彼女に一層強く核攻撃を最初に始めたのは誰かの説明を迫ってきたのだ。

核攻撃のような手段を講じてまで海面急上昇を回避したいと考えたのは一体誰なのか。ミサは誰が計画し、どのような方法で実行されたのか早く知りたかった。だがこのような核爆弾を利用する対策手段は人類に過大な犠牲を強いる可能性があるから、この問題の解明は極めて重大なことである。かといってこの犯人探しのような原因解明には迂闊な間違いは決して許されないものだった。

地上でどんなことが行われたのか。

「ヨウちゃん、地上に降りてみよう、早く……」

ミサはすぐにも地上に降り立ち、生き残っている人びとを探し出し、核攻撃の前夜から世界で起きたことの一部始終を聞き出したかったのだ。どこがいいか。

「どこへ……」

ヨウはミサの迷いに気付いているのか。

「被害の少ないところ……、水没していないところならどこでもいいわよ」

核攻撃から逃げ延びた人びとを探すのだ。そして核攻撃の後の様子を聞き出すことだ。

ヨウは不思議そうな目を向けたままだ。ミサの意図が理解できないらしい。

「ヨウちゃん、行くわよ」

「……」

ヨウは口を尖らせたまま、動こうとしない。核攻撃よりもこれまで見てきた世界のどこにも人影らしものが感じられなかったことがどうしても腑に落ちないらしいのだ。

『火の玉』があつて、そのあとに暗闇が襲ってきたんでしょ。

地球の『火の玉』は核爆発だったにちがいないわ。いや、そうだったのよ。一発か、複数発かは分からないけど、とにかく水没するまえに核攻撃があつた……」

「地上に降りてみれば、核爆発が先にあつたかどうかはつきりするんだね。全世界が核ではなく、海面急上昇に突然襲われて海の底へ沈んでしまったことも考えられるとおもうけど、どっちが先か、一度徹底的に調べてみることもいいけど、でもどうして急に……」

ミサは自分が核攻撃に拘泥しているとヨウに思われていることに漸く気付いた。確かに、彼女は頭から暗闇の前の「火の玉」地球を核爆発と結びつけてしまっていた。それに「火の玉」と化した地球を襲った直後の暗闇を核爆発による都市や森林など

の大火災からの大量の煙や地上から舞い上がる砂塵や塵芥の埃が太陽光線を遮ったために生じたものと決め付けていたのだ。

「そうね、ヨウちゃんの言う通りだわ。『火の玉』についてはもちろん、暗闇についても直に詳しく調べてみなければ分からないわね」

ミサは誘うように優しく言ったが、ヨウは動こうとしない。

「じゃ、わたしだけで行って調べてくるわ。ヨウちゃんはブースで待っていて……」と言い残すと、ミサは身を翻した。

「ボクも一緒に行くよ、こんどはさらに長い旅になりそうだし……」

後を追って、ヨウも地上へ降りる。

第六章 地上へ(一)

地上に近づくと、天空から見るのと違い、陸地のいたるところが水面に覆われ、巨大な湖と化している。

「ここはどこかしら……」

ミサはヨウを振り返る。

「西ヨーロッパじゃないかな……」

ヨウはしきりに周囲を見回していたが、水辺に近づくと目を凝らして水中を覗き込む。

「やはり、なにも残されていない……」

後を追いつ、ミサも水中を覗く。水深が深く底まで見透すことができないが、どこにも建造物の残骸や痕跡らしきものはなかった。

ふたりは北海沿岸に広がる水没地帯を低空で翔て行く。この辺には幾多の大小の河川が海へ流れ込み、河口周辺には大小の都市が連なり、古くから繁栄を誇っていた。

都市は高く聳える尖塔を持つ教会を中心に広がり、都市部には広大な広場があり、周囲に大小の建造物が建ち並ぶ。広場では市場が開かれ、大勢の人びとが集まり賑わっているのだ。

だが水没地帯にはその面影は一切なく、水面が広がっているだけだった。

都市を形成していた大小の建造物はどこへいったのか。喧騒もなく、住まいの建物もなく、人影もない。何年も続いた「都市」はどこへいったのだ。

「山のほうにいつてみる？」

「もう、いいわ」

ミサはひとに会いたかった。早く生き残りを探すのだ。いま生き残っていても、これからも生き続けているかは分からないのだ。

「南下してアフリカ大陸を探してみたい、あそこは比較的被害が少なかったように思えるから……」

ふたりは次第に高度を上げていく。

パリの上空を抜け、一気にアフリカ大陸を目指す。

「エッフェル塔はどこ？」

「……」

「確か、あれは三〇〇メートル位だよ」

「そうね……」

だがセーヌ川一帯が水没地帯と化しているように見えるが、エッフェル塔らしい鉄塔はどこにも見当たらないのだ。かといってエッフェル塔が完全に水没してしまうほどの海面急上昇があったとは思えない。

エッフェル塔だけではない。凱旋門もルーヴル宮も消え失せていた。なかば水没したパリにはかつての「都市パリ」の面影は一切なく、人影も全然ないのだ。水面から頭を出す小高いモンパルナスの丘も裸の山だった。

「ヨーロッパの都市という都市は完全に破壊尽くされているのかもね……」

「……」

「急がないと、地球上から人間が消えてしまうわ、さあ……」

ミサはヨウを促し、ピレネー山脈を越え、スペインからアフリカ大陸へ向かう。そのままにスペインの首都マドリッドを訪ねる。沿岸都市に比べ、標高が僅かに高いところにあるのだ。

「マドリッドも消えている……」

ミサは声のない声で叫ぶ。そして確信する。やはり、核攻撃が先だったのだ。

プラード美術館や壮大過ぎる中央郵便局など、数多くの巨大建造物や市街地に張り巡らした道路網などのインフラ施設も徹底的に破壊されているのだ。近くにある旧首都トレドの石造りの歴史的市街地も跡形もなく消失していた。

突然、ミサは激しい震えに襲われた。

核攻撃は地球上のあらゆる人工物をターゲットとし、それを跡形もなく破壊し尽くそうとしているのか。なぜだ。彼女はなにかしら意図的な響きを感じ、思わず辺りを見回した。

第二次大戦後、二〇年、三〇年経つても、ヨーロッパの都市には銃弾の痕を残した建物や破壊された建造物の残骸がいたる所に放置されたまま残されていた。まるで戦争の記念品のようにも見えたが、マドリッドやトレドにはそれがないのだ。崩れ落ちた石造りやコンクリート造りの建造物の残骸はどこへ行つたのか。粉々に粉碎され、砂ぼこりとなって空中に舞い遠方へ飛んでいつてしまったのか。

マッハッタン島が思い浮かぶ。生き残り探しに最初に訪れたところだった。

水没地帯と化した「大都市ニューヨーク」にはどこを探しても「大都市ニューヨーク」はなかった。あの華やかな大都市は地球上から完全に消え失せてしまったのだろうか。水没地帯と化した「大都市ニューヨーク」は水中深く沈んでいるだけなのか。それとも完全に粉々に破壊された「大都市ニューヨーク」はミクロの粒子となって空中を漂っているのだろうか。

そのときはまだ、「大都市ニューヨーク」には海面急上昇によつて水没される可能性が残されていたのだ。マッハッタン島

が「大都市ニューヨーク」を抱えて水中深く没し、水中に「大都市ニューヨーク」が出現したと考えることもできたのだった。

だが都市マドリッドが消え失せてしまった事実を目の前にして、ミサの脳裏から水中の「大都市ニューヨーク」は消え、核攻撃で世界中の都市を抹殺しようとする強い意思を感じたのだ。

「でも誰がどんな理由で都市をターゲットにしたのかしら……」

「都市が……」

「そう、都市といつても、さまざまな建築物やいろいろな機能を持つ建造物で構成された都市という容器ではなく、現に活動しているシステムとしての都市、いいかえると、『生きている都市システム』そのものが対象なのよ」

「うん、そういうことか、すると……」

「そうよ、『都市システム』というより、すべての『生きている』人工物を対象としているとすれば、それは『現代科学技術文明システム』全体がターゲットにされていると考えるべきかもしれないわ……」

「だとすると……、それは一体どういうこと……」

「そうか、そうだね、ヨウちゃん、早く……」

ミサは翔る。ヨウがつづく。

彼女は「人工システム」のなかに「人間」が含まれていることを忘れていた。「人工システム」全体がターゲットならば、人類もそのなかに含まれるはずだった。世界中の都市を抹殺することは全人類をも抹殺することだ。

「生き残りをひとりでも探し出さなければ……」

ミサは思いを秘め、アフリカ大陸を目指した。

第七章 地上へ（二）

二億二千万年前にあった単一の大陸パンゲアが北方のローラシアと南方のゴンドナワの二つ大陸に分離しはじめる。一億四千万年前までに前者から北アメリカが分離し、後者が南アメリカとアフリカとに分離していく。北と南アメリカはさらに西へ移動し、アフリカはヨーロッパと繋がる。またインドは北へ向かい、アジアに近づき、オーストラリアは南極大陸から離れた。

このような大陸の移動は現在もつづいており、たとえば、アフリカは大地溝帯に沿っていまも分離つづけているのだ。

このようにして出来たアフリカ大陸から人類が世界へ広がっていったという。

ふたりがヨーロッパそれも西ヨーロッパに下り立ったのはほんの偶然だった。

ミサは生き残りを探すなら、水没を免れた地域の方がいいと思っていたが、別にアフリカ大陸に限っていた訳ではなかった。

西ヨーロッパの隣のアフリカ大陸は全体的に標高が高く、水没被害も沿岸の一部だけだった。

生存者も多く、彼らに遭遇する可能性も高いはずだ。だが彼女の思惑は完全に外れた。とにかく、広過ぎて着陸点をどこにするか迷ってしまった。

「ヨウちゃん、どこがいいかな……」

ミサは助けを求めた。

「どこでもいいんじゃないの。とにかく、地上へ行こうよ。でも、どこにも人影がないようだけど、一周してみますか……」

ミサはヨウの誘いにしたが、ジブラルタル海峡を飛び越え、アフリカ大陸の西海岸を南下し、南端のケープタウンを回って東海岸を北上していく。

案の定、どこにも人影がなかった。

「一体、どうしたの……」

ミサは絶句する。

アフリカ大陸の西海岸と東海岸は大小の都市が連なっているところだ。低地にある都市は水没して姿を消しているものの、標高の高いところに位置する都市も跡形もなく消え失せているのだ。

「ヨウちゃん、ここも核攻撃の標的だったというの……」

ミサには信じられなかった。世界中の都市というより全世界の人工物のすべてが破壊されてしまっているのだ。

「それはどういうこと……」

ミサは思わず叫ぶ。彼女はこれまで敵味方に分かれて行なう通常の戦争を想定していたが、これとは全然違うことが起きているとしか思えなかった。

「アフリカ全体が戦争に巻き込まれるということもありうるかとだと思っけど……」

「ヨウちゃんはそんなふうを考えているの。いま見てきた都市という都市が跡形もなく破壊されていたのよ。アフリカ大陸の国々の都市すべてがそうなのよ、そんなことってあると思うの……」

「いいわ、世界中の水没していない都市を調べて見ましょうよ……」

「そんなことしていいの。ミサさん、生存者を探さなくて」

もいいの。でも人影はどこにもない。ここにも……」

「あ、そうだったわ。ヨウちゃん、ありがと……、あつ、あそこでなにかが動いたようだけど……、生き残りの人間かしら……」

「ええ……、どこ……」

ヨウはミサの指差す方に目を凝らす。

「ヨウちゃん、行って見よう。さあ、早く……」

ミサは翔だす。ヨウが追う。

「ハクリよ」

ヨウに合図する。ミサが振り向いた途端、ヨウは手を上げ応える。

何年かぶりなのに、ハクリははじめて会った時と全く同じの笑顔だった。

あの日、黒い煙をもくもくと吐きダイオキシンをまき散らす産業廃棄物焼却炉の爆破をこころ、ヨウが手製の「茶筒手榴弾」を焼却炉めがけて投げ込んだのだ。だが一回目は焼却炉には届かず見事失敗だった。ヨウは焼却炉のまえへ転がっていった。「茶筒手榴弾」を拾い上げ、再度焼却炉へ投げ込んだのだ。そのとき、瀕死の重傷を負ったふたりを助け、「天の組織」に運び込んだのがハクリだったのだ。それ以来、ハクリはふたりの指導教官であり、上司だった。また「天の組織」の仲間でもあったのだ。

「きみたちふたりの探していたんだよ」

地球異変の調査のために派遣されたのだという。その機会に、「天の組織」の旧地球支部事務所建物であるドームハウスを訪

ねたが「もぬけの殻」だったので、調査しながら、ヨウとミサを探していたという。

「ハクリ、地球の異変って……」

ヨウが聞き返す。

「地球が真っ赤な『火の玉』になったんだよ。きみたちもそれを調べているんだろ……」

ミサはこれまで調べたことをすべて話すと「腑に落ちないことですが……」と言い、間を置いて「どうしてアフリカの小さな都市まで木端微塵に破壊されているのですか、誰がそんなことをやっただんですか」と立て続けに問う。

「ミサ、あなたはもう思っているのですか」

ハクリは優しく問い返す。

「ミサさんは核攻撃だと思っっているのですよ」

ヨウが横から口をはさむ。

「誰が誰に向かって攻撃を仕掛けたのですか。その理由は……」

ハクリはヨウからミサへ目を向ける。

「それを知りたくて生存者を探していたのです」

ミサの口調はようやく入口に戻ったと言わんばかりだった。

「すると、ここにも生存者はいなかったということか」

ハクリは呟くように言い、大きく頷く。それを見て、彼女はハクリにはなにか思い当てることがあるにちがいないと思った。

「ところで、きみたちのこれからの予定は……」

ハクリが交互に二人を見ながら、いったんドームハウスに戻って今後の方針を考えないかと言う。これまで得たデータを分析し、調査計画をつくり、三人が協力して調査を進めようというのだ。

ふたりには異論はなかったが、ミサは生存者探しがエンドレスな作業になりそうな気がした。たとえ生存者を探し出しえたとしても、「地球火の玉」の原因が解明されとはかぎらない。生存者探しに集中するまえにもっと詰めるべきことがあるのではないか。だが二人にはいいアイデアが思い浮かばなかった。ミサとヨウはハクリに従い、ドームハウスへ向かう。

第八章 地球に何が(一)

「地球に一体なにが起きたのかね、ミサ、きみが考えていることを話してくれませんか」

三人が席に着くと、ハクリは早速話します。

小さな会議室の中央には大きな長方形のテーブルがあった。

壁側の中央にハクリ、面と向かってミサ、その左隣がヨウだ。

「その前に、ヨウが見たという『火の玉地球』のことをまず本人から説明してほしいですね。それに触発されて考えを変えたところもあるので……」

ミサの考えにはヨウが見たという「火の玉地球」とその直後に襲った「暗闇」を根拠にしているからだだった。

「そうか、じゃ、ヨウからその『火の玉地球』のことをはなしてもらおうか……、ヨウは実際にそれを見たんだよね……」

「本当に『火の玉』だったんだ、ボクが見たのは……」

「そう、で、地球が『火の玉』となったのは……」

「それは分からないよ。もう『火の玉』だったんだから……」

「どんなふうだったの、まるでなにかのようだったとか……」

「真っ赤だった。それがだんだん大きくなって近づいてくるように見えた。思わず避けようの後ずさりしたとたんに消えてしまった。そのあとに暗闇が襲ってきた……」

「赤色巨星か……」

ハクリが思わず呟く。

「え？ それは……」

ミサが思わず叫ぶ。

「そうだよ。太陽などの恒星が最後の段階に現われる状態で、

全体が膨張していった『赤色巨星』となるそうだ」

「すると、地球もその段階だと……」

「地球は恒星じゃないから……」

「でも、もしかしたら、地球も最後の段階かも……、ハクリ、どう思う？」

「さあ、どうかな。でも率直に言わせてもらえば、地球の最後はすでに時間の問題になっているかもしれないが……」

「……」

三人はしばらく口を閉ざしたままだった。

「で、ミサの考えは……」

ハクリの重い口が開いた。

「地球が『火の玉』と化したのは全面核戦争による連続した核攻撃によるものではないかと思うわ……」

ミサは考えていることをつづける。「つづいて起きた『暗闇』

は核爆発によって舞い上がった砂塵や火災の煙が原因で生じたものにちがいない、海面急上昇はその後にはじまったのではないか」と推測したと述べ、おわりに「このことを確かめるために生き残った生存者を探していたところだった」と加えた。

「ではヨウはどんなことを考えていたの……」

「……」

「じゃ、ヨウも核攻撃だと思うかね」

「分からない、でも核兵器のような巨大な破壊力をもつものが何発も一度に爆発しなければあんなふうにはならないんじゃないかと思う」

「すると、生き残りを探し、聞き出すほかないのかな……」とところが、生存者はひとりもないのか、人影すら見かけないん

だよね」

「これまで何日も探し回っても、ひとりにも出会わない、はじめて会ったのがハクリ、あなただったのよ。それに気になることは、小さな都市まで徹底して破壊されていることだわ」

ヨウにつられたのか、ミサも急に饒舌になり話し出すが、ハクリはなにも話さず黙って耳を傾けている。

「ハクリはどう考えているのかしら、『地球異変』だと言っていたようにだけ……」

ミサはハクリに水を向ける。

「妙に赤い地球を見て、一瞬変だなあと思ったけど、様子見に出掛けることが決まっていたので、現地で調べれば分かることだろうと思つて深く詮索しなかった。でも、いろいろ問題がありそうだね……」

「え？ どんな問題ですか……」

「ヨウは変だと思わないのかい？」

ハクリは一言ヨウに問い掛けると、そのまま視線を据え付け、口を閉ざしてしまふ。

誰も口を開かないまま、時間が過ぎていった。

「一度、地球の出来事を振り返つて見てはどうですか。『火の玉』化前後の地球の状況をチェックできれば、なにか分かるんじゃないかと思うけど……」

「ヨウ、グッドアイデアだ。だが、ここでそれができる装置があつたかな……」

「地球全体はムリでも、焦点を絞れば、部分的な時系列データを取り出すことは可能かもしれないけど……、でも役に立つかしら……」

「そうだな……。部分的な情報で済むかどうかについてはあとで検討することにしよう。まず、地球『火の玉』化問題に絞つて、問題点を洗い出してみようじゃないか」

「いいわよ、でもわたしは実際に目撃していないので推測によるけど……」

「ミサは核爆発説だね」

「そう、何発かの核爆弾が同時に爆発すれば、地球が『火の玉』のように見えることがあると思うわ……」

「じゃ、ヨウは……、ヨウは実際に見たんだよね……」

「本当に『火の玉』だったんだ」

「そう、で、地球が『火の玉』となつたのは……」

「それは分からないよ。もう『火の玉』だったんだから……」

「どんなふうだったの、まるでなにかのようだったとか……」

「真つ赤だった。それがだんだん大きくなって近づいてくるように見えた。思わず避けようの後ずさりしたとたんに消えてしまった。そのあとに暗闇が……」

「え？ そうだったの……、ところで、ハクリはどのよう考えているの」

「『火の玉地球』のことかね……、あれは……、少なくとも戦争による核攻撃ではないと思うな……」

「なぜ……」

「あれが地球の終わりの始まりの合図でなければいいと思うが……」

「ホントに『終わりの始まり』ですか。地球の『終わり』の証拠はあるんですか」

ミサはハクリに迫る。

ヨウはミサとハクリのやりとりを側でじつと聞いていたが、
口を挟むことはなかった。
沈黙がつづいた。

第九章 地球に何が(二)

沈黙はつづいたが、しばらくして、ハクリは話し出した。その内容はおおよそつぎのようなものであった。

そのころ、地球には約一万四〇〇〇発の核弾頭あった(長崎大学核兵器廃絶研究センター二〇二〇年六月現在による)。これらは米国(五八〇〇〇発)、ロシア(六三七〇)、中国(三二〇)、英国(一九五)、フランス(二九〇)のほか、イスラエル、インド、パキスタン、北朝鮮に五〇〇発ほどが分散して存在する。核弾頭のおもな運搬手段はミサイル、原潜、航空機であるが、地球に現存するこの一万四千発の核弾頭を一斉に爆発させることができれば「火の玉」地球を演出することは可能であろう。

「火の玉」地球の原因が世界中の核弾頭の一斉爆発だと仮定すると、問題は誰がどのような手段で世界中の核弾頭を一斉に爆発させることができるかということになる。

ハクリはこんなシナリオを描く。

シナリオの詳細に触れるまえに、ごく大雑把であるが、地球と人類の過去・現在・未来を覗いておこう。なぜなら、これまで地球の「終わりの始まり」と称してきたが、正確には、地球とともに生きる生命体としての人類(人間)、簡単にいいかえるとすれば、地球人の「終わりの始まり」というべきかもしれないからである。

地球と人類の過去・現在・未来についてはつぎの四段階のスケールに分けて概略みていこう。

(1) 地球誕生

約四六億年前、地球が誕生する。生命のはじまりはその約一〇億年後で、いまから約三五億年前のことである。生命体は還元バクテリア、ラン藻類、そして真核生物へと進んでいく。約二五億年前から大気中の酸素が徐々に増えていき、約四億年前に現在並になる。

パンゲアという単一の超大陸が約二億年前から徐々に分離し出し、ふたつの超大陸になり、さらに分離していき、地球上に現在のような大小の大陸や島嶼からなる陸地が出現する。分離現象は現在も継続している。

(2) 生物圏出現

約七億年前、クラゲなどが爆発的な進化をはじめ。五億年前ころにオゾン層が形成され、約四億年前、植物が陸上へ、約二億年前恐竜が出現して一億年以上生存し、絶滅する。

(3) 人類誕生

五〇〇万年前、あるいは六〇〇万年前とか七〇〇万年前ともいわれるが、人類はそのころ誕生したらしい。最初のホモ属は二四〇万年から一六〇万年前に、ホモ・エレクトス(原人)は一六〇万年から二〇万年前に、そして約一〇万年まえに現在のホモサピエンスが出現する。もし、現人類にかわる新人類が誕生するとすれば数一〇万年後であろうか。

(4) 人類文明

人類社会が文明化しはじめたのは一万年前の「農業革命」後であろう。そして六〇〇〇年前から五〇〇〇年前の「都市革命」、三〇〇〇年前ころからはじまった「精神革命」、それにつづいて近世に「科学革命」が花咲く。ヨーロッパ近代科学文明を経

て、現代科学技術文明にいたる。

最後に、近未来の地球に触れておけば、今後一万年後までに再び氷期を迎えることだろう。二〇〇〇年後には、地磁気なくなり、地球上は宇宙放射線の直撃を浴びることになる。地磁気反転も四〇万年に一度の割合で起こるのだ。

地球誕生ころの太陽はいまより暗かったが次第に明るさを増していき、明るく輝く太陽は膨張して「赤色巨星」となっていく。約五〇億年後、地球はその太陽に呑み込まれて最後を迎えることになる。

「このような経緯で、人類は地球の一員となったのです。これはこれからお話しするわたくしのシナリオの前置きですが……」

ハクリはもう一度「人類は地球の一員となった」と繰り返し返す。

「……にもかかわらず、これを忘れて、いや、無視して、それも人間はこれらのことを故意に無視したのです。そして人間本位の文明を築き、地球を支配し、そして宇宙をも支配しようとしているのです……」

ここまで話すと、ハクリは虚空を見つめたまま、しばらく動かなかつた。

時が止まったのか、長い沈黙がつづく。

突然、ハクリの呻くような声が地を這うように広がっていく。

「人類が絶滅を免れれば、新人類として生まれ変わることも可能かみしれない。地球にはまだ五〇億年もの時間が残されてい

るのだから。だが、問題はこれまで何度も致命的なミスを繰り返してきた人類にこのチャンスを生かせるかどうかだ……」

「やはり人類が絶滅するほかないのですか」
ヨウとミサが思わず叫ぶ。

「結論から先に言う……」ハクリはつづける。「『地球火の玉』事件は『瀕死の地球を救うには人類もろとも現代科学技術文明を一度リセットする必要がある』と考えたある筋が実施計画を立案し実行に移したものだと思う」

その実施計画についてのハクリの詳細説明はこうだった。

今日世界を支配している現代科学技術文明は「科学革命」とおして確立された「近代（西洋）科学」を基礎に展開されたものである。いいかえれば、現代科学技術文明の生みの親が「近代（西洋）科学」というわけである。だがこの「近代（西洋）科学」は「科学革命」によつてゼロから生み出されたものではなく、それまでヨーロッパを支配していたギリシャ、ローマ、イスラムの学問的遺産が「近代（西洋）科学」へ集約されていった過程が「科学革命」と称されているのである。

「近代（西洋）科学」にもとで「近代ヨーロッパ文明」が開き、今日の現代科学技術文明へと連なっていく。

「この『科学革命』の最中、ミスを重ね、取り返すことの出来ない大きなミスをしてしまったのだよ、人間が……」

このことに気付かず、人間は近代ヨーロッパ文明を構築進展させ、さらに、別々だった科学と技術を一体的に結合し、現代

文明へと進展させていく。こうして誕生した「科学技術」を基礎とした「現代科学技術文明」を確立し、世界文明へと展開していったのだ。

科学と技術の結合によって、一層「巨大化高度化大量化」を進めた現代科学技術文明は自然を征服し、自然の支配を目指して進展するのだ。

「人類の頭上で炸裂した核爆弾の最初の爆発音が現代科学技術文明誕生の産声だったのだ」

ハクリの重い声だった。

「すると……」

ミサは思わず息を呑む。「地球火の玉」事件は最初の核爆発からつづいていたというのか。彼女はつづきを待つてハクリの灰色がかつた青い目をみつめていた。

「自業自得か……」

ミサが口を動かしかけたとき、ハクリの低く呟くような声があった。

『『自業自得』ということですか……』

ミサは繰り返す。不意に、脳裏に「サイトカインストーム」が浮かんだ。

「サイトカインストーム」は人体の免疫システムの機能不全にかかわる現象である。生命は免疫システムによって維持されるが、そのためには免疫システムが十分機能していなければならぬ。それにはつねに非自己と自己を区別して認識し、異物（非自己）を排除し、異物から自己を防御することが前提だ。

この働きが十分でなければ生命を維持することはできないから

だ。

ミサは人体における「免疫システム」の異常暴走である「サイトカインストーム」と同様な仕組みによって、今回の「地球火の玉」事件が「現代科学技術文明」という舞台において発生したのではないかと直感していたのだ。

免疫システムには生まれながらの「自然免疫」と後で獲得する「獲得免疫」があるが、免疫応答では免疫細胞からサイトカインというたんぱく質を出して、まず、自然免疫が働かせ、つぎに獲得免疫がつづく。サイトカインが過剰につくられると、免疫応答が活発化して暴走する。そして自分の正常な細胞をも攻撃してしまうという。生まれながらの「自然免疫」がなぜか自己（の正常な細胞）を攻撃するのだ。なぜか。

この現象を「サイトカインストーム」というが、「巨大化高度化大量化」指向の現代科学技術文明においてはつねに「サイトカイン」が過剰気味に放出されているのではないか。その意味で、現代科学技術文明においてはつねに「サイトカインストーム」の状況が現出するのだ。これで現代科学技術文明のシステム内部では「競争」という名の「同士打ち」「共食い」が常態的に起きているということだ。これはまさに「現代科学技術文明そのものがサイトカインストーム現象」というべきものではないか。戦争はその最たるものではないか。

「現代科学技術文明が現代科学技術文明を喰っているんですね。タコが自分の足を食べるように現代科学技術文明は自分を自分が食べているわけですか……」

「そうだね。誰も気付いていないのかな。だから……」

『だから』なんですか……、どうしようとしたのですか、『そ

のある筋』とやらは……」

性急すぎるミサの追及にハクリは口を開けたまま、目を丸くして彼女を見ている。しばらくしてハクリは口を閉じた。目もいつもの細目になった。

「ミサ、『ある筋とやらは……』こんなふう考えたらしい。もつともこれはあくまでも推測にすぎないことだけど、『地球の最後まで五〇億年残されて（太陽が膨張して赤色巨星となつて地球を呑み込むのが五〇億年後なのだ）。そこで地球をダメにした人類（人間）に地球を修復させ元通りの地球を取り戻させたらどうかと考えたというのだ。そのために、現代科学技術文明潰けになった地球を人類ともどもリセットすることにしたのだそうだ。それが例の『火の玉』事件というわけだ……」

「ハクリ、これはあなたのシナリオじゃないの。それでどんな方法で地球を『火の玉』にして、どういう方法で新しい地球に戻すのかしら。地球をどういうふうにしてどのように修復し回復させればいいのかしら。これはこうして、あれはああするともう少し詳しい実施計画書とかレシピが欲しいわね……」

ミサもハクリに調子を合わせ、やり返す。ヨウはいつの間にか二人の間に割り込んでにやにやしてやり取りを見ている。

「それにはなぜ地球と人類をリセットする必要があるのかについての納得できる説明とリセットの方法、具体的なやり方手順を聞かせてもらいたいです。地球と人類はそのままにして、現代科学技術文明のみをリセットすることも考えられるじゃないですか。それを立案した主体とそれを実行した者、とにかく誰がこれを仕掛け、誰がやったのか知りたい。『その筋』とはどの筋ですか……」

ヨウだ。ミサの代弁をするように割り込み、口を挟む。

第十章 地球に何が (三)

「現代科学技術文明は西洋近代科学を基礎に発展したヨーロッパ近代文明からさらに進展し、世界文明化したものといえるが、近代西洋科学確立段階でミスを犯し、ヨーロッパ近代文明の構築進展をとおして人間は決定的なミスを重ねていったのだ……」

ハクリは視線を虚空へ転じた。彼は青い空を見たかったわけでもなく、虚空に浮かぶ白い雲を見たかったわけでもなかった。そのとき彼は虚空の奥に潜む人間を見ていたのだ。それはしばらくして、ハクリは語り出す。それはこんな内容だった。

地球環境の限界が近づいていると思える事象が続けざまに起きていた。地球温暖化が進み、近年(二〇二〇年前後)世界各地で異常気象が頻発していたのだ。そして後戻りできない転換点は一〇年後にやってくるという。

地球温暖化の指標ガスである炭酸ガスは産業革命後世界で二兆二〇〇億トン以上排出(世界の累計排出量)しており、気温上昇を産業革命時に比し一・五度までに抑えるためには約四二〇〇億トンしか残されていないのだ。このままのペースで炭酸ガスを排出しつづければ二〇三〇年には排出上限の二兆六二〇〇億トンを超えてしまうことになるだろう。

大気中の炭酸ガス濃度だけが問題なのではない。温暖化が進めば、永久凍土の融解が進み、地中のメタンガスなどの温室効果ガスの放出が起こり、温暖化が加速されることになる。これによつて、氷床や氷河が融け出す。そして海面の上昇をもたらすのだ。

さまざまなことがつづくが、なぜこんなことになってしまったのか。端的に言えば、ミスをミスとは認識せずにミスを重ねたせいだ。

「きみたちがゴミ焼却炉を爆破しようとしたことがあったね……」

ハクリは交互にヨウとミサに目を向ける。

「爆破は失敗したうえ、ヨウとわたしは爆風を受け、気を失ってしまったっていたんでしたよね……」

あれは確か一九八〇年代の終わりごろの出来事だった。すでに三〇年は過ぎていく。大分まえのことであつたが、ミサはつい昨日のことのように直ぐ鮮明に思い出す。

近くの産廃処理場からの悪臭の煙に悩まされ、何度も改善を申し入れても埒が上からず、ヨウがつくつた花火の火薬を詰めた茶筒爆弾をもつて焼却炉爆発の実力行使に及んだのだ。排煙には猛毒のダイオキシンが含まれており、付近の環境はすつかり汚染されていたんだよね。ヨウもミサもダイオキシンの被害者だつたというわけだ……」

産廃処理場の焼却炉から発生するダイオキシンは焼却処理する産廃に含まれている塩ビ製品(家屋の解体廃材などには多く含まれる)の燃焼によつて塩素ガスが生じ、ダイオキシンなどの有機塩素系化合物が発生するのだ。ダイオキシンはまた工業製品としても生産されている化学物質でもある。

他にも数多くの化学物質が合成され、工業製品として生産されているものは無数にあるが、なぜかダイオキシンのような有害な化学物質の開発生産は後を絶たない。数え上げたら切りがないほどの化学物質が日常的に使用されているが、なぜか問題

を抱えているものが結構多いのだ。

同じ頃、世界的に取上げられた化学物質の問題に「野生動物で生じているホルモンの大攪乱」がある。特定の化学物質に汚染された動物の繁殖や内分泌を攪乱させるというのだ。ダイオキシンもそのなかのひとつである。

薬剤、化粧品、洗剤などの日常的に使用されている各種家庭用品、それに除草剤、防黴剤、殺虫剤など一般に使用されている製品のなかにこれに該当する化学物質が含まれているケースがかなりあつて、これらによって地球環境はすっかり汚染され尽くされてしまつているのである。

地球環境の汚染は薬剤のような化学物質によるものだけではない。最近では、粉々になつてマイクロ化したプラスチックの海洋汚染が問題化している。ペットボトルやさまざまな製品に使用されているプラスチックが投棄、廃棄されて海洋へ流れ、太陽光線などによつて劣化し、波風に粉々に砕かれ、マイクロプラスチックとなつて魚類に取り込まれているという。それを食すれば、食べたものの体内にも入り込んでしまう。もちろん、人体からもマイクロプラスチックが見つかつているのだ。

「これらは一例に過ぎない。こんな例は数え上げたら、切りがない。地球人（人間）は自分の住み処を台無しにしているのに平気であるのかね。愚かしいことではないか……」

ハクリは空を見上げ、一点をじつと見つめている。その後ろ姿はいまにも消え入りそうに見えた。

「もう、これ以上調べることは止めにしましょうか」

ミサにはハクリのところが地球から離れてしまつていること

を感じたのだ。

「それはだめだよ、ミサさん。ハクリはぼくらに何かを伝えたくてわざわざ地球にやってきたんだ、きつと……」

ハクリが振り向いた。ふたりのやり取りを耳にしていたらしい。

「さつき『サイトカインストーム』現象のことを話していたけど、さまざまな化学物質による環境汚染も、まさに、現代科学技術文明の『共食い』の証拠といつていいんじゃないのかね……」

ハクリには、地球人（人間）は理解不能な生きもののように感じていられるらしい。

知的生物といわれる人間がなぜ殺し合いにいたるまで相争うのか。

人間が自ら創り出す「文明」は人間社会の安全装置であり、人体の「免疫システム」のようなものであるべきではないのか。この「免疫システム」が正常に機能しなければ、人間は生命をおとしてしまうように、「文明」が「安全」に機能しなければ人間社会も存続できず崩壊してしまうのに、なぜ「サイトカインストーム」のような現象を放置し、常態化させているのか。さらに激化させているのはなぜか。

人間は群単位で社会をつくり生活の拠点としているとすれば群単位で相い争うこともある。だが問題は「サイトカインストーム」という仕組みが「免疫システム」にすでに内在化されてしまつていのではないかという点である。いいかえれば、「殺し合い」も「サイトカインストーム」も人間や人間社会になぜ内在的に存在しているのかということである。これでは人

類の絶滅や人間社会の崩壊を促しているようなものではないか。

「わたしにはきみたちの現代科学技術文明が『滅び』の文明であり、『殺し』の文明だと思うときがあるよ。きみたち地球人はなんのためにこんな文明を構築してきたのか、わたしには理解できないが……」

ハクリはしばらくミサをじっと見つめていた。それからヨウに目を向ける。

その目は「おまえたちもそんな地球人の一員か」と問うているようにも、また、そんな地球人であることの不運さを哀れんでいるようにも見えた。

ミサもヨウも口を閉じたまま、ハクリの視線から逃れるように目をそらす。

ミサもヨウもいわば現代科学技術文明がもたらした「環境ホルモン」の被害者だった。彼女はワグナとペニスを具有していた。ヨウには辜丸がなかった。幼時に正常の位置まで辜丸が下りてこなかったのだ。

有機塩素系農薬、PCB、ダイオキシンなどの有機塩素系化合物は主要な内分泌攪乱化学物質であった。塩化ビニール系のゴミを燃やす焼却炉での燃焼過程でダイオキシンが生成されるのだ。これが煙とともに排出され、周辺にダイオキシン汚染をもたらし、人間に対しても「環境ホルモン」的影響を及ぼしていたのだ。

以前は奇形発生の原因がダイオキシンなどの化学物質の「環境ホルモン」的作用によるものとは理解されていなかった。ヨウがゴミ焼却炉の爆破を決行したのは、母が嫌がっている焼却

炉の煙と悪臭を絶とうと考えたからにすぎなかった。

それが結果的に現代科学技術文明の「被害者」だった自分の仕返しとなったとはいえ、それをもたらした現代科学技術文明自体をつくり、発展させ、そしてこれを享受しているのだ。

『加害者』でもあったとは……」ヨウには極めて複雑な気持ちだった。

「どうしたらいいのだ……」

ヨウは大声で叫びたかった。だがどうすることも出来なかった。

自分たち人間は現代科学技術文明を作り出した張本人じゃないのか。それなのに、現代科学技術文明の被害者面をしているのか。これは自業自得というよりもつと悪質なことではないのか。

第十一章 地球に何が(四)

「ハクリ、現代科学技術文明は世界全体に広まっている世界文明だわ」

「そのようだね……」

「とすると、地球人のすべてが現代科学技術文明がもたらすプラスとマイナス両面の当事者でもあり、また、加害者であり被害者でもあるということになりますね」

「ミサは『現代科学技術文明』になんらの『責任』もないと言いたい、それとも……」

「わたしの言いたいことは、現代科学技術文明の個々の現象と現代科学技術文明全体とは別だということ、両者は明確に区別して考えるべきことではないかということですよ」

「ふーむ……」

「たとえば、ダイオキシンなどの『環境ホルモン』作用によって生じた影響(被害)は現代科学技術文明という枠組みのなかのひとつの現象ですが、だからといってこれはまた現代科学技術文明全体に関わる問題のひとつだとは言えないと言いたいのです……」

『環境ホルモン』の問題は現代科学技術文明全体との関係を離れて別に考えるべき個別の問題だと言っただね。たとえば、『環境ホルモン』の問題が現代科学技術文明のなかで生じた問題でもそれは個々の問題であって、個々の問題で現代科学技術文明全体がダメなものであるとすべきではない。要するに、両者は個々と全体とは別々の問題だと区別して考えるべきだと言っただね」

「当然そのとおりですよ……」

ミサは同じことを繰り返して問われ、なんとなく腑に落ちない気分だった。いつもの冷徹なハクリとは思えないのだ。

ハクリも違和感を覚えたのか、いつもと違った暗い目でじつとミサを見つめていた。これがなにを意味するのか、ミサには皆目見当つかなかった。だが次第に、なぜかともでもない間違いを仕出かしているような気分になっていくのだった。

「ハクリ、わたし間違っただけを言ったかしら……」

「ミサは耐えきれなくなって思わず吐き出す。」

「まえに『決定的ミス』を犯したと言っていたようですが、その『決定的ミス』は何ですか、ハクリ……」

ヨウが割って入る。ヨウは二人の議論の内容を理解していないが、同じことの繰り返しにうんざりしていたのだ。早く話題を転換したいだけだった。

「ヨウ、いまふたりが話していることは、実はそのことと関係があるんだよ。いいかい……」

ハクリの声が幾分高くなった。

第十一章 地球に何が(五)

「最近、『人新世(アントロポセン)』という言葉が使われ出したね……」

ハクリが突然言い出す。

地質時代の沖積世のなかの最も新しい世で、約一万年前から現在までの人類が最も発展を遂げた期間を指して「完新世」が用いられていたが、二〇〇〇年ころからこれに代えて「人新世」という表現が用いられているのだ。そしてこれは「二〇世紀半ばから人類が地球上で圧倒的かつ決定的な影響力をもつに至ったことを説明する概念」だという。

「だがわたしに言わせれば、『人新世』になるかなり以前から終わりの兆候があった。だがそれは兆候なんて生易しいものではなかった。すでに地球は崩壊への道を歩みはじめていたし、人類も絶滅の危機を迎えていたのだよ……」

ハクリは沈黙のふたりを一瞥する。そして続ける。

「実は、かなり以前のことだが、人間どもがとんでもない間違いを犯していたのだ。そのことに全然気付かず、たとえおかしいことに気付いたとしても、人間どもは一切無視して地球を食いものにしつづけていたことだろう……」

ハクリは容赦なく言い切る。

「ハクリ、どうして教えてくれなかったの、そのことを……」

ヨウだ。幼時にゴミ焼却炉を爆破しようとしたヨウだった。

ハクリ一瞬、あのととき、このことをヨウに教えておけば地球がいまのような事態に陥ることがなかったかもしれないと思っただ。だがそれはハクリの一時の夢想到過ぎなかった。

人間はいま漸く「完新世」から「人新世」へと転換していることに気が付き、そこからの脱却を試みようとしているが、「人新世」の到来は自分たちが地球に対してとんでもない間違いを仕出かした結果であることに果たして気付いているのだろうか。「そうすればよかつたかな、ヨウくん。でも、もう手遅れのようだ……」

「そうだよ、大分時間が経っているもね……」

ヨウも仕方なく調子を合わせる。でも人間がいつどんな間違いを犯したというのか。

「ハクリ、その間違いのことだけど、詳しくお話して頂けないかしらね……」

ミサは地球の限界にまで及ぶような巨大な人間の行動(人間の地球環境への働きかけ)がなされる「人新世」になった訳を知りたかった。これを知れば「火の玉地球」の謎も解けるような気がするのだ。

「一寸長くなるが……」の前置きがあつて、ハクリが話した内容は西洋近代科学が成り立つ長い過程を経て「科学革命」が成就し、それを基盤として確立したヨーロッパ近代文明について語りはじめる。だがこれは「人新世」の前の世「完新世」の出来事であつた。いま話題となつている「人新世」が到来するのはもつと後の話である

「西洋近代科学」そして「ヨーロッパ近代文明」の誕生であるが、まずこのことからはじめるのは、「人新世」をもたらした原動力となる『現代科学技術文明』を生み出す母体になつたのが「西洋近代科学」と「ヨーロッパ近代文明」にほかならな

いからである。というよりこれらのなかに「とんでもないミス」が含まれていたのだ。

当時はこの「とんでもないミス」こそが「西洋近代科学」を進展させ、この枠組みを確立するために必要不可欠な要素であったし、その「西洋近代科学」を基盤に「ヨーロッパ近代文明」が一段と発展し、両者が一体となって世界へ羽ばたき出して行ったのである。そして「現代科学技術文明」へと変貌し、これが世界文明化していくのである。

「概略はこうだが、これだけではなんのことか分からないだろう……」

こう言うと、ハクリは目をつむり、しばらく瞑想をはじめた。

十六世紀後半から十七世紀にかけて、ヨーロッパにおいて「科学革命」と称されるほどの「自然」の関する研究の大進展が起こる。これを通して西洋近代科学が確立されていく。これを基盤にヨーロッパ近代文明が花開らいた。そして世界文明化していく現代科学技術文明へと連なっていくのだ。

ハクリの瞑想はつづく。彼によると、そのなかに「とんでもないミス」があつたというのだ。それも複数個だ。

「科学革命」は突然起こつたのではない。ヨーロッパではそのまえからギリシャ、ローマ、それにイスラムなど幾多の文明が栄え消えていった。それぞれの遺産も引き継がれ、「科学革命」へと連なつていったのだろう。とすれば、「とんでもないミス」もあながち「西洋近代科学」や「ヨーロッパ近代文明」の所為

とは言い切れないかもしれないが……。

ハクリは瞑想のなかでこんなことも思い浮かべていたかもしれない。閑話休題。

「それはどんなことですか……。その『とんでもないミス』とは……」

ヨウだった。ハクリは目を開き、ヨウをじつと見つめる。顔に笑みが浮かんだ。

「それはね……、ヨウはどう思う？ 『とんでもないミス』とはどんなミスだったと思うかね……」

ハクリが指摘する「とんでもないミス」とは、ひとつは方法論に関するものだ。もうひとつは事実認識に関するものだった。前者は「西洋近代科学」の方法論についてであり、後者は「自然」に対する認識についてであった。

まず、「自然」把握の方法論の基本は、近代哲学の父デカルト（一五九六～一六五〇）の主張する「対象を細かく分け、単純化することを思考の道具」として分析しそれを寄せ合わせて総合するものであった。「自然」の把握はこれを基本とするが、「自然」と人間の関係を客体と主体に区分するのだ。いいかえれば、人間は主体で客体である「自然」を支配する関係に立つということだ。

ではハクリが言う「とんでもないミス」の「とんでもない」とは何を指すのか。

まず、方法論についてみれば、ひとつ目は対象を細分化して単純化することだ。二つ目は分析してからこれを「寄せ集め方

式」に総合して全体像（対象）を把握しようとしていている点である。

以上が対象に関わる問題点だが、別の観点からみれば、人間中心の主体客体二分論が三つ目の問題点となる。

つぎに、事実認識に関しては、「自然」をどう理解し、どうとらえるかが問題となる。「自然」（地球環境）はいくつかの要素要因から構成されているが、これらの要素要因を単なる寄せ集めの集合体ではなく、相互に関係し合い組織化されて全体（システム）を形成しているのである。いいかえれば、自然（地球環境）はひとつのシステム、すなわち地球環境システムであるということである。そしてこのシステムはいくつかのサブシステムからなり、これらは階層構造の構造をもち全体を構成しているのである。

「西洋近代科学」はもちろん、「ヨーロッパ近代文明」においても「自然」（地球環境）に対してこのような見かたはなかった。とくに指摘しておくべき点は、地球環境システムという見かたにおいては、主体客体二分論は取らず、人間や人間行動もシステムの構成要素要因として組織化され、地球環境システム全体を形成していることと理解することである。

繰り返えして言えば、「とんでもないミス」とは方法論的には対象である物質を把握するにあたって厳密さを追及するあまり細分化単純化して専門化に嵌まり、かえって全体を見失ってしまう結果をまねいてしまったこと、主体客体二分論によって人間中心になって「自然」認識が片寄ってしまったこと、などである。このような考え方に囚われて、地球環境システムという見かたができず、主体として地球（自然）を人間本位の支配

をし、「地球環境システム」を台無しにしてしまったのだった。

「科学革命」に関わった科学者はデカルトのほかにもコペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートンら数多い。だが機械論的自然観に立ち、「自然」をシステムの的にとらえようと考えるものはいなかった。それに対象とする「自然」は物質中心で人間をも含めて考える「全体的」な考え方はもちろんなかった。

地球環境を対象とする場合、システムの考えるこの全体的思考法こそ必要不可欠なのであるが、これが「西洋近代科学」と「ヨーロッパ近代文明」に欠けるところであり、限界でもあった。そしてこれらの問題点や限界を抱えたまま、というより、これらを完全に無視して今日の世界文明である現代科学技術文明へと連なっていくのである。そして現代科学技術文明は巨大化高度化大量化を目指して暴走をつづけ、地球環境システムの限界を突き破り、地球をそして人類をも破滅の淵へ陥れてつつあるのである。

「……ということだよ、ヨウ、分かったかね……」

ハクリはヨウへ目を向ける。数秒置いて、ミサの目を見る。「とんでもないミス』のことは分かったわ。それと『火の玉』事件はどう結びつくのかしら……」

ミサは「ミス』のことより「火の玉地球』のことを早く知りたかった。

「性急すぎるよ、ミサ。まだ『ミスのつづき』があるんだから……」

「西洋近代科学」のミスにはまだ続きがある。「とんでもないミ

ス」は調子の乗った「ヨーロッパ近代文明」でさらに拡大再生産せられていくのだ。

「火の玉地球」事件の発生までにはまだまだ時間が必要だったのである。とにかく「終わりの始まり」が始まったばかりだったのだ。

第十三章 地球に何が(六)

当初「西洋近代科学」は「自然」認識の斬新さと単純明解さによって瞬く間に広く受け入れられ、普及していく。これに呼応するように「ヨーロッパ近代文明」も発展するが、「西洋近代科学」の問題点や限界をも抱え込んでいるだけに「ヨーロッパ近代文明」にはこれまで見たこともないアクの強さがあつたのだ。

とくに問題なことは、「ヨーロッパ近代文明」の発展に、「西洋近代科学」の問題点や偏りを「武器」として利用したことである。

デカルト以後、物質中心の科学万能主義のもとで科学の進歩はめざましく、それにともない技術もかつてなく発展する。

進歩著しい科学と技術が手を取り合つて、ワットの蒸気機関が発明される。こうして動力が水力から蒸気(木材から石炭へ)に取つて代わり、産業革命(イギリスで)が起こり、近代合理主義のもとで「ヨーロッパ近代文明」が高次の段階へ進んでいった。新しい文明の花が開くとともに、人間中心の近代個人主義も確立していく。

近代合理主義、近代個人主義をもととして「ヨーロッパ近代文明」がますます発展しつづけ、「ブルドーザー」のような力を持つて世界に向けて展開していったのだ。

しかし、「ヨーロッパ近代文明」の成熟過程で物質中心の科学万能主義の弊害や片寄つた近代合理主義、現世人間中心の近代個人主義からさまざまな問題が顕在化していくのだ。

とくに、強調しておきたいことは、「ヨーロッパ近代文明」

においては力の支配を基礎にし、力の行使が是認されていることだ。「ヨーロッパ近代文明」にあつては基本的に力が支配し、物質中心の「弱肉強食」が支配的行動原理の背景となつていくことだ。

ヨーロッパ列強は「ヨーロッパ近代文明」の「優位」を盾に、覇権争いに明け暮れ、植民地獲得に狂奔する。資源を漁り、領土を奪い、自然を貪り、挙げ句の果てに、二〇世紀には世界戦争を二度も試み、世界の分割統治を図る。

力の行使のためには手段を選ばず、「最新かつ効率的な大量殺戮兵器」の開発を進めた。各国とも軍事技術の開発には軍需産業のみならず広く学者や科学者などあらゆる分野の専門家を動員し、軍民と一丸となつて、最先端の科学技術を駆使して最先に遂行しているのだ。

巨大化高度化大量化を目指して開発生産される大量殺戮兵器は各国とも自国内はもちろん、同盟国や関係国にも配備され、大量に保管されていった。だがこれらの最新型兵器も瞬く間にさらに性能のよい大量殺戮兵器に取つて代わられ、大量の兵器が旧式化していく。最新型に取つて代わられた旧兵器は「賞味期限」切れ兵器(旧式)として闇市場へ大量に横流しされ、これらがテロ組織や反政府軍に流れ、彼らの活動を支えているのだ。

こんなメカニズムが働いている所為か、それとも戦争好きが多いのか、地球上からそして人間社会から戦火が絶えることがない。「兵器は一度造られると必ず人殺しに使用される」のだ。「ハクリ、『火の玉事件』も戦争だつたと思つてゐるの?」

「……」

ハクリはミサを一瞥する。コメント無用といった顔付きだった。

「ヨーロッパ近代文明」は二〇世紀の二度の世界大戦を通してグローバル化の階段をさらに登りつめていく。そして二度目の大戦最末期に「究極の大量殺戮兵器」である原子力爆弾の開発製造に成功する。そして直ちに開発したばかりの二発の新型爆弾を二つの都市に一発ずつ投下する。

原子力爆弾はターゲットの上空で炸裂し、大都市を灰燼に帰し、大量の人びとの命を奪った。

この原子力爆弾の開発には、もうひとつの特記すべき意義があった。これまでそれぞれが独立的に扱われていた「科学」と「技術」と間に緊密な協力関係が図られ一体化したことである。そしてこれを機に、科学と技術の融合が一段と進み、「西洋近代科学」を土台とする「ヨーロッパ近代文明」が一層巨大化し高度化していき、現代科学技術文明として結実し、世界文明への道を歩むこととなる。だがこれには大きな問題があった。それは「西洋近代科学」から持ち込んだ問題点と限界をそのまま、これらをさらに巨大化し高度化したことであつた。

第十四章 地球に何が(七)

このように「西洋近代科学」と「ヨーロッパ近代文明」は広く持て囃され、隆盛を極め、発展を重ねていく。そして瞬く間に、世界は「ヨーロッパ近代文明」を中心に回りはじめていった。

だが隆盛すればするほど、次第にその問題点や限界も露になり出し、それらがもたらす矛盾も顕在化していく。「ヨーロッパ近代文明」の「力」本位の構造も広く認識されるようになるとともに、これらに対する懐疑や反発も深まっていった。

第二次世界大戦終結後、戦勝国を中心に結成され発足した国連は戦後何年経っても「戦勝国クラブ」の趣から脱することができずにいるのだ。これも「力」を信奉する「ヨーロッパ近代文明」の名残なのか。このことを象徴的に表しているのが核兵器保有者による「核クラブ」の存在である。その中枢メンバーがこれも「戦勝国クラブ」メンバーなのだ。

「ハクリ、分かっってきたわ……」

「そうか。ミサにも想像できるか、そのカラクリを……」

「でも、実行手段が……」

「まだわたしにも分からない、具体的に何を使ったのか、多分、最新の技術を用いた新型兵器かもしれないが……」

「それで全体シナリオは……」

「それはこんなものだと思うのだが、これはやはり、現地調査で一度確かめることが必要だろうな。それに……」

ハクリは呟くように言って、天を仰ぐと、両手を広げ、天に

突き刺した。

ハクリが「こんなもの」といった全体シナリオはこんなものだった。

久しぶりに地球に帰ってきて感じたことは、地球がすっかり変わってしまったことだった。

世界(地球)を覆う現代科学技術文明は一層の巨大化高度化大量化を目指し、世界経済も「弱肉強食」のもと新自由主義経済を信奉し、限界間の地球でさらなる成長を図り、地球の限界を盛んに脅かしつづけているのだ。

にもかかわらず、相変わらず「プラス最大化」を第一とする人間活動は盛んで、人口の都市への集中は衰えることは無かった。それに呼応するように地上の至るところが開発され自然破壊が進み、都市化されていった。そしてそこへ人間がうようよと集まり、住み処を造り、住みだした。いまでは世界の都市とその周辺に世界人口の八〇パーセント強が定住しているのだ。

文明とは「自然を壊し、緑を取り払い、ひとを一ヶ所に集めること」とでもいうように、都市化とともに、都市部から緑が消え、自然が喪失していった。

世界中の大小の都市の中心部には巨大な建造物や高層マンションが建並び、郊外へ広がる空間は人工的に造られた非自然空間に変わっていった。年々、人ばかりが増え、それと比例して、人間の居住空間は悪化していく。

都市空間のところどころに、ドーム型の巨大な建物が設置されている。使用目的はさまざまで、特定されているわけでもなかった。ときには、自然災害の避難所になったり、あるときは

イベントに使用されたりするので。またあるときは行き場のない人びとの居場所にもなった。

都市とその周辺はどこも大方こんなものだったが、清潔に保たれているものもあれば、限界を越えた地球のように、ゴミだらけで不潔極まりないところも多く、さまざまだった。

極度の温暖化のせいか、気候は極のつく異常続きであった。大熱波や豪雨、ときには大干ばつが交互に襲う。飲用水や食料の不足が日常的になっていった。海面も大幅に上昇しだし、低地が水浸しになり、その範囲が広がっていく。超異常気象が頻発し、超大雨が増え、洪水地帯が広がっていく。

それでも、世界経済は一見順調で、多くの国々は毎年そこそこの成長を達成しているように見えた。だがそれだけ環境を食いつぶしていたことには気付かず、所得格差は年々拡大する一方だった。富裕層と低所得層間の格差は開くばかりか、環境面でも格差が拡大し、ことに低所得層は酷かった。

たとえば、国連が世界における格差解消を目的に「SDGs プロジェクト」を立ち上げときの、二〇三〇年までの達成を目指す活動目標十七の項目（前掲）のうち、大幅に改善されたものはなく、世界の格差は拡大するばかりであった。だが目標を十分達成したといえるものがみあたらなかったのは、目標の自身自体を明確にできなかったからでもあった。

たとえば、先進国並にするかどうかという、目標達成水準が曖昧だったし、そのための財源の用意も十分でなかった。それよりも、先進国並にするには限界を迎えつつある地球にはそれに応える余分の資源もエネルギーもなかったのだ。実際、極貧困層は増大するばかりで、格差は拡大する一方で、その日暮ら

しすらかなわぬありさまであった。

人びとは食べ物求めて国境を越えて彷徨する。国境を越えるごとに難民の数が増えていく。飢餓難民のあとにはさらにさまざまな新たな難民がつづく。難民の数は増えることがあっても減ることはなかった。

海面上昇で土地が水没し居住地を喪失した人びとや大気汚染などで劣悪化する環境を見限って新たな環境を求める人びとなどの環境難民が急増する一方、政治的な理由で祖国を逃れる人びとや働くところもない恵まれない人びとも難民となって国境を越え、新天地を求めて彷徨うほかないのだ。だが求める別天地はなかなか見つからない。

だが急増する難民と国境警備隊のいざこざが絶えず、国同士の戦火に発展することもあった。

現代科学技術文明はさらなる巨大化高度化大量化を指向する。世界経済も負けじと一層の成長をめざして経済活動は続けられ、地球の限界を脅かしつづけている。こうしたなか、世界の富裕層はますます富み、貧民層はますますやせ細っていく。地球も同じようにますますやせ細り、地球がいくつあっても足りないのだ。

このような僅かな食べ物をするための働き口と狭くても安心して休むところあればいいだけの難民たちでさえ、追い出されることがあっても温かく迎えてくれるところはなかなか見つからないのだ。

「ハクリ、分かったわ。地球は現代科学技術文明の吐き出すプラス・マイナスで満杯になっているのに、それが一方的に片寄っ

てしまっているというわけね。それでこの事態を解消しようとしたのがあの『火の玉』事件だということでしょう。その結果……」

「まあね。でも、問題はあの事件を誰がそしてどういう手段をもって実行したかだが……、ミサはどう考える？」

「難民たちが他国へ行つて『食よこせ』『職よこせ』とデモるわけにもいかないでしょうし、困ったわね……」

「……」

「それに、ヨウと見てきた範囲では、都市は跡形もなく灰燼に帰して完全に消滅している状態だったし、周囲には全然人影が見えなかったわよ。ヨウちゃん、そうよね」

ミサはそばに近づいてきたヨウに同意を求めた。

「うん。なにもしなかったよ、見て回った範囲では……」

現代科学技術文明の支配する世界は富裕層の世界であり、貧困層は現代科学技術文明のおこぼれに預かって生きるほかない「格差社会」の奴隷であり、生贄に過ぎなかった。彼らのなかには「格差社会」システムの改造改革を試みる動きもあったが、バーチャル空間で飼いなされ、バーチャルの世界に生きる者たちには体力もなければ気力もなかったのだ。

「これが第一の実行シナリオだよ……」

「え……なにもしないということなの。このままジ・エンドを迎えるということなの……」

「エへへ……」

ミサは驚き、ヨウは笑いだす。

「でも、地球を喰い尽くしてしまった後は、富裕層はどうなるの、それに貧困層の人びとは……」

「ヨウ、それはなにも問題のないことだ」

「なぜ……」

「金持ちは『月の別荘』や『火星の別荘』へ避難する。貧乏人は全員餓死してしまうことになる……」

「まさか……。じゃ、第二のシナリオは……、どんなことを考えているの……、ハクリ」

第二の実行シナリオはこうだった。

彼ら貧困層のなかにも、この世界を一度リセットしてみたいと思う者も現われるかもしれない。かといって、皆殺しにしてもなにひとつ解決することにはならない。そこでバーチャル空間の住人のひとりがIT技術を駆使して新しい手段を考案するのだ。

その若い男はネット仲間を募って「自律型」ロボットの製作を試みる。そしてそのロボットにAIを搭載する。AIに特別な任務を命じるのだ。

たとえば、かつて国連の「SDGsプロジェクト」が掲げた十七項目の達成目標（前掲）を同時に解決する方法の考案とそ実行はどうだろうか。

第三のシナリオも上げておこうか。

これは第二の命令内容だけが異なる変形シナリオだ。命令は下記のようにどうか。

「地球上の核兵器のすべてを探知して、遠隔操作で爆破処理する技術を開発し、全核兵器を即刻処理せよ。その他の大量殺戮兵器も残さず破壊すること」

世界には米口を中心に核兵器が大量に保有されている。世界人口を何回も殺せる量だが、全く無用の代物なのだ。この際、地球上からあらゆる兵器も一掃してしまうのだ。

(参考)

第三のシナリオ (案)

「以上が考えうるシナリオだ。『火の玉』事件を想定して、それを前提にすると考えうる範囲も限定されてしまうからこの程度のものしか思い付かないけど……」

「それにしても素っ気無さ過ぎるじゃないの」
ヨウだ。幾分荒げた声だった。

「どうかした……」

ハクリにはヨウの気持ち分からない。

「ヨウちゃん、どうしたの、ハクリに分かるように説明しなくちゃ……」

ミサにはヨウが素っ気無いと感じたことはなんとなく分かるような気がする。

「別に怒っているわけじゃないけど、なんとなくハクリのシナリオは地球のことと地球に住んでいる人びとのことをあつさり扱っているように感じたんだ……」

『あつさり扱っている』ってどういうこと……」

『簡単に……』とか『深く考えないで……』とかかな」

ミサが言い換える。

「地球をリセットするといつてもリセットボタンを押した途端に古い地球が生まれ変わって新しい地球になるわけでもないし、また世界人口の半数が難民となったとしてもなんとか救う手立てはないかと思ってしまう。だから、シナリオの表現を素っ気無いと感じたのかもしれないということです。別に怒っていた訳ではないよ。ハクリを誤解させるようなことになってゴメン」

「ヨウが地球人であることを忘れていた訳じゃないよ。やはり、一度、現地調査してみなくちゃ。そうしてからでないと状況を正確に理解することは難しいということだね。とにかく、地上に下りて確かめることにしようか」

ハクリとヨウが手を取り合って歩き出す。ミサもつづく。

第十五章 地球に何が（八）

「さーて、調査はどこからはじめるかな……」

ハクリは二人を振り返る。

「三人のなかで『火の玉』の現物を目撃したのはヨウだけだ。まず、その時の様子を知りたい。できるだけ詳しく話してくれないかな。調査地点を絞り込むために是非情報が欲しいのだよ」

「ヨウちゃん、さあ、話して……」

「あれは確か、午後の遅い時間だったような気がするが、正確な時間は覚えていない。その時、ぼくは事務所を出たばかりで、上空から地球を見ていたのだが、一瞬、お月さまかと思っただけだったから、地球は満月のときの月と同じくらいの大きさだったのだろう。いや、もっと大きかったかなあ。もう少し接近しようとした時、突然閃光が走った……」

閃光は一瞬だった。次の瞬間には、火の海が一面に広がっていた。だがこれはほんの一瞬の出来事だった。文字にすると長くなるが、これは一回瞬いただけの極く短時間に起こった出来事だったのである。

つぎの瞬間には、「火の海」の上から黒い幕が下りてきた。そして「火の海」が徐々に消えていくように全体をゆっくり包んでいった。

そしてヨウは「閃光は一瞬だったけど、それからの出来事はソローモーシヨン・ピクチャーを見ているようだった」と付け加えた。

ハクリは大きく頷き、そしてミサを見た。

「これを聞いて、ミサは核の全面戦争を思い浮かべたのかな……」

「一瞬、そう思ったわ……、変かしら……」

「ミサはいまもそう考えているのなら、最初は北米大陸がいいね。それも砂漠地帯がいいだろうな」

「どうして砂漠を……」

「核兵器のサイロや貯蔵施設の立地に適しているらしいと……」
「そうかも……」

ミサは大きく頷くと、ヨウを促し、ハクリのあとを追った。彼女は地上に着いたら、時間を戻して、地球が「火の玉」となる様子をじっくり確かめたいと思っていた。

ハクリが急降下はじめた。二人は後に付いていく。

着陸地点は米国西海岸だった。メキシコとの国境に近い都市だった。だが都市らしい姿は消え失せてなにもなかった。

「ハクリ、砂漠じゃないんじゃない？」

「ここは街の跡で、港は軍港で原潜の基地とだったんだよ。もちろん、原潜はどこにいるか分からないけど、核弾頭は常備して発射態勢にあるはずだ。戦争態勢にあればだけど、もう戦争は終わってしまったんだろうな……」

なぜか、ハクリは饒舌だった。

「……原潜の話はこれまでだよ。もう過去の出来事だからね。では、砂漠だが、ここから少し内陸へ入ると、大きささまざまな砂漠がいくつもあるんだ。どこにするかな。一番近いところで

いいか……」

砂漠に入る時は、重装備の車に乗り換えなければならない。砂漠にはなにもない。迷ってしまえば、何日も救助を待つことになるからだ。最低限、用意するものは、ガソリン（ガステーションでの給油）、飲み水、食料、野営装備（一式）など、それぞれが滞在日数×人数分が必要となるなど。だが瞬間移動などさまざまな術の心得を持っている三人にはその必要がなかった。

「砂漠に入るまえに、その辺を探索してみようか。誰かに会えればしめたものだ。ヨウはどこへ行った、姿がないが……」

「ヨウちゃん、どこへ行ったのかしら……」

「帰ってくるまでここで待ってようか……」

ミサは立ったまま、辺りを見まわしていたが、「一寸、探してくるわ」といつて飛び出す。

行き違いにヨウが帰ってきた。ハクリは黙ってヨウを迎える。

「ミサは……」

ミサの姿がないのに気付いたのか、ヨウはしきりにあたりを見まわす。

「直ぐ戻るよ。ヨウはどこへ行ったの、いままで……」

「うん、誰かいないかと思って近くを見て回っていたんだ。でもいつの間にか、迷ってしまって帰り道が分からなくなっ……、周りがみな同じように見えてくるんだよね……」

ミサはまだ戻ってこなかった。彼女も迷っているのかと思つたものの、ハクリは動かず、じつと待っていた。

ハクリはヨウに「どこにも人影がなかった」ことを確かめると、ミサの「核全面戦争説」を思い浮かべていた。ビルも街並も消滅したように消えている、とすれば、ミサが考えているように、核爆弾が上空で爆発したということか。

これで問題は解決したように見えるが、まだいくつか問題が残っているのだ。これらの問題がすべて解決しなければ、解決したことにならないのではないか。

「火の玉」事件を説明するにはつぎのような疑問が解明され解消されなければならない。その疑問は次のようなものである。

疑問の第一は、「どこにも人影がなかった」ということが地球上のすべての地点で起きているのか。起きているとすれば、地球上の人間のすべてを殺したことになるのか。もしそうだとすれば、なぜそうする必要があるのか。その理由はなにか。それに加えて、どのような方法を用いてこれを実行したのか。

第二の疑問は、第一の疑問の対象が人間であったのに対して、都市を対象にするほぼ同様なことである。

煩雑になるが、念のために、繰り返しておこう。

消滅の対象となった都市は地球上のすべてか。消滅する都市の範囲も同様か。具体的にその「都市」にはどのようなものが含まれるのか。現代科学技術文明に関わるものはすべて含まれるのか。なぜそうするのか。その理由はなにか。その実行方法はどうか。

「あ、ヨウちゃん帰っていたの。どこへいったの……」

「迷ってしまっていたらしいよ」

ハクリが横から助け船を出す。

「まあ、よかった。わたしも迷ってしまったわよ、どこも同じようなものだもの……」

「以後、単独行動は厳禁だ、絶対ダメだぞ、いいね。もし、砂漠で迷ったら、今度はいのちがないからね……」

ハクリは大声で言う。

第十六章 地球に何が（九）

「あれは湖かしら……」

ハクリの後を追うミサが呟く。

「湖らしいね、ハクリは砂漠へ行くと行っていただけだなあ……」

ヨウも腑に落ちないらしい。

「ここだ」

ハクリが盛んに手を振っている。近くにごつごつした岩むき出しの小さな岩山があり、筒状の噴き出し口から白い蒸気を噴き出していた。

「ここが砂漠なの……」

ミサがハクリに確かめる。湖があり、常時蒸気を吹き出しているのに、岩山のまえに開ける低地には草が一面に生えているのだ。砂漠と言えば砂地が広がっているとこのイメージしかない彼女には眼前に広がる自然は砂漠ではなかったのだ。

「砂漠といっても雨が降るんだよ。まあ、定義の問題だけどね、地球では『熱帯・温帯の大陸で、年降雨量二〇〇ミリ以下の乾燥地帯にできる荒原』と定義しているらしい」

「うん、そうか。砂漠でも乾燥に強い草木はよく育つんだ。サボテンなんか、砂漠の写真やテレビでよく見かけるものね……」

ミサは何度も頷きながら、ハクリはなんでも知っているんだと思ってしまう。

「ところで、もう気付いているかと思うけど、来る途中で都市や街などの人工物は全然見かけなかったでしょう」

「やはり、人影もなかった。どこにも生存者はいないのかな……」

ヨウが素早く応じる。

「他の地点も……そうなのかしら。世界中のすべても……」

「そうかもしれない。きみたちふたりが調べた地点でもそんな感じだったら、この問題はこれ以上深入りしなくてもよさそうだね。まだ別の問題が残っている……」

「それは誰がこんなことをどんな理由で、そしてどんな手段で実行したかということですよ」

「そうだ。ヨウの言うとおりだ」ハクリは満足気にヨウを見る。そして言った。「ところでヨウはどう思う」

「ぼくはね、現代科学技術文明に恨みを持っているヤツの仕業だと思う。モノもヒトもすべて一緒にヤルにはかなり強力な破壊力を必要とすることを考えれば、やはり核爆弾の使用とか、世界規模の全面核戦争が勃発したと考えるほかにんじゃないかと思えます」

「うん、そう考えるか……、じゃ、ミサはどう考える？」

「わたしは現代科学技術文明に『サイトカインストーム』が発生したんじゃないかな、そんな感じがしているんです。一寸突飛過ぎるかもしれませんが……」

「人体における『免疫暴走現象』のことですよ、その『サイトカインストーム』とは。それでミサは現代科学技術文明が自ら自己を否定して自ら自分を破壊しているのだというのですか……」

「ええ、そんな風に見えるんです。現代科学技術文明が自分が存在する場である地球（自然）の限界を超えてしまっていることに気付いて、そういう行動をとったと考えられませんか。自己の存在する場の限界を超えてしまうということは自ら自分の

存在を否定することですから……」

「それは考え過ぎじゃないかな。それでは現代科学技術文明が自ら自己をコントロールするということになりますよ。本当にその通りなら、地球の限界を超えるまえに、自己に対するコントロールが働くはずじゃないかな。そうでなければ、コントロール機能を認めることは出来ない。地球の限界を超えてしまつてから働いても、何の効果もないからだ。それは事故に気付いて、慌ててブレーキを踏む類いだよ。現代科学技術文明にはコントロール機能ないし、ただ暴走することしかできない。現代科学技術文明を買いかぶつてはいけない。『サイトカインストーム』は人体における免疫暴走現象であつて、それは生命維持のための現象ではないのだ。むしろ逆だ」

人体における「サイトカインストーム」現象は極めて興味深いものである。人間の免疫システムは生命維持装置のひとつであるが、男女によつて働きが微妙に異なる。免疫システムには生来の「自然免疫」と後で出来る「獲得免疫」とがあるが、免疫システムではこの順で機能する。実際には免疫細胞からサイトカインというたんぱく質が放出されて免疫応答が活性化する。最初の「自然免疫」段階では男性にサイトカインの放出が多く、これが過剰になると正常な細胞も攻撃するようになる。この現象が「サイトカインストーム（免疫暴走）」といわれるものである。

「わたしが現代科学技術文明が『サイトカインストーム』の状態あるといったのは、まさにそういうことです。現代科学技術文明そのものが自殺状態にあると思つているのです。まあ、それ

はそれとして、提案したいことがあるんですよ。いまここで、あの『火の玉』事件の発生過程を実際の時間の流れにしたがいチェックしてみてもどうですか。そうすればその原因も明らかになるでしょう。ヨウちゃんもそういつていたよね……」

同意を求めるように、ミサはヨウを振り返る。

第十七章 地球に何が(十)

「おもしろい。そうしよう。ここを舞台にするか、それとも場所を変えるか……」

ハクリはミサとヨウを交互に見る。それから眼前に広がる湖面に目を移す。

波ひとつない湖面が水平に広がり、対岸に近い湖面からピラミット型の岩山が突き出し霞んでいる。

「ハクリ、ぼくは街の方に場所を変えたほうがいいんじゃないかなと思うよ……」

「そうかね……」

ハクリは自分が考えたシナリオを思い浮かべ、これから起きる出来事を想像しているのか、動こうとしない。

「そうよ。ここになにもなければ、『火の玉』事件で何の変化もないかもしれないわ。それでは『火の玉』事件があつたかどうかさえも判定できないのでは……」

ヨウとミサに指摘され、ハクリは「じゃ、街の方に少し戻ろうか、それとも都心部がいいか」と言い、動き出す。

ハクリは『火の玉』事件が発生した日時を割り出しながら、『火の玉』事件発生日時より若干前からチェックをはじめ、ほうがいろいろだね」と言い、移動プランを立てている。

「いいかね、これから時間を戻して『火の玉』事件発生の数年前まで過去へバックしていく。離れないで付いてきてくれ、いいね。じゃ、行くよ」

ハクリはふたりがそばに居ることを確かめると、過去へ向かつて過ぎた時間を戻りはじめる。

薄暗い闇が晴れると目の前に広い道路が走り、その両側に中層ビルが建並ぶ街の交差点に近い歩道の片隅に三人が一团となっていた。時間は確かに戻っていた。歩道には人が溢れ混雑している。もうすぐ何かが起こる。そんな機運が充ち満ちていた。

「『火の玉』かしら……」

「いや、まだ間がある。あと、何日か、いや、何年かもしれない」

「ハクリ……」

ミサが空を指差す。上空で閃光が走る。

ハクリがミサとヨウの手を取り、ビルの地下へ飛び込む。

熱風が襲う。すべてのモノが火を噴き、一瞬のうちに巨大な火炎となった。

「ハクリ、これで終わり？」

「それは分からない。これは始まりの始まりに過ぎない。『火の玉』から始まる一連の出来事が全部終わるまでにはかなりの時間が掛かったようだ。きみたちが見てきたように、消えた都市の跡は水没していたそうだね。そうになると、まず都市が破壊され、そのあとから水が襲ってきたと思われるがどうか、ここでしばらく待機して、そのことを確かめてみようと思っているが、かなりの時間がかかるだろう。そのための時間はゆつたりとつてあるが、どうする……」

「そうですか、それでどのくらい待つのかしら……」

「海面上昇がいまどのように進行しているによるな。進行速度

「が分かれば計算できるが……」

「ハクリ、でも、ここで起きたことが世界中でも起きているのかしら……」

「ミサ、そうだ。待機している間にそのチェックを先にしたほうがいいかもね……」

三人が分担して調査することになった。ハクリは北米と南米の両大陸、ミサはヨーロッパ（ユーラシア大陸を含む）とアフリカ大陸、ヨウは残りのアジア、オセアニアだ。

対象は世界中の都市だ。調査内容は攻撃されて破壊されているか。その程度はどうか。それに生存者有無もチェックするのだ。調査は概略で三日以内に済ませ、ここ出発点に戻るのだ。

「この調査でミサがいつていた全面核戦争かどうかがある程度分かるかもしれないな……」

ハクリはしばらく口を閉ざしていたが、突然ミサとヨウに強い視線を向け、ふたたび口を開いた。

「念のために言っておくけど、チェックは概略でいいのだよ。最終的には三人一緒で詳しい調査をもう一度行なうことになるからね。必ず、三日以内にここに帰ってくることに、絶対、時間のレベルを変えたり、寄り道したりしないことだね。今度の調査で迷ったりしたら探し出せるかどうか分からない。ことに、時間のレベル変えて迷ってしまったら探し出すのは容易ではないからね、いいね……」

ハクリの最後の「グッド・ラック」の声に三人はそれぞれの

目指す方向に翔んで行く。

第十八章 地球に何が(十一)

ハクリは北米西海岸から東海岸へ向かい、フロリダ半島から海岸沿いに北上し、カナダに入り、反転して、五大湖を抜けて米国中央部で南下し、メキシコの東側からメキシコ湾岸諸国を縦断して南米大陸へ向かう。南米では大陸の海岸線を一周するのだ。

都市はすべて破壊尽くされ瓦礫の山と化していた。瓦礫の一部からか細い煙が立上っていたが、すでに燃えるものは燃え尽くしたのか煙も次第に消えていく。

姿恰好は判然としないが、瓦礫の其処彼処に遺体らしき黒く焼きただれた物体が散乱しているものの、人影はない。訪れた都市は多かれ少なかれすべてこんな状態だった。

やはりミサが想像したように、世界は核全面戦争だったのか。そして戦争勃発と同時に世界中の都市が、少なくとも北米南米両大陸ではほぼ同時に核攻撃を受け、全滅したというのだろう。

ハクリはこう結論づけてもいいと思った。彼にはもうやることはなかった。

ミサの顔が浮かんだ。ハクリはミサが『サイトカイン・ストローム』のような症状が現代科学技術文明にも見られるんじゃないかしら」と言っていたことを思い出していた。

「免疫暴走」と言われる「サイトカイン・ストローム」現象は本来人体の生命維持システムである「免疫システム」が異常に活性化（サイトカインの大量放出による）し、防御すべき自己

細胞（自己の生命体）をも逆に攻撃するまさに「自爆行動」ともいべきものである。これは生命維持を目的とする「免疫システム」そのものを頭から否定することである。これでは生命を維持することはできない。

このような症状が現代科学技術文明にも見られるのではないかとミサは言うがこれはどういうことか。

そもそも現代科学技術文明にこのような「自爆行動」装置が備えられているとは考え難いし、それが内在的に備わっているとしてもそのスイッチを自ら押しして自爆するとは考えられないではないか。

文明とは「世の中が開けて進んで、精神上物質上の生活が豊かに便利になること」だ。現代科学技術文明とは現代の最先端科学技術を基礎に構築された高度な文明のことである。その高度文明に自らその存在（自己）を否定するような「サイトカイン・ストローム」のような装置が内包されているのではないのか。現代科学技術文明に「サイトカイン・ストローム」装置が内包されているとすれば、「サイトカイン・ストローム」現象を回避するにはその発生装置を機能させないようにすることである。

人体の免疫システムではまず生まれながらの「自然免疫」が、ついであるの「獲得免疫」の順で発動するが、「サイトカイン・ストローム」の発生は、最初の「自然免疫」の発動の際に見られる「サイトカイン（たんぱく質）」の異常供給による免疫の活性化現象（免疫暴走）である。そして自分の正常な細胞を攻撃してしまうというのだ。

人体の免疫システムにおいては、自己と非自己の区別が大前

提で、この識別機能が完璧でないと免疫が十分機能しないことになるが、「サイトカイン・ストローム」の際には、生まれながらの「自然免疫」が第一に暴走状態となり、「獲得免疫」は二の次ということである。このことは一体なにを意味するか。種の純粋性を維持するためか、それとも遺伝子配列の乱れを防ぐためか。

ここに謎を解くカギがあるのでないか。これについては後でまた触れる。

現代科学技術文明に「サイトカイン・ストローム」的機能を期待することは土台無理であると思われるので、この問題はこの程度にして、ただ現代科学技術文明においても「自爆行為」の可能性が存在することだけは指摘しておこう。

なお、以上の問題は後でまた触れる機会があるだろう。

最後に一言、現代科学技術文明にも自己崩壊の危険性を内包しているのだ。これが地球を滅ぼし、人類を絶滅することにならなければならないがどうなるか。

第十九章 地球に何が (十二)

『ヨウちゃん、一緒に行こうか……』

「うん、でも、一緒に行けば二人分の調査にひとり分の時間しかないことになるんだよ」

「うん、そうだね、でも一度見て回ったところだから大丈夫よ、簡単に済むわ」

調査ルートは、まず、オーストラリア大陸の南端へ飛んで東海岸沿いに北上する。北端のヨーク岬半島からニューギニア島へ、インドネシアからタイへ、そこから中国の東海岸を北上する。ロシアに入れば、まえの踏査したルートでシベリアを西へ、そしてヨーロッパへ向かうのだ。

ここから若干ルートを変えて、トルコから中東諸国を回り、アフリカ大陸に入り、東海岸縁を南下する。時間があれば、大陸の南端から西海岸縁を北上するか、それとも南極大陸を覗くかしよう。

前回は調査した都市のすべてが水没していたが、今回は以前より早い海面急上昇が始まる前の時点だったので、水没都市は見当たらず、瓦礫の山ばかりであった。これらのすべてが、前回見たように、水中深く水没してしまうことになるのか。これを確認するために、今回はアフリカ大陸の西海岸の調査の代わりに、南極大陸へ向かった。

南極大陸は大きく東南極大陸と西南極大陸とに分かれ、分厚い氷床で覆われているが、後者の氷床の底は大部分が海面下に

あるため、東南極大陸に比べて西南極大陸の氷床は不安定で崩壊したり融解したりしやすいのだ。ことに、水位が上昇すると、西南極大陸の氷床はさらに急速に不安定化するが、それがはじまっていたのだ。

「もういいわね、そろそろ帰ろうかな。ハクリが待っているわ」
「うん……」

ヨウは未練あり気に西南極大陸の氷床を見ていて動こうとしない。

「ヨウちゃん、なにか気になることがあるの……」

「あそこの氷の壁が……」

ヨウの指差す氷床の壁から大小の氷片がしきりに落下し出していた。長く延びる巨大な氷壁が傾き出した。中央にひびが走る。ひびが大きく広がる。突然割れて前方右部分の氷床が前のめりに水中に没していった。残っていた後方の氷床がつづいて水中に消えていった。

海面に大波が広がり、白い波頭を立て、津波のように一直線になって進んでいった。

「これで一挙に海面が上昇するだろう。連鎖的に氷床の崩壊が進めばさらに海面が上昇することになる……」

第二十章 地球に何が (十三)

遠くで手を振っている。ハクリだ。ミサが駆け寄る。

「案の定、すべての都市は瓦礫の山だったわ。水没しているところは一ヶ所もなかった。核攻撃が先で水没はその後だったのね」

「生き残ったひとには……」

「一人にも出会わなかった。都市部では住民全員が犠牲になったようにけど、山間部の集落や鄙びた農漁村ではどうか分からない。調査にいかなかったから……もしかしたら、生存者がいるかもしれない……」

「やはりそうか……」

ハクリにはなにか思い当たることがあるのか、急に、黙り込む。

都市部は壊滅的被害を受けているのに、過疎地帯はそうでもないらしい。なぜか。また、森林地帯のすべてが火災で焼失したわけでもなかった。一部は残っているという。

「調査の結果、新しいことも分かったらしいから、詳細調査に行くまえに、これまで得たデータを集めて分析してみようじゃないか。その結果を見て新しい調査計画案をつくることにしよう。ミサには全面核戦争説で説明しきれない部分もあるようだし……」

「全面核戦争なんて安易に考えていたけど、それは撤回しなければならぬかも……」

「あれはあれでひとつの考え方だよ。まあ、それよりも『サイトカイン・ストローム』説は魅力的だった……」

「どこが……」

「アメリカ大陸を移動しながら考えたんだが、あれでうまく説明できるかもしれないよ。そこで、いま思い付いたんだが、これを仮説にして詳細調査を行なってはどうかかなと思っているんだが……」

「どんなふうに……」

瓦礫のコンクリートの塊に腰を下ろしていたヨウが立ち上がる。ハクリとミサのやり取りを黙って聞いていたヨウの目がなぜか輝き出していた。

ヨウは幼い頃から「現代科学技術文明」に馴染めなかった。

その現代科学技術文明が自ら崩壊していくことになるという「サイトカイン・ストローム」説に、彼は心から喝采したい気持ちだったのだ。この説を完全に理解していたかは不明だったが……。

ミサの「サイトカイン・ストローム」説を多少アレンジしているところがあつたが、ハクリの考えはこうだ。

「サイトカイン・ストローム」という仕組みの本質は自損行為や自殺行動などの自己の存在を否定する行動を是認し、最終的に自己存在の否定に至ることである。たとえば、人間の「免疫システム」に見られる「サイトカイン・ストローム」現象は男性の「自然免疫」が機能する段階でよく見られる現象といわれるが（なぜそうなるかについてはここでは触れない）、この段階で免疫細胞を活性化するたんぱく質「サイトカイン」を大量に放出して免疫細胞に過剰な活性化をもたらすのだ。ここまでは問題はないが、過剰に活性化した免疫細胞が自己非自己の

区別を忘れ、自分の正常細胞の攻撃を始めるのだ。これが「サイトカイン・ストローム（免疫暴走）」現象である。

これは一体なにを意味するか。コロナウイルスのケースを例にすれば、こういうことだろう。

コロナウイルスと免疫細胞の戦いにおいて免疫細胞が自己細胞の攻撃に出ることは、一見、コロナウイルスに味方するように見えるが、戦いに負けてコロナウイルスの宿主に身を落すよりも身を投げ捨ててコロナウイルスの生きる道を絶つ作戦に出たとはいえないか。さらにいえば、宿主として未知のウイルスを抱え込むことによる遺伝子変異等のリスクを回避する作戦かもしれない。

では「サイトカイン・ストローム（免疫暴走）」のような仕組みが現代科学技術文明にも備わっていると考えることができるだろうか。それには現代科学技術文明に「免疫システム」のような生命維持のための装置が組み込まれているかどうかだ。そしてもしそれがあっても一旦緩急あれば対抗してその装置を即座に作動させることができるだろうか。

「ミサ、まえに現代科学技術文明自体が「サイトカイン・ストローム（免疫暴走）」の状況にあるようだと言っていたね。ミサはいまも、人体における「免疫システム」の異常暴走である「サイトカインストーム」と同様な仕組みによって、今回の「地球火の玉」事件が現代科学技術文明という舞台において発生したのではないかと思っているのかね……」

「確信はないけど、もしそのようなシステムが現代科学技術文明に備わっているのなら、すべての都市を破壊することも不可

能ではないと思うわ。人間全滅についてもそういうえるわね……」
「ということは……」

「二寸分かりにくいかと思うけど、現代科学技術文明が自分に対する自損行為あるいは自壊行動として都市（これは現代科学技術文明の産物または現代科学技術文明を象徴する建物などの集合体だ）や人類（現代科学技術文明の創造者）に対する攻撃が行なわれたと考えられるというわけね……」
「うーん、そういう風に考えるのか、でも少々分かりにくいね……、『サイトカインストーム』のケースで言えば、この状態

になると人体の免疫システムが暴走し自分の正常な細胞を攻撃するようになるね、このことを現代科学技術文明のケースに置き換えると、攻撃される「自分の正常な細胞」が「都市や人類（人間）」になると言うんだね……」
「まあ、そういうことね……」

「現代科学技術文明の『正常な細胞』に該当するものがなぜ『都市や人類』になるという点は分かりにくいけど、そう設定するということ……」

「そういうことです。細胞というとはさまざまな細胞を包括しているいつているのに対し、都市や人類となるとかなり範囲が狭められてくるので、対応関係に若干ズレがあるから分かり難くなるのかもしれないですね、でもそれらはその一例と考えることもできるし……」

「うーん、ミサの言う人体における「免疫システム」の異常暴走である『サイトカインストーム』と同様な仕組みが現代科学技術文明にも組み込まれているんじゃないかという考え方は、わたしにも理解できるが、『正常な細胞』への攻撃レベルに焦

点を置き過ぎていてるように感じる。同じことでももう少し高いレベルから見ると別のものが見えてくる場合があるよ……」

ハクリはミサが言っていることは間違っていないが、ムリヤリ「サイトカインストーム」現象を「現代科学技術文明システム」のなかに持ち込み、性急にあてはめようと躓いている感じがしてならないのだ。「現代科学技術文明」をひとつのシステムとしてみれば、そこに「サイトカインストーム」的現象が見られるとする考え方が間違っているとは思えなかったが、考え方の攻め方に問題はないか。

現代科学技術文明は地球環境システムのなかのひとつのサブシステムであることを考えれば、「サイトカインストーム」のような機能はむしろ地球環境システムレベルのもので、その自損行為や自壊的攻撃は現代科学技術文明そのものに直接向けられるべきものと考えるほうが妥当ではないか。

さらに説明すればこうなるだろう。

一方は人間（の免疫システム）であり、対するのは現代科学技術文明だ。共通の基盤はなにか。地球か。ならばそこに共通する基盤的基礎概念はなにか。それはシステムではないだろうか。

地球システムはひとつの全体を形成しているものだ。いまここで問題となっている「人間」にしろ、「現代科学技術文明」にしろ、これらは地球システムを構成しているもの（構成体、サブシステム）である。これらの構成体にはさまざまなものがあり、それらがすべて含まれるが、基本的には個々のシステム（地球システムを構成する個々の下位システム）であったり、

システムを形成していない個々の要素要因などである。

地球システムはこれら構成体（サブシステム）が相互に依存し関係し合って上位下位の階層構造のもとに動的バランスを保つてひとつの全体を形成しているものである。このような地球システムに「サイトカインストーム」の例を当て嵌めるなら、人体における「免疫システム」の暴走に対してこの「動的バランス」の暴走ということになるだろう。

これを「現代科学技術文明システム」に置き換えるならば、現代科学技術文明における「サイトカインストーム」とは現代科学技術文明システムのバランスを忘れた暴走現象ということである。

ハクリはミサの『「サイトカインストーム」と同様な仕組みが現代科学技術文明にも組み込まれている』ということをこのように理解したが、問題はこのことと「地球火の玉」事件との関係である。

「ミサ、現代科学技術文明に『サイトカインストーム』と同様な仕組みが組み込まれているとすれば、今回の『地球火の玉』事件との関係をどのように説明するのか。誰がどのようにして『地球火の玉』事件を起こしたのかだ。どんな手段で世界中の都市を破壊し、人間をひとり残さず殺戮できたのかだ。これが説明できれば……」

「それは……」

「全面核戦争だとすれば、誰がどのように実行したのかだね、問題は……」

「それは……」

「AI集団が現代科学技術文明そのものをリセットしなければならぬと判断し、その元凶は現代科学技術文明の仕掛け人である人類（人間）を一掃することになった。そして知的生物〔人間〕の巣である「都市」という現代科学技術文明システムの象徴をターゲットにして全面核戦争を仕掛けたということか

……」

「……」

「お話としては良くできているけど、現実性がいまいちの感じがする。ヨウはどう思う……」

「シナリオとしてはよくできているというなら、現場に出向いて実証データを集めることにしては……、ムダになっても元々ですよ。もしかしたら、面白い新事実発見となるかも。さあ、出掛けましょう……」

ハクリはヨウをじっと見つめる。しばらくして天空の遠くに視線を転じると、何事もなかったように歩き出した。

第二十一章 地球に何が (十四)

「ミサ、あの『火の玉』は現代科学技術文明の『終わりの始まり』の合図だったかもしれないよ……」

「なんの合図ですって……」

「あれは現代科学技術文明の『サイトカインストーム』の始まりを知らせる合図だったにちがいないということだよ。そして人体における免疫システムのケースに見られる自己の正常細胞への攻撃と同様な現象が起きたのだ。すなわち、現代科学技術文明の保有する巨大な破壊力（その象徴的なものが原子力（核兵器）ということである）へのアタックが開始された。それがあの『火の玉』事件だったと思うのだよ……」

「……」

「人体における『サイトカインストーム』は外敵（新型コロナウイルスウィルスなど）への人体側の『わが身を捨てて行なう最後の最後の抵抗現象』であると思うが、これと同じように、今回の『火の玉』事件も現代科学技術文明に対する最後の抵抗といふべきものではないか……」

「なぜそう考えるのかしら……」

「それは……」

ハクリの考えはこうだった。

現代科学技術文明は巨大化高度化大量化を目指して進展を重ねてきた。その果てに、過度の巨大化、過度の高度化、過度の大量化が進み、現代科学技術文明そのものを脅かすまでになっていく。一例をあげれば、核爆弾などの核兵器だ。すでに地球

上には世界中のすべての人間を何度も殺せる量の原子爆弾が保有されている。これがなんらかの拍子に爆発すればどうなるか。

確実に、現代科学技術文明の花である世界中の大都市は破壊され、現代科学技術文明システムそのものが崩壊することだろう。

「ハクリ、なぜ、現代科学技術文明は過度の進展を重ねるのですか。過度の進展にとどめることができないのですか」

「ミサ、それはできないんだよ、現代科学技術文明には……」

「なぜ、できないの、文明は人間が造るものでしょ……」

「そうだね、現代科学技術文明はデカルトらの近代西洋科学を基礎に発展してきたものだったね……」

「うん、そうか、その近代西洋科学の段階でとんでもない間違いを仕出かしてしまった。そのツケが現代科学技術文明に回ってきているというのですか……」

「そのせいで現代科学技術文明にはその巨大化高度化大量化が過度なものか否かの判定ができず、エンドレスに進展をつづけてしまっているのだよ」

「それを現代科学技術文明はチェックできないままエンドレスに進むとなると……」

「どうなるか……」

「あ、『サイトカインストーム』のお出ましだ」

「その機能が現代科学技術文明に仕込まれていれば作動するだろうが……」

「ダメですか……」

「人体での『サイトカインストーム』のような現象は個々の単体レベルで成り立っても、現代科学技術文明システムのような

さまざまなレベルのもので構成されている巨大で複雑な『複合体』ではムリじゃないかと思うよ……」

「ということは、現代科学技術文明に『サイトカインストーム』のような装置が仕組まれることはないということですか。となると全面戦争による核攻撃の話も成り立たなくなるわ」

「そりゃ、困った……」

ヨウが側から口を挟む。

「ヨウちゃんたら……、本当に困っているのよ、茶化しちゃダメよ、世界中の都市や人びとを……」

ミサは「サイトカインストーム」における自己細胞への攻撃と同様なことが現代科学技術文明においても起こりうることを想定し、その攻撃が全面核戦争だったと考えていたらしい。

「そのことは人体の『サイトカインストーム』レベルでなく、全く別の次元のことだと思うよ……」

「別の次元……」

ハクリの考えはこうだ。

システムはひとつの全体として存在する。現代科学技術文明システムがひとつの全体として存続するためにはそれを構成するさまざまなサブシステムや要因要素間のバランスが維持されていないければならない。バランスが崩れると全体としてのシステムが崩壊するからである。

それゆえに、現代科学技術文明が巨大化高度化大量化を目指した結果、行き過ぎて過度に巨大化高度化大量化してしまった場合、現代科学技術文明には自らこれを修正する仕組みをもたないでそれはできない。また過度に巨大化高度化大量化した

からといって現代科学技術文明が、自ら自分の存在を否定することはしないし、できないことである。

このように、現代科学技術文明には問題が生じてても、これを是正する装置もない。問題は過度な巨大化高度化大量化によって地球がダメにされてしまうことである。すでにかかりのダメージを与えてしまっているのだ。その証拠が地球温暖化など諸々の地球環境問題の出現である。そしてこれらに対する対策を通して現代科学技術文明の行き過ぎた巨大化高度化大量化が部分的に是正されることがある場合があるが、現代科学技術文明そのものの修正は難しい。

くどくど書いてきたが、要は、人間が造る文明なら、造る人間によってなんとでも修正やコントロールができそうだが、それができないということだ。現代科学技術文明はまさに「サイトカインストーム」のような暴走状態にあるのに人間は手を拱ねているだけではなく、自ら暴走に加勢している有様なのだ。その結果が年々歳々猛威を振るいつづける巨大台風、超大雨などの異常気象などなどだ。

なぜこうなったのか。それはアクセルをアクセルと気付かず踏みつづけているからだ。

なぜ、アクセルをアクセルと気付かないのか。現代科学技術文明のアクセルをアクセルと気付かず踏みつづけたのはなぜか。

すべてがあのとんでもない過ちの所為だったのだ。これに関して、まえに一度詳しく触れたが、ここでもう一度繰り返す。かいつまんで述べると、こんなことである。

ハクリが指摘する「とんでもないミス」とは、ひとつは方法

論に関するものだ。もうひとつは事実認識に関するものだった。前者は「西洋近代科学」の方法論についてであり、後者は「自然」に対する認識についてであった。

まず、「自然」把握の方法論の基本は、近代哲学の父デカルト（一五九六〜一六五〇）の主張する「対象を細かく分け、単純化することを思考の道具」として分析しそれを寄せ合わせて総合するものであった。「自然」の把握はこれを基本とするが、「自然」と人間の関係を客体と主体に区分するのだ。いいかえれば、人間は主体で客体である「自然」を支配する関係に立つということだ。

ではハクリが言う「とんでもないミス」の「とんでもない」とは何を指すのか。

まず、方法論についてみれば、ひとつ目は対象を細分化して単純化することだ。二つ目は分析してからこれを「寄せ集め式」に総合して全体像（対象）を把握しようとしている点である。

以上が対象に関わる問題点だが、別の観点からみれば、人間中心の主体客体二分論が三つ目の問題点となる。

つぎに、事実認識に関しては、「自然」をどう理解し、どうとらえるかが問題となる。「自然」（地球環境）はいくつかの要素要因から構成されているが、これらの要素要因を単なる寄せ集めの集合体ではなく、相互に関係し合い組織化されて全体（システム）を形成しているのである。いいかえれば、地球環境はひとつのシステム、すなわち地球環境システムであるということがある。そしてこのシステムはいくつかのサブシステムからなり、これらは階層構造の構造をもち全体を構成しているのである。

「西洋近代科学」はもちろん、「ヨーロッパ近代文明」においても「自然」（地球環境）に対してこのような見かたはなかった。

とくに指摘しておくべき点は、地球環境システムという見かたにおいては、主体客体二分論は取らず、人間や人間行動もシステムの構成要素要因として組織化され、地球環境システム全体を形成していると理解することである。

繰り返して言えば、「とんでもないミス」とは方法論的には対象である物質を把握するにあたって厳密さを追及するあまり細分化単純化して専門化に嵌まり、かえって全体を見失ってしまう結果をまねいてしまったこと、主体客体二分論によって人間中心になつてさらに「自然」認識が片寄ってしまったことだ。

これらの考えに囚われて、地球環境システムという見かたができず、主体としての人間は地球（自然）を人間本位の支配をし、「地球環境システム」を台無しにしてしまったのだ。

根本的な過ちは、自然を「地球環境システム」として捉えられなかったことである。その「地球環境システム」を容器としてそのなかで構築されている現代科学技術文明なのに、現代科学技術文明はその容器すなわち「地球環境システム」の制約条件を完全に無視して我が物顔に勝手気儘に振る舞いつづけていたのだ。いいかえれば、いわゆる主体としての人間が現代科学技術文明を「道具」とし、自然（地球環境システム）を完全支配しようとしていたということである（いや、完全支配していたというべきかもしれない）。

これまで指摘してこなかったが、「科学革命」時代の自然には「有限」「無限」の区別も認識されることはなく、自然には

限りなく広さがあるといった、まさに無意識の認識状態だったようだ。はつきり言えば、当時はむしろ、自然や地球には限りなく広さがある「無限」の空間を暗黙の前提としていたのである。このことが現代科学技術文明にも引き継がれ、この文明は無限を前提にしなければ成り立たないエンドレスの「巨大化高度化大量化」を目指したのである。

もうひとつ強調しておきたいことは、全体的アプローチの必要性である。これとともに、アプローチに対応する行動原理についてである。

「科学革命」に関わった科学者はデカルトのほかにもコペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートンら数多い。だが機械論的自然観に立ち、「自然」をシステムのにとらえようと考えるものはいなかった。それに対象とする「自然」は物質中心で人間を含めて考える「全体的」な把握の仕方や考え方はもちろんなかった。

地球環境を対象とする場合、システムの考えるこの全体的思考法こそ必要不可欠なのであるが、これが「西洋近代科学」と「ヨーロッパ近代文明」に欠けるところであり、限界でもあった。そしてこれらの問題点や限界を抱えたまま、というより、これらを完全に無視して今日の世界文明である現代科学技術文明へと連なっていくのである。

「自然」をシステムのにとらえること、そのためには「全体的アプローチ」が欠かせないこと、このふたつが完全に無視されたまま、現代科学技術文明へ入っていった。

その結果、これらのミスによってもたらされるマイナス効果は巨大化高度化大量化を目指す現代科学技術文明のもとでもさ

らなる拡大再生産をつづけることになった。そして現代科学技術文明の暴走は次第にスピードをあげていまもつづいているのだ。

現代科学技術文明はさらに科学と技術を一層密接に結合し、切っても切れない関係を持つようになっていく。そして昨今では産官学や産軍学の協力体制のもとで技術開発を強力に押し進めるのが常態となってきた。言うまでもなく、その過程でも西洋近代科学が尾を引き、主体客体二分論や機械論的考え方が幅を利かせ、専門分野の細分化もますます進められているのである。

現代科学技術文明の進展とともに、「プラス最大化」行動原理が持て囃され、「無限」を前提として現代科学技術文明の一層の巨大化高度化大量化が進められていく。だが何度も触れたように、目の前に、地球環境の「有限」の壁が立ちはだかつているのだ。

現代科学技術文明の巨大化高度化大量化とともに、「プラス最大化行動原理」のもとで「プラス」も巨大化高度化大量化していったが、その一方で、「プラス最大化行動原理」一点張りのもとでさまざまな問題が深刻化するなど「マイナス」も巨大化高度化大量化していたのだ。これには「プラス最大化行動原理」の「マイナス最小化行動原理」への転換が不可欠であるのである。

「一体、現代科学技術文明は何のために、そしてどこを目指してこんなことをしているのかしら……」

「すべては敵に負けないために、そして敵に勝つためになんだ

よ」

「敵とは誰なの……」

「自分以外はすべて敵だよ。非自己はすべてが敵なんだよ、この世界は……」

「まるで『免疫システム』みたいね」

「そして『サイトカインストーム』が発生したんだ」

「え？ そうなの……」

「本当かウソか分からないが……、せめてそう思いたいところだね……」

「……」

「超巨大化超高度化超大量化してしまった現代科学技術文明システムをその危険を察して自ら自己を破壊し、その元凶である人間をもひとり残さず葬り去ってしまう……」

「そんなことがどうすれば出来るのですか、ひとり残さずなんて……」

「地球上には超巨大な殺傷力のある核兵器が大量を保有してるし、ほかにもさまざまな兵器や爆薬も大量に保管されているではないかね。これらを利用すればなんでもできる。ひとつを発火させればほかのすべてを連鎖して発火させる仕掛けもすでに開発されているんだよ。だがそのスイッチを押すにはどうすればいいか、それがうまく作動するかの実験はまだだった。実験方法が分からなかったんだね。へたに実験をやれば、実験のボタンが実行のボタンとなるおそれがあったんだ……」

「それで実行されたというの……」

「さあ……」

「それで例の『火の玉』が……、そして『暗闇』、それは強烈な

放射能に汚染された黒い煙幕によるものだった。それに地球全体が何週間にもわたって包み込まれていた……」

「……」

ハクリは口を閉ざしたままだった。

「あれは……、現代科学技術文明を対象とした『サイトカインストーム』だったのよね……」

ハクリは口を開こうとしなかった。

第二十二章 地球に何が (十五)

「ハクリ、教えて……、『永遠の命』は放射線にも強い……」
ヨウだ。

「えエ……、突然、なんだね……」

「これから核爆発の直後の地上へ下りるんですよ、地上はまだ強い放射能に汚染されているのでしょ、ぼくたちはまえの調査ですでにかなりの放射線をあびているはずだけど、大丈夫ですか、もともあの時は核爆発から大分経っていたけど……」

ヨウはミサを振り向く。ハクリは笑みを浮かべて二人を見ている。

「ヨウは心配しているが、ミサはどうかな……」

『『永遠の命』だから大丈夫に決まっているわよ。ハクリ、行きましょう、ここから南米大陸が近いからまずそこへ行つて見ませんか……』

「ということだよ、ヨウはどうする……」

三人は一団となって、アマゾンを目指す。「世界の肺」と言われた地球最大の熱帯雨林があるところだ。だが熱帯雨林は消え、一面焼け野原が広がっていた。

「核攻撃がここにもあつたのか……」

ハクリは大声をあげる。

「以前から開発が進んでいたし、熱帯雨林も方々で野焼きされていたそうよ、でもこれはひどいわ、大きな木が一本も残っていないじゃないの、それともすべてが水没したというのかしら

……」

「いや、そんなはずはない。時間的にも『火の玉』事件が終わったばかりだし、熱帯雨林の消失は多分核攻撃か火災かだろう。海面上昇はまだそんなに進んでいないはずだし……」

「核攻撃のとき、この辺一帯も火の海となつたのかしら、そうなら、生存者たちはすでに逃げ出してしまったあどだわね……」

「南東部の山地にも生存者はいないのかな……」

ヨウが呟く。

「それじゃ、一度、南極氷床の状態をチェックしたいと思つたので、生存者を探しながら、アンデス山脈沿いに西海岸を最南端まで南下して、最南端から南極大陸へ渡るとしようか……」

アンデス山脈は南米大陸の西海岸縁を南北に連なる大山脈である。マチュピチュ遺跡はペルーの首都リマの近くだ。アマゾンの西端からペルーに入り、西海岸を最南端までに延びるチリを縦断するのだ。

「ハクリ、現代科学技術文明はいまなぜ暴走をつづけているんですか、誰かが追立てているんですかね……」

「ヨウはどう思うのだね……」

「現代科学技術文明が巨大化高度化大量化を目指しているからですか、だとしたら、十分、巨大化高度化大量化しているのに、なぜさらに追い求めるのですか、まだ足りないというのですか……」

「まあ、そういうことだろうけど、この答えじゃ、ヨウは満足

しないだろうね……」

「わたしも満足できないわ……」

「ミサさんも……」

「仕方がないな、前にも簡単に話しただけど、ふたりともそうなら……、じゃ、取って置きの情報をお話しましょうか……」

ハクリの説明はこうだった。

一言で言えば、現代科学技術文明は「無限」を前提にしているからだという。現代科学技術文明の構造が「無限」を基礎につくられているというのだ。だから、「暴走」はエンドレスにつづくことになるわけである。

なぜこうなっているのか。

これまでも指摘してきたことであるが、現代科学技術文明は西洋近代科学を基に発展したものだ。いいかえれば、現代科学技術文明の前身が西洋近代科学ということである。したがって、現代科学技術文明は西洋近代科学の良いところもまた悪いところもすべて受け継いでいるのだ。もちろん、「無限」を前提にしていることもそうだ。こういうことはすべて西洋近代科学の方法論に由来するのだ。

西洋近代科学では主体客体の二分法を採用し、対象となる客体（自然）に人間（主体）は含まれない。さらに言えば、この構造のもとで、主体は客体を完全に征服し永遠に支配しつづけることが許されているのである。

というわけで、これを継いでいる現代科学技術文明は永遠に巨大化高度化大量化しつづけることが理論的に可能であり、こ

れに基づく「暴走」が永遠（？）に続けられることになるのだ。だが実際は、地球（自然）は有限であり、限界が存在する。その限界を超えらるるもろもろの地球環境問題を発生させることになるのだ。

「分かったかね、少々端折ったところもあるがね……」

「それで『暴走』によってどんなことが問題になっているのですか……」

「ヨウは問題がなければ、少々『暴走』してもいいと思っっているだろ……」

「そんなことはないけど、まあ、凶星かな……」

「一見、問題がないようでも、基本的なところでおおきな問題が生じているんだよ。そのことに気付かないだけなんだ。実際は人類の存続にも関わる問題になっているのだよ。いいかね……」

ハクリは静かに語りだした。

人間がいま生きている世界は「有限」の世界である。この「有限」の世界に「無限」を前提としている現代科学技術文明のもろもろのアウトプット（現代科学技術文明システムそのものも含む）がところかまわずが闖入してくるのだ。それも四六時中だ。いいかえれば、人間の「有限」の世界が現代科学技術文明に支配されつつあるといえようか。いや、それどころか、人間はいまや現代科学技術文明に完全に支配されてしまっているのだ。

これは現代科学技術文明のもとで生活している現代人は毎日

を現代科学技術文明の支配下で過ごしているということである。ということは、現代人の「有限」の世界が現代科学技術文明によつて毎日いいように酷使され、損なわれていることを意味する。端的に言えば、「有限」の世界が「無限」の現代科学技術文明によつて侵食され食い荒らされて劣悪化し、小さくなつて人間ともども押し潰されていくということである。

それはどういふことか。そのついでに、われわれの関わる「有限」についても必要な範囲でもう少し説明を加えておこう。人間が生活している地球は「無限」の存在ではなく、「有限」の存在である。これには条件によつて変化するが一定の限られた容量しかないということだ。これが容量の「限界」ある。「有限」とは容量に「限界」があることであつて、反対に、「無限」にはこのような限られた範囲、すなわち「限界」がないのである。

「無限」の場と違い、「有限」の場における動作や行動などやこれらによつて生じるアウトプットはこの「限界」によつてさまざまな影響を受ける。たとえば、それまで「プラス」だったものが「マイナス」へ転化したり、プラス効果が減じたり失われたりするのである。この違いが重要な点であるが、無視されるか、気付かれないことが多い。

地球の限界を超える人間活動によつて生じる現象が、温暖化などもろもろの地球環境問題である。南極大陸の氷床融解などによる海面上昇もそのひとつだ。

最近では超大雨、長期の日照り、超熱風、巨大暴風雨といった超大型化した異常気象が頻発し、農作物不作の連続に世界の食糧需給が逼迫し出す。

各国の都市部に飢餓難民が集まり、食料を求める大群となつて国境を越えて動き出す。国境警備隊は火器を使用し越境を阻止しようとするが、大群は銃口にも怯まず、死体を踏み越えて進んで行く。

こんなことが毎年のように繰り返され、世界のいたるところで国境紛争が絶えることはなかった。

極端な異常気象続きも影響したが、食糧危機の背景には一〇〇億人を越えた世界規模の人口圧力もあり、世界の慢性的な食糧不足は常態化していたのだ。

現代科学技術文明において一番問題なことはその暴走化である。巨大化高度化大量化を目指す現代科学技術文明のもとに、すべてが狂いだしているのだ。

これに対して、世界中で問題解決のためのさまざまな行動が採られているが、効果はなかった。まえにも触れたように、現代科学技術文明はエンドレスに暴走をつづけるように仕組まれているからである。

「有限」の世界における「無限」の暴走。これがこのままつづければどうなるか。

現代科学技術文明の展開する場は「有限」な地球である。そこでエンドレスに暴走をつづけるということはどうか。いいかえれば、現代科学技術文明が「有限」な地球で「無限」の展開をつづければどうなるのかということである。それは言わずと知れた破滅への直行便だ。

限られた地球で現代科学技術文明が「無限」の展開をつづければ、いうまでもなく「有限」な地球の壁と衝突し、そのアウトプットで地球はやがてパンクしてしまうのだ。そしてそれも

人間（人類）もろともにである。その兆候はすでに今日の地球環境問題に見られることだ。

それにも拘わらず、現代科学技術文明はいまもって巨大化高度化大量化を目指している。それも猛スピードで走っているのだ。これでは有限の地球との衝突も時間の問題であり、現代科学技術文明の崩壊も人類の滅亡も間近に迫っていると云ってよい。

○ 巨大化高度化大量化を目指す現代科学技術文明は世界の10億の人口を何度も殺せる量の核爆弾を用意しているし、これらを臨戦態勢に置いているのだ。これは巨大化のほんの一例に過ぎない。だがこれは人類を絶滅させ、現代科学技術文明を壊滅するには十分過ぎる量なのだ。

現代科学技術文明は世界文明でありグローバル文明である。このように、現代科学技術文明の守備範囲は広い。ということとは、この文明を支える科学技術も自ずから巨大なものとならざるを得ないのである。

都市も巨大都市化し、人口は増え稠密化の傾向を辿る。交通通信システムも大規模化、国際化し、大量輸送システムへと進むだろう。それを支える技術はこれまた巨大化高度化大量化していくほかない。

このように、現代科学技術文明はすでに守備範囲を超えて巨大化高度化大量化しているが、そのスピードは衰えるどころかますますスピードアップしている有様だ。そのうえ、これらの巨大化高度化大量化が互いに密接不可分に関係し合っているというよりも三者が融合し、さらにスピードを上げて進んでいるのだ。

「西洋近代文明から無限指向の近代科学を引き継いだ現代科学技術文明が『有限』の地球を活動の場としているんだから、遅かれ早かれ行き詰まり、人類は現代科学技術文明ともども地球上から姿を消すことになるだろうな、そのとき、ヨウはどうする……」

「ハクリ、そうじゃないでしょ、『火の玉』事件後、両方ともすでに姿を消しているんじゃないの……」

「あ、そうか、そうだね、そう言ってもいいな……」

同じことを繰り返すと、ハクリは目を閉じてしまった。そして長い間そのまま目も閉ざしていた。

「ハクリ、『火の玉』事件は誰が仕出かしたの、知っているんしょ……」

「……」

ハクリは目を開けることはなかった。

「あれは現代科学技術文明の自作自演だったのね……」

「ミサさん、ホント……、だったら、あれは現代科学技術文明の『サイトカインストーム』だったということになるんですか……」

「分からないわ、でもがむしやらに巨大化高度化大量化を目指して暴走を続けているんだとしたら、自らそれを放棄するようなことをするかしら、疑問ね、ハクリが言うように、現代科学技術文明には『サイトカインストーム』のような仕組みは仕込まれていないとみるほうが正しいかもしれない……、でも仕込まれている可能性も残っているような気がするのよね」

「それはない。地球の『有限』性を考えようとしてもしない現代科学技術文明には自ら自損行為をする仕組みを自ら仕込むような

ことはまずしないし、できないのだ」
ハクリだった。

「やはりそうね、ハクリ。『サイトカインストーム』のような仕組みが必要なのは、『必然』の世界ではなく、『偶然』の世界です。現代科学技術文明のケースでは地球の有限性を認識しないのですからね」

「そうだと思うよ」

『必然』『偶然』て……」

「ヨウちゃん、それは……」

ミサによると、こうだった。

それはモノとモノのやり取りの間の関係で、必然的か偶然かの違いを指す。いいかえれば、モノのやり取りに因果関係があつて、一対一の対応の場合であれば「必然」であり、対応関係が因果的ではなく確率論的な関係の場合、「偶然」の関係である。これが「必然」「偶然」の内容である。因果関係で対応している場合は、対応者同士が一線で結ばれている関係で、これに対して確率関係は必ずしもそうではない。比喩的にいえば、確率関係は誰かに会うことはあつても誰に会うか会ってみないと分からない関係といえようか。いいかえると、前者「必然」のケースは「ニュートン力学」の世界であり、後者「偶然」のケースは「量子力学」の世界にそれぞれに対応するといえようか。

「素晴らしいよ、ミサ」

「ありがとう、でも、わたし、誤解していたようね、やはり『サイトカインストーム』をむりやり現代科学技術文明の問題

にも当て嵌めようとしたのが間違いだったのね、でも、あのよ
うな仕組みが現代科学技術文明にもあつたらいいなといまでも
思うわ……」

「そうだよ、何ごとにも自ら自省するシステムが仕込まれて
いると問題が複雑化しないで済むんだがね。ところで、現代科
学技術文明についてだが、もう少し説明しておいたほうが……」

ハクリが現代科学技術文明について加えようとしたことはこ
うだった。

現代科学技術文明というと、科学技術あるいは現代科学技術
だけが強調される嫌いがあるが、単に現代科学技術文明といつ
ても科学技術もしくは現代科学技術が中心となる文明を指すの
ではない。現代科学技術文明とは「科学技術」または「現代科
学技術」という名称のついた文明ということであつて、科学技
術や現代科学技術だけを中心とした文明だという意味では決し
てない。「現代科学技術文明」とは現代科学技術文明システム
という包括した内容をもつシステムとしての文明を指すのであ
る。これには科学技術のほか、政治、経済、社会などさまざまな
分野をも含む総合的なものであるということである。

これから述べることは現代科学技術文明の暴走に関すること
であるが、文明全体を構成する内容に関わることもある。現
代科学技術文明には科学技術そのもののほかに科学技術を取り
まく周囲にもこれを暴走に駆り立てる要因があるからである。

これまで現代科学技術文明の暴走について縷々述べてきたよ
うに、現代科学技術そのものにも暴走要因が内蔵されていると
いつても過言ではない。だがそればかりではないのだ。もしか

したら、それよりも強い暴走要因というべきものがあるかもしれない。いいかえれば、科学技術自体には構造的にみても暴走しがちなところがあるにはあるが、そのまわりには外側からそれをさらに激化するものがあるというのだ。

それはこういうことだ。

現代科学技術文明は科学技術そのものだけではなく、それを取り巻くさまざまな要因要素また構造などで文明システムが構成されている。これを総称して、「現代世界文明」と呼んだり、とくに、特色的な「科学技術」もしくはさらに絞って「現代科学技術」にアクセントを置いて「現代科学技術文明」と呼んでいるのである。というわけで、念のために付け加えれば、単に、「現代科学技術文明」と名指して巨大化高度化大量化や暴走を促すものが仕組まれているといっても、その科学技術だけを指すのではなく、同様に、現代科学技術文明全容をも含めてこう言っているのである。

現代科学技術文明はもちろん、前身の西洋近代科学文明においても、文明の一部を構成している資本主義経済システムは当時の科学を積極的に取り入れ、文明の巨大化高度化大量化を図ってきた。さらに、科学と技術の結合を通し科学技術の一層の巨大化高度化大量化を押し進めているのだ。

そして現代科学技術文明を迎えると、新自由主義型資本主義経済システムのもと、科学技術のさらなる巨大化高度化大量化を求めて「暴走」的スピード展開を進めていったのである。資本主義経済システムは市場原理のもと自由なる競争を前提として経済成長を目指すが、そこでは経済効率を最優先して新自由主義的自由競争が行なわれることになった。ここにおいても最

新の科学技術を最大限に活用することはいうまでもない。

だがその結果は、超弱肉強食、超格差拡大の極度経済社会の出現であった。これとともに、世界には大量の貧困層、大量の失業者、大量の飢餓難民が溢れ、世界の都市は貧民窟と化し、暴力が蔓延り、戦争、紛争、喧嘩や殺し合いは後を絶たず、人びとは社会不安に戦慄くほかなかったのだ。

一方、富裕層はそれぞれのクラスでコミュニケーションをつくり別世界を築んでいた。だが分断した世界は不安定そのものだった。国際社会は荒れ果て、富裕層集団対貧困層大群、富裕国対貧困国の小競り合いや紛争が方々で絶え間なく同時多発的に発生している状態だった。

「こうしてあの事件が勃発したんだよ。ヨウくん、納得したかね。わたしが現代科学技術文明の暴走にこだわったわけはこうだったんだよ。いいかね……」

ハクリはまた黙り込んだ。そして天空を仰ぐ。ミサもヨウもハクリの視線を追い、天空に隠されているものがなにか探し回

る。
「ハクリ、あんなことを誰が目論んだの、そして何のために……」

「それは……」

「それは誰ですか、そして何のために……」

ミサは急込む。

「誰が目論んだのか、その理由についても大方推測している通りだと思う。そのことは後にして、そのまえに、きみたちに話しておきたいことがあるんだ。きみたちふたりが生き延びてい

ることを知れば、連中はきみたちを抹殺しようとするにちがいない。だからね、いいね……」

「よく覚えておくように」と言うものの、ハクリの話の内容はそれとは直接関係するものではなかった。ハクリがつづけたことは以下のことだった。

これまで縷々述べてきたが、端的に言って、現代科学技術文明は地球と相容れないものだ。このまま進めば、両者は共倒れになるほかない。

無限指向の現代科学技術文明が有限の地球で気俣に暴れ回れば、地球の有限の壁を突き破り、地球そのものを破壊しかねないだろう。これに対して、地球の有限の壁を温存して地球を安泰に維持したければ、現代科学技術文明の巨大化高度化大量化活動を止めるか、解体するほかないのである。

要するに、有限の地球で現代科学技術文明が無限に活動することは、ゴム風船をむりやり膨らませているようなものである。地球はいまさまざまな地球環境問題の頻発状態にあり、まるで破裂寸前の風船のようなのだ。

このような状態にある地球を救うにはどうすればいいか。それは元凶である現代科学技術文明をいまずぐぶつ潰せばいいのだ。その元凶を作り上げ利用してきた人間ともどもぶつ飛ばしてしまおうか。ことに近代科学を信奉し、現代科学技術文明の巨大化高度化大量化を意識して積極的に押し進めてきた科学者や技術者等の「現代科学技術のプロたち」の責任についても十分考慮され、しかるべき対応を図るべきであろう。

現代科学技術文明がこのまま巨大化高度化大量化を続ければ、

確実に地球環境システムは大攪乱の果てに崩壊への一途を辿ることになるのだ。

こんな状況だから、再び、新たに人間社会を構築しようと思えば、いますぐ、現代科学技術文明とは完全に決別することだ。そして、現代科学技術文明を復活するようなマネは決してやってはいけない。こう言っただけでいいから、現代科学技術文明はその誕生以前からかなり問題を抱えていたからだ。

現代科学技術文明の最新の動向について科学技術の個々に触れたいが、すべてをみても切りがないので、以下、二、三の例について特に気になる点を指摘しておこう。

「そのまえに、ミサ、なにか疑問や質問があれば……」

ハクリが突然話をやめ、ふたりに目を向けた。ミサがヨウに小声で話しかけているのに気付いたらしい。

「あのね、ハクリ……、さつき、『連中がわたしたちを抹殺しようとするだろう』と言っておられましたよね、あれはどういうことですか……」

「ああ、それは……」

「口が滑っただけですか、それとも本当のことですか、もしほんとうのことでしたら、このほうを先にお話いただけませんか、現代科学技術文明の個々の問題は後回しにして……」

ハクリは口を閉ざしたまま、しばらくミサの目をじつと見ていた。その目は鋭く、彼女の目を通り越し、脳髓の奥まで達しているようだった。その視線はすぐヨウに転じていった。

「あの連中は、実は……」

最近、あるグループが「あるべき地球のあり方」を議論し、

そのための実行プランが作成されたのである。地球歴で二一世紀後半のことだった。

そのなかで、現代科学技術文明と地球の将来について触れた箇所があつたが、結論は極めて悲観的なものだった。これを回避するための種々の対策についても議論され、推奨できる対策案が列記されていたのである。そのひとつがこのたびの「地球火の玉」事件に極めて類似していたのだ。

そこで調査したところ、そのグループが「連中」と繋がっていることが判明したという。

ここまで話すと、ハクリは急に口を閉ざす。そして二度と口を開くことはなかった。

第二十三章 地球に何が (十六)

三人はアンデス山脈上空を南米大陸の西海岸沿いに南下して南極へ向かう。

南極大陸はチリの最南端からドレーク海峡を挟んで約一〇〇〇キロのところにある。チリの最南端に向かって大陸から南極半島が延びており、その周辺海域は年間氷結していることが多い。そのせいか、眼前に広がる南極は巨大な氷のかたまりというより、広大な氷原や氷に覆われた山地が連なっているようだった。だが、真っ白いはずの氷がかなり汚れているのだ。

「ここが南極大陸……」

期待に反していたのか、大きな声だった。ハクリが所望した南極だったのに、薄汚れており、さっぱり美しくもなかったのだ。

『火の玉』事件のせいですか……」

ヨウだ。

「そうかもね、それでこれが融けると、海面はどの位上昇するのか……」

「平均で約六五メートルといわれているようですが……、場所よつては一〇〇メートルを超えるところもあるでしょう」

こういうことはヨウが詳しいのだ。

「氷河などほかのところにも氷があるでしょう、それを加えれば、もつと上昇するのでは……」

「でも、南極大陸には地球上の氷の約九〇パーセントがあるそうですね……」

「九〇パーセントも占めるの、それじゃ、地球の海面上昇は南極の氷の融け具合によるということかね……」

南極大陸は南極横断山脈で東南極と西南極に分かれるが、全体が分厚い氷に覆われている。大陸を覆うような巨大な氷のかたまりを「氷床」というが、これも東南極と西南極の別と同様に東南極氷床と西南極氷床という。

南極氷床の厚さは平均二四五〇メートル、標高は平均二三〇〇メートルだが、東南極氷床と西南極氷床とは厚さも標高も異なる。前者は厚さも標高も平均二六五〇メートルだが、後者は厚さは平均一八〇〇メートル、標高は一三〇〇メートルである。これは氷床の底が海面下にあるからだ。氷床の底（基盤）が海中であると、氷床と基盤の間に海水が入りやすく、もろに海面上昇の影響も受け、氷床が不安定で崩壊しやすくなるという。

南極の西南極氷床では「ロス海が二万年前から一三〇〇キロメートルも内陸へ後退し」ており、「過去八〇〇〇年間と同じ速度で融ければ、西南極氷床はあと七〇〇〇年程で完全に融けてしまう」と推定されている。これは海面上昇の影響によるものらしく、その影響を受けない東南極氷床ではその可能性はないだろう。

「きみたちが調査した時にはすでに海面が上昇しており、すでに沿岸周辺は水没していたのでしたね……」

ハクリは念を押すように尋ねる。

「ええ、そうですね、でも『火の玉』から八〇〇〇年も経っているとは思えないですが……」

「じゃ、ここで時間を速めて未来へ向かって行ってみようか……」

「もう少し、未来へのスピードを早めるぞ……」
ハクリが未来への時間を早めていった。

ハクリは「ふたりとも用意はいいかね」と確かめると、時間を進めていく。

時間は未来へ向かって急速に進み出した。

目の前の西南極氷床が様子を変えていく。南極半島の周辺海域には海水が凍結して棚氷となり、氷床に繋がっているところが多い。棚氷とは氷が棚のように海面の上に張り出しているところだ。

南極半島の東側に広がるラルセン棚氷もそのひとつである。棚氷が先端から崩壊すると、巨大な氷塊は冰山となって分離していく。

「棚氷が氷床からきりはなされ、冰山となって海水に戻るのは、氷床の一般的ないとなみだ」という。だがその規模が大きくなって、大陸氷床までに影響がおよぶと地球全体の海面上昇へ繋がっていくことだろう。

温暖化がつづくと、ひっきりなしに棚氷の崩壊がつづき、山となって分離していく。大陸氷床もこんなことを繰り返して、やがて全体が崩壊し融解していくのだ。

『火の玉』の痕跡が水中へ没するのに八〇〇〇年もかかるというのかね。でもこんなことに時間をとられては……」

「つい最近、南極で二〇度を超えた日があったそうですよ……」

「ホントかね……」

「……」

第二十四章 地球に何が(十七)

ハクリはいつの間にか得体のしれない不安に取り憑かれているような感じに囚われていた。未来への時間を懸命に追っついていくが未来の端さえ捉えることができないのだ。

「ヨウ、なにかが起きているようだ。一体、なんだろうか……」
「なんにも感じないよね、ミサさん……」

「どうしたの、ハクリ……」

ハクリが急に、あの「火の玉」事件は全面戦争による核爆発ではなかったのではないかという。そして地球に別のとんでもない事象が起きているらしいといいだしたのだ。

「でもいま時間を未来へ進めて見ているんでしょ……」

ミサは怪訝な顔をハクリに向ける。

「うん、でもここは南極なんだよ。ここで時間を進めても南極大陸氷床の未来を見ているだけ……」

「ということは……」

「そう、見ている南極はあの『火の玉』とは関連なしの未来の南極だということ……」

「ふーむ、事件発生の場所でないで時間を戻しても事件と関係する時系列変化を確かめることができないということですか……」

「……」

ミサはまだ怪訝な顔だ。

「そうであるのだよ……」

ハクリは口を開けて笑った。

「それで『とんでもない事象』というのは……」
「調査のときにきみたたちが見た現場の様子は……どうだったの……」

「都市の跡形や残骸は全然見当たらず、すべてが水没しているような状態だったわ、辺り一面が水で覆われ、湖のようなところも多かったですね……」

「もしかしたら、その水は南極大陸氷床の融解によって生じた海面上昇によるものではなかったかもしれないんだよ……」
「でも、見て回った都市はみな水没していたよね……」

ヨウが口を挟む。
「都市水没と『とんでもない事象』が関係しているのかしら……」

「『とんでもない事象』と言ったけど、地球にとつてはあたりまえの事象のひとつに過ぎないものだ。時間を追っていけばあらわれるものだ。さあ、どこでやろうか。ヨウはどこがいい……」

「近いところいいよ」

「じゃ、サンティアゴなら大都市だし……」

サンティアゴはチリの首都だ。三人は一団になってまえに翔んだルートを引き返す。

「ここはダメだよ……」

「え？……」

「標高が高そうだよ、水没するには……」
「隣国のアルゼンチンの首都はどう……」

「ブエノス・アイレスね、ラ・プラタ川の河口にある綺麗な都市よ……」
アンデス山脈を越えて東海岸へ翔ぶ。ハクリが時間を調節し

たらしく、大都市ブエノス・アイレスが現われた。

「この前来たときは水没していたよね……」

ヨウがミサに話しかける。

「そうだったわね、ハクリが時間を戻したのよ、きつと……」

「ブエノス・アイレス」とは「よい空気」ということらしいが、空気だけでなく、街全体がそんな風だった。ここは南米の陸海空にわたる交通の要所であり、中心となる大集合地点でもあった。

街の中心部に大きな広場があった。周囲には建物が建ち並び、緑も多いところだ。

三人はベンチに腰を下ろし、広場を行き交うさまざまな格好をした人びとを見とれていた。こんなことはもう何年も経験することはなかったのだ。

「ここでもう一度『火の玉』事件から振り返ることにしようかね……」

ハクリが突然言い出す。

ハクリには「火の玉」事件や水没が一連の出来事というより、なぜかバラバラで別々な出来事のようにしか見えず、二つを一連のものとして一緒に扱うことのできなかつたのだ。南極氷床融解による海面上昇のことを気にし過ぎていたか、それともミサの核全面戦争説やヨウの「火の玉」ストーリーに振り回されていたのか。とにかくこれらを別々に扱っても一緒にできると思い込んでいたのだ。

「ハクリ、どうして現代科学技術文明をリセットしたり、地球人をひとり残さず殺さなければならぬのですか」

ヨウだ。ヨウが突然言い出したのだ。

「……」

ハクリは「なんだって……」と大声で叫びそうな顔をした。ミサだって、それとあまり変わらない表情だった。

「ヨウ、ヨウは……」

「……」

「ヨウちゃん、ハクリもわたしもそんなことは一度も断定していない。そのような仮説を立ててその可能性を検討しているところなのよ。もつと正確に言えば、例の『火の玉』事件を解明しようとしているところなのよ」

「分かっているよ。でもなぜそれが核全面戦争になるの」

「それはヨウちゃんが地球が『火の玉』となったといったこと、そしてそのあとに『暗闇』が襲ってきたと言ったでしょう。このふたつの証言から、このような現象を起こすのは核全面戦争による地球規模の核爆発によるものにちがいないと思つたわけ。それでその証拠探しをしているところなのよ、いまはね、ハクリ……」

「まあ、そういうことかな。仮説検証型の証明の作業過程で往々にして誤解が生じることがある。検証に都合の良いデータしか目がいけないといったおそれもあるのだ。ヨウが誤解するのも無理がない。仮説を立てるのも検証を効率よく行なうためのひとつの方法なんだよ。でも、ヨウに別の考えがあれば、話してごらん。どんなことでもいいのだよ。さあ……」

「ぼくの『火の玉』と『暗闇』からこんなことになって申し訳

ないけど、もっと簡単にできなかったのかと思うんだ。一寸乱暴だと思うけど、なにも現代科学技術文明をリセットしなくてもいずれ地球と共倒れになるのなら、それでもいいと思うけどなあ。どうせ人間も共犯なら地球ともども滅びの道を歩んでいくのも自業自得というものでしょう。こうすれば人間を皆殺しにする手間も省けるでしょうしね。ただほっとけばいいのだからね。これは半分冗談ですが、こんな議論をやっているより、事実を見たほうが早いですよね、ハクリ……」

「うん……」

「さあ、ハクリ、ここの空間に時間を合わせて、未来へ旅立ちましょうか、いいですか……」

「ヨウ、いいよ……」

「ハイ、スタート……」

第二十五章 地球に何が（十八）

「まず、『火の玉』の発生、それから『暗闇』の来襲、そしてしばらくして（かなりあとになってからか）水没がはじまる……」

ハクリはさらにつぎのようなチェックポイントをあげていく。

まず、「火の玉」については、発生時の外的条件（日時、気象、明るさなど）、「火の玉」（形態、色、発光発色物体の形状、時間経過における変化、表面温度など）、放出物放射物の有無、その他だ。とにかく、「火の玉」の状態、形態、発光時間・程度などを注意深く観察することだ。

つぎは「暗闇」だが、時系列にしたがって来襲してきた様子（速度、発生時刻、継続時間、程度、濃淡、発光の有無、来襲時形態、性状、ガスか粒子状浮遊物か、毒性の有無、消滅形態など）だ。

三番目は水没に関するものであるが、そのまえに「火の玉」の対象、ここでは都市ということになるが、「火の玉」攻撃（？）をうけた結果、どのようなになったか、たとえば、個別対象ごとに被害程度、被害範囲など全般的な被害状況だ。水没の対象であることを念頭に必要な項目をチェックすることだ。

要は、原因解明に必要な範囲のものをチェックすればいいのだ。

「じゃ、はじめるよ、いいね……」

「オーケー、ハクリ」

ヨウはじつとブエノス・アイレスの中心部にある広場のベン

チで時間が未来の階段を上りはじめるのを待った。

「ブエノス・アイレス」は南極から二〇〇〇キロメートルの距離のある南米大陸東海岸にある。大西洋に流れ込むラ・プラタ川の河口に位置する。ラ・プラタ川が注ぎ込む湾の東側の対岸にはウルグアイの首都モンテビデオがある。その間の距離約二〇〇キロメートル。敵がその中間上空で最新のメガトン級の核爆弾を一発爆発させれば、効率良く、二つの都市とも壊滅してしまうであろう

「ハクリ、ベンチで敵の来襲を待ち構えていいの、一緒にやられてしまうじゃないの……」

「大丈夫だと思うけど、心配ならここから少し離れることにしようか……」

「その方がいいと思うけど、ハクリは核攻撃だとは思っていないだね、どうして核じゃないと思うのですか……」

「それはね……」

ハクリは地球上に各国が保有する核爆弾のすべてを同時に爆発させたとしても、地球が「火の玉」になることはないし、そんなことはできないと考えていた。だから、平気でベンチに腰を下ろしていたのだ。

かといつて、ミサの核全面戦争説を頭から否定することはできなかつた。万が一にもその可能性があるとは思えないが、一〇〇パーセント否定することができなかつたのだ。

「ミサさん、ベンチで待ってみる、それとも他所移りますか、どうしますか……」

ヨウは念には念を入れて尋ねる。ミサは返事をしない。

「ここにいたら、核攻撃に会うかも……、それでもいいのですか……」

「ハクリはどうするのかしら……」

「ミサさんが残るなら、ハクリもここにいろよ、きつと……」

「ヨウちゃんは意地悪ね、さあ、どこへでも行くわ、ハクリ、行きましよう……」

第二十六章 地球に何が（十九）

「ハクリ、話してください。知っていることのすべてを……」

ハクリはじつとヨウの目を見た。その視線はかつて見せたことのない鋭いものだった。

ヨウはじつと耐えた。次第に目の奥が熱を帯び、熔けていくような感じがする。ヨウは心のなかで、もう一度同じことを繰り返す。

「ハクリ、知っていることのすべてを話してください」

ハクリはヨウへの視線を天空へ転じた。ヨウは待った。ハクリが視線を戻すのを待った。

『地球を現代科学技術文明と人類ともども火葬に付し、地球人文明の垢や汚れをきれいに洗い落とすために、しばらく水中に放置する』ことにしたのだ」

その声はハクリのいつものものではなかったが、言っていることは前と同じではないか。ヨウがそのことに気付いたときには、すでにハクリの視線は天空へ戻っていた。

ヨウはハクリを見た。どこか様子がおかしい。

「ハクリ、変だよ。何を隠しているの、なぜ、本当のことを言えないの……」

「せつくな、そんなに……」

「誰が『地球を火葬に付す』というのですか……」

「もうすぐ始まる。これを見ればすべてが明らかになるだろう。だが『火の玉』のことが一方的にあまりにも強調されているき

らいがあるので、誤解を避ける意味で、多少事前の解説をころみでおこうかね……」

ハクリの解説。

現代科学技術文明が巨大化高度化大量化を目指して暴走しており、いまや地球の有限の壁に激突する寸前にある。その証拠が近年ますます危機的状況にある地球環境問題だった。それはさまざまな環境悪化現象の発生であり、人間環境システムの劣悪化である。

そのなかでも地球温暖化が極度に進み、地球環境システムを危機的状況に陥れて大攪乱を招いているのだ。巨大化し頻発する異常気象、継続する大雨（大量降雨現象、日照不足、大洪水）、山崩れ（多発する深層崩壊現象）、高温現象（広範囲に継続する熱風）、干ばつ（日照不足、水不足）などなどの多発、これらによって生じる農業への影響、農地崩壊、食糧不足、生活環境悪化崩壊、もろもろの健康被害などなどだ。

これらの個々の現象もさることながら、これらは一段上位のシステム、たとえば、大気システム、水システム、土壌システム（あるいは大気圏、水圏、地圏）といった自然システムの攪乱によってもたらされているのである。

そして地球にこのような攪乱をもたらしている元凶がほかならぬ現代科学技術文明であり、今日ますます激化させているのがその巨大化高度化大量化傾向であり、暴走傾向なのである。

攪乱の原因となっているものは、具体的には、人間活動（日常生活、社会活動、産業活動など）にともない大気圏、水圏、地圏、生物生態圏、人間圏へ排出、放出、放置、廃棄されるも

ろもろの物質（固体、液体、気体）、エネルギー（排気、熱水、振動）、情報（デマ、ビラやSNSなどの媒体の乱用頒布など）などであり、これらの原因となるものが現代科学技術文明のもので量質とも巨大化高度化大量化しており、幾何級数的に増加増大してきているのである。

最近の例では、容器や洗濯ばさみなどの日常生活用品に大量に使用されているプラスチック類である。温度、紫外線などで（海では波や塩分が加わる）劣化が進み、砕けて大きさが五ミリ以下になったプラスチックゴミ（マイクロプラスチック）が最終的に海洋に広がり、海洋を汚染しているのだ。プラスチック類は自然で容易に分解されることはないので、年々汚染度は高まり、世界的にマイクロプラスチック汚染は悪化の傾向を辿っているのである。粒が小さくなったマイクロプラスチックには有害な化学物質を吸着しやすいのだ。そして有害化学物質塗れになったマイクロプラスチックをさまざまな食用魚が体内に取り込んでいるという。これとは別に、物質極微細化のナノテクノロジーも進み、プラスチックなどの化学物質もナノレベルに微細化され化粧品など多くの製品にも直接添加されているケースも多くみられるが、これらも使用後には最終的には海へ流れ込み、海洋汚染の原因になっており、マイクロプラスチック汚染を倍加しているのだ。

プラスチック類は現代科学技術文明の産物である。日常生活に欠かせないほど多様に使用され、さまざまなものの原料として使用されている。それがいろいろな製品となって世界各地で販売され、多くの人びとが日常的に使用しているのだ。

新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行で大量のマスクが使用さ

れたが、これもプラスチックを原料にしている布（不織布）が利用されているものが多いのだ。そして毎日何億枚ものマスクが使用され、毎日何億枚もの使用済みマスクが廃棄されているのである。それが海に流れ、マイクロプラスチックとなつていく。

現代科学技術文明は安価で丈夫で長持ちするものを造り出し大量に売りさばく。人びとはその恩恵を受ける一方、自然からの仕返しも受けているのだ。

以上はほんの一例に過ぎない。

その結果は大き過ぎる結果をもたらし、現代科学技術文明が地球の有限の壁に激突し大攪乱を起こすこととなるだろう。

その結果、地球システムはどうなるか。

システムとはひとつの全体として存在するのだ。地球システムも同様である。

ひとつの全体として存在するシステムは有限性の支配する範囲、いいかえれば、有限の壁のなかにしか存在することができないということである。

この有限の壁は「鉄壁」のようなカチカチの堅固なものではない。たとえば、地球の重力圏の境界も有限の壁となる。いいかえれば、ひとつの全体として存在する地球システムはその有限性が支配する範囲内、すなわち有限の壁に囲まれているところにしか存在しえないということである。

逆に言えば、有限の壁の外ではシステムは存在できないのだ。なぜなら、有限性の支配しないところでは「ひとつの全体」を形成することができないからである。

ということはシステムとして存在できず、崩壊することにな

るのだ。

「ヨウ、このことがシステムを考えるときの最重要点だ。この点から見れば、地球システムはいま現代科学技術文明の暴走によって存否の瀬戸際にある。そしてこの時に、『火の玉』事件が起きたのだ」

第二十七章 地球に何が(二十)

「ハクリ、いままで話してきたことはホントのこと……」

「そんなこと決まっているよ。これまでウソを言ったことがあるかい……」

「まあいいよ、なかなか始まらないけど、いつになったら始まるの……」

ヨウは「火の玉」事件の場面がなかなか出現しないのに苛立ちを覚え、催促する。

「いつでも……、でも、ミサが起きてからのほうがいいかと思うけど……」

ミサはいつの間にかベンチでうたた寝しているのだ。「でもここから地球全体は見えないよ……」

そんなことは分かっていると大声で言いたかったが、ハクリはじつと堪えていた。ヨウが何かを感じている。このほうが重大事だった。

ハクリにはすべてが分かっていたのだ。このことをひたすら隠していたことをヨウに感付かれ、それでも何も知らないと言いつ張っていたのだ。だが、さらに知らぬふりをつづけ、うわべをつくろうとしたりすることには疲れたし、もう億劫だった。

今更、地球が「火の玉」となったことを確認したところで地球システムの崩壊を食い止めることはできないし、まして攪乱し出した地球システムを元の状態に戻すことも不可能なのだ。だとしたら、ヨウのことを気にしたところでどうにもならないではないか。もはやこんなこと試してみてもなにもはじまらない

いのだ。

ハクリはもう一歩も動きたくなかったし、これ以上何もしたくなかった。

「どうしたの、ハクリ……」

ハクリは急に眠気に襲われ、ベンチでいつの間にかまどろみ出していた。

「ヨウか、一寸、横にならせてくれ……」

『火の玉』が来たらどうするの、ね、ハクリ……」

ハクリは目を開こうと腕いたが、瞼は瞬間接着剤で接着されてしまったのか、固く閉じたままびくともしなかつた。

時間を超えて瞬間移動できるといつても、実体験を何度も繰り返せるわけではない。すべてがバーチャルなのだ。彼は目まぐるしく変化する映像のなかの自分を想像し、いろいろなシーンを見ながら、こんなことを考えているうちに、ハクリは深い眠りにおちていった。

「ハクリ、ミサイルが発射されたそうだ」

「あ……、そう……」

ハクリはまだ眠りのなかだ。そんなことはないと言いつたたび眠りに落ちていった。

「本当に核戦争が……、ねえ、ハクリ、先に上空へ行くからね、早く来てね」

「うーむ……」

「五〇〇〇メートル位のところにいるから。ミサも一緒……」

「ミサさん、早く……」

「どうしたの……」

「やはり、戦争が……」

「ホント？」

「らしいですよ……」

「それで……」

「上空へ避難する……」

「ハクリは……」

「われわれが先に行つて、ハクリは後で来る」

ふたりは上空を目指して上昇していく。時折、空気を切る音がする。

「ミサイルかしら……」

ミサは辺りを見回す。そんなミサを見て、ヨウはやはり核戦争だったのかと思つた。でも、ハクリはそれを否定していたのだ。なぜだ。

「ミサさんは本当に核全面戦争が勃発すると思つていたのですか。世界の都市が核攻撃ですべて破壊されると考えていたのですか」

「ヨウちゃん、どうしたの、突然、何を言い出すかと思つたら……」

「本当に……」

「そうよ、世界の都市をすべて破壊するなら、核を使用するほかないじゃないの……」

「そうかな……」

「一体、なにが気になるの……」

ミサが怒り出した。

「実はね、ハクリが核戦争じゃないと言つていたんだよ……」

「だから……、なんなの……」

「ゴメンナサイ……、あの……」

こうなつたら、謝るほかないのだ。だが今日のヨウは一言多かつた。

「なんなの……、どうかしたの、ハクリが……」

「ボクがどうかした？」

後からきたハクリだった。ようやく追いついたらしい。

「あ、ハクリ、あなたはどうして核戦争じゃないと思つたの、いま核戦争が……」

「そうね、始まつたようだね、でもそんな筈じゃなかつたんだが……、作戦を変更したのかな……」

「何ですつて……、ハクリは『火の玉』事件に関わつていたのですか」

「関わつていたわけではないが、薄々感付いていた……」

「なにを感付いていたというのですか」

「地球人に対してなにかを仕掛けるらしいなあという感じね、でも核攻撃を仕掛けるようなことは想像できなかつたが……」

「仕掛けるつていうけど、一体誰が……」

「ある筋が地球のエージェントを通して実行したんだろうな……、でも核攻撃とは手荒いことを仕出かしたもんだと思うよ……」

「どうしてこんなことを……、地球人に対して恨みでもあるのですか……」

「さあ、それはわたしには分からない、でも最近地球人による宇宙侵害が多いよね、太陽系での探査活動が盛んに行われてい

るが、これも地球が住みにくくなってきたことと関係があるのではないかと思われているところがあるようだよ、わたしにはよく分からないけどね……」

ハクリはなぜか言葉をにぎす。

ハクリによるとこうだ。

地球人は最近活動の軸足を地球から宇宙に移しているように見える。そして攻撃性に長けた地球人の動きに警戒の目が向けられているというのだ。

その原動力となっているのが現代科学技術文明の中心となっているのが科学技術であり、その巨大化高度化大量化へ向けた最近の急進展である。ことに危険視されていることはエンドレスにつづけられる軍事技術の開発だろう。その結果といえば、地球上には巨大な破壊力を有する高度な兵器が大量に保管されているではないか。

地球では限界を超える人間活動によって「地球環境問題」が発生して地球満杯の危機的状況にあるというではないか。それなのに各国ともども使い切れないような大量の兵器を保有しているのはなぜか。

地球人は満杯になった地球を諦め、宇宙へ目を向けはじめているのではないか。大量の高度な兵器は宇宙征服のために用意しているものではないのか。

太陽系が彼らのターゲットじゃないのか。最近、火星への地球人の訪問が多いが、それと関係しているのだろうか。

これ以上、不作法で不潔な地球人の野放図な行動を放置するわけにはいかないのだ。このまま放置すれば、宇宙がゴミだら

けになってしまうだろう。

地球では、最近、マイクロプラスチック汚染が話題になっているが、容器やボトルなどのプラスチック製品がところかまわず投げ捨てられ、太陽光線や自然の風や波によって砕かれマイクロプラスチックとなって環境を汚染しているのだ。これは無数にある例のなかの一例にすぎない。

地球周辺の宇宙空間には、現在すでに、無数の欠片類（「ゴミ」のことだ）が漂っている。そこでは衝突の危険を負いながら、さまざまな小型衛星が打ち上げられ、周回しているという。

問題が起つてからでは遅い。いまのうちに手を打とうではないか。

そこで考えられたのが、地球上に保有されている大量の超高度な兵器類を活用することだったのだ。詳細はつぎのようだった。

第一は、地球上に保有されているあらゆる兵器火器の類すべてを破壊する。これは地球人の宇宙制覇の野望を挫くために不可欠のことである。

第二は、現代科学技術文明を崩壊し、根絶し、その根までとりのぞくことだ。その理由は別に触れる。これを放置しておけば地球そのものも崩壊してしまう。

第三は、可能な限り、現代科学技術文明に関わるものを破壊することである。これは現代科学技術文明の復元再生を防止するために行なうことである。その可能性のある人的資源も含む。新生文明要員は残すべきである。

そしてとりあえず、以上の三項目を即座に実行することになった。これに利用されたのがAI技術であったのだ。それも自律

型の最新鋭のものであった。

「顛末はこういうことだった……、さあ、もう始まっているぞ……」

ハクリが指差す方向で小さな爆発が起きた。つづいて大きな爆発があり、巨大なキノコ雲が上ってきた。

この最初の核施設一箇所での爆発が合図となった。方々で爆発が起きた。爆発に続いてキノコ雲が立上る。

閃光に続き、爆発とともに大きな赤い火の玉が黄色に光る。その光がキノコ雲に反射し、赤いキノコ雲に変わっていく。

最初の爆発が世界の無数の爆発を呼んでいったのだ。一機のドローンの最初の攻撃が敵の反撃を呼び、それに応えた反撃が、そしてさらなる反撃、こうして反撃の連鎖を呼んでいったのだ。

いくら反撃が続いても、核や火薬などの爆発物は尽きることはなかった。大量に保有されている爆発物は最後の最後まで爆発を続けた。

森林地帯は何日にもわたり火炎をあげた。強風が火炎を煽り、飛火を飛ばす。

爆発で舞い上がった砂塵と火災の煙が空を覆い、天空に分厚い蓋をして太陽光線を遮断する。暗闇の天から大粒の雨滴が落ちてくる。

「地上に戻ってみるか……」

ハクリの声がした。次第に光が戻り、闇の中からハクリが現

われた。

ヨウとミサは口を閉じたまま、ハクリの後を追う。

広場は瓦礫に埋まり、三人が腰掛けていたベンチはどこにも見当たらなかった。広場を取り囲むように建っていた

建物は跡形もなく消えていた。核爆発の強烈な熱風に耐えることなく粉々に打ち砕かれ天空に舞い上がったのだろうか。

遠方で轟音がした。

「ああ、火山の噴火だ……」

「え？ ハクリ、火山が爆発したの、いまの音がそうなの……」

「そう、南極大陸の火山らしいな……、東南極の東端にある大火山だよ……」

「すると、覆っている氷床が大規模に崩壊する可能性もあるじゃないですか……」

「そうだ、ヨウの言う通りだよ……、この様子では、多分、一ヶ所で大量の崩落があれば、結局、南極の氷床全体が連鎖して海中へ崩落していくことになるだろうな……」

まず、この大噴火で東南極の海側の氷床四分の一が海中に崩落した。これによつて海面が一〇メートルほど急上昇した。この影響をまともに受けたのが西南極の氷床だった。不安定だった西南極の氷床全体が一層不安定化していったのである。崩落は時間の問題だった。そのまえに、東南極の氷床に異変が起きた。氷床の四分の一が海中に崩落して東南極氷床の全体が一挙に不安定化していったのだ。

一週間後、南極の氷床全体が崩落したのだ。そして巨大な津波のような波の壁となった巨大な大波が全世界を襲ったのだ

た。

有機的に結びついているような関係にある。それゆえに、このような存在に対するアプローチは個別的専門的なものではなく、全体的総合的なものでなければならぬということだ。

「でも、ハクリ、『全体的総合的アプローチでなければならぬ』と簡単にいうけど、そんなに簡単ではないよね。たとえば、システムの構成要素要因自体何千何万、いやそれ以上もあるでしょうし、それらの相互関係となつたらもう無数にあるでしょう。それらをいちいち取上げるわけですか、こんなことAIでも無理じゃない?……」

「かといって、個別的専門的なアプローチで済ますわけにいかないぞ。そんなことで水を濁そうとするなら、現代科学技術文明の二の舞いになるだけだ。いいね……」

ハクリは強い口調できっぱりと言いつ切る。

現代科学技術文明下では個別的専門的なアプローチが主役で、大型プロジェクトにおいても全体的総合的アプローチが採用されることはなかった。というよりも、全体的総合的アプローチは殆ど不可能だとして、最初から試みることにすんなりなかったのだ。これに代わる方法としていろいろな大量データ処理手法が考えられているが決定的なものはいままだない。こうして近代科学のデカルト流の諸々の手法が科学的方法としていまなお幅を利かせているのである。

現在、研究開発中のものにおいてもそのアプローチは全体的総合的というより殆どが個別的専門的なものである。だが個別的専門的なアプローチでは対象範囲が限られたり片寄ったりす

るため検討の漏れや不足がでてくるのだ。このことに事前に気付けばいいが、素通りしてそのまま世に出てしまい問題となることがまだまだ多いのだ。まえに取上げたマイクロプラスチックの汚染にかかわる環境問題はその一例に過ぎないが、このような例は枚挙に暇が無いのである。

全体的総合的アプローチが必要なのに、難しくて出来なかつたり、手間ひまが掛かることを理由に敬遠されがちであるが、今後大量データ処理の必要性が高まることもあり、これとともに、直接的処理技術やこれに代わる手法が考え出されることであらう。

先端技術においても個別的専門的なアプローチがいまなお主流的であるが、たとえば組み換えや編集などの遺伝子テクノロジー、臓器移植の分野、ナノテクノロジー、IT技術(AIほか)といった新しい分野でも大量データをかかえ未解決の問題が山積しているのだ。

かといって、この問題をこのまま放置しておいていいものか。このままではふたたび現代科学技術文明を呼び戻すことになりかねない。このアプローチ問題、すなわち個別的専門的なアプローチの全体的総合的アプローチへの転換をいかにすれば可能か。

だがこれは簡単にできることではない。かといって放置しては置けない。次善の方法を考え、これで全体的総合的アプローチが可能となるまでの時間稼ぎをするほかない。では次善の方法としてどのようなものが考えられるか。では次善の方法としては、まず、事前のチェックを徹底することだ。このた

めにはテクノロジーアクセスメントやこれに類似のチェックシステムを導入することが考えられるだろう。たとえば、人体における「免疫システム」はどうか。

事前チェックシステムの基準は地球システムへの適合性が基本となるが、決して人間本位であってはならない。人間も地球システムの一要素であって、地球システムの主体でも支配者でもないことを忘れてはならない。

この種のチェックを徹底することでアプローチの不備がある程度カバー出来るかもしれないが、念のために、さらにひとつの仕掛を用意しておくのはどうか。ダブルチェックである。

それは有限性の支配する地球システムの行動原理ともい。うべきものであり、この行動原理を遵守することによって地球システムの特性に沿う行動が保証されるものである。そのひとつの候補として「マイナス最小化行動原理」というものが考えられるのである。

以下、これについて、若干説明しておこう。

この原理でいう「マイナス」とは地球システムを損ねたり、その恐れのあるものすべてを指す。地球システム内での行動の際には事前にこの「マイナス」すべてをチェックし、その最小化を図るのである。もし最小化を図ることができなければ、その行動は止めるか、しばらく差し止めしておくことにするのだ。

また「マイナス」か「マイナスでないか(非マイナス)」かの判定基準は、簡単にいえば、有限性といったような地球システムの有するもろもろの特性を損ねるかそうでないかによる。なお、「マイナス」の反対は「プラス」ではなく、「非マイナス」である。「非マイナス」には「プラス」のほかに「マイナスで

ないもの」が含まれる。念のため、付言しておく。

何度も言うようだが、「地球(環境)システム」を対象とする場合、人間を別格扱いしてはならない。そこにいる人間は地球(環境)システムの一部であり、その構成要素なのである。たとえば人間であろうと、決して、客体に対する主体であってはならないし、また、地球の支配者でもない。このことを決して忘れてはならない。全体的アプローチにおいては対象から除外される特別なものは存在しないのである。

「全体的アプローチが可能なら、こんな注意は必要ないのだがね……」

ハクリはダメを押すようにいう。

「とにかく、『マイナス最小化行動原理』は全体的アプローチに代わる最善の次善の方法だと思うよ。なにしろ、この方法でシステムの存在に不可欠のコントロールはもちろん、バランスの維持、リサイクルの自動化が可能となるのだからね。だがこれはやってみないと分からないかもしれないがね。でも次善の策はあくまで次善の策であることを忘れないように……」

第二十九章 地球に何が (三十二)

「レクチャーはおわりだ。言っておきたいことはまだまだあるが、ヨウも、ミサまでもが飽き飽きした顔をしているからもうやめるよ。残りは前へ進みながら、いずれやることにして……」

「ハクリ、前へ進むなら、その前に今回の一連の事件を総括しなければならぬんじゃないの。その内容によっては生き残り探しも新しい文明づくりも考え直さなければならぬかもしれないわよ……」

「そうだ、ボクにもまだ釈然としない点があるんだ……」

「そうか、ふたりにはまだ不明なところがあったんだね、すべて分かっていると思っていたが……」

ハクリの総括はこうだった。

最初の「火の玉」事件は一台のAIDローンによる某国核兵器貯蔵施設の爆破攻撃が端緒になって、これが核の反撃を誘い、全面核戦争を誘発したのだった。最初の一撃が敵の反撃を誘い、反撃に反撃が繰り返され、全面核戦争へと拡大していったのだった。

最初の攻撃に対し、被攻撃国は迂闊にも即座に核弾頭ミサイルで反撃したのだ。これが全面核戦争を招き、地球を「火の玉」化することになったのである。

その背景には、国際社会の緊張が高まりから、各国間に軍備増強の機運が生じ、拡張競争が公然と行なわれていたことがあった。現代科学技術文明の巨大化高度化大量化のもとで兵器開発も巨大化高度化大量化していき、戦争の無人化のための各種無

人兵器や自律型AI兵器の開発が熱心に進められていたのである。今回の特製AIDローンもその産物だったが、開発者についてでは定かではない。

「火の玉」事件の背景には最新鋭の軍事技術開発への渴望と豊富な兵器、それも巨大な破壊力を持つ高度な核兵器を大量に保有していたことである。これらを用い、各国間で反撃に反撃を繰り返し、これによって地球をくまなく火で包み、地球の「火の玉」化を演出することができたのだ。

「ハクリ、ボクが見た『火の玉』はこんな風にして出来たのだというのかね……」

「多分ね、最初に攻撃された国がどこかは分からないが、その国が敵と思った国に即座に核で反撃したことが核全面戦争を呼んだということだね……」

「この核全面戦争は偶然の産物だったという……」

「そういうふうにも見えるけど、国際社会には戦争への機運が満ちていたという背景があった……」

「だからといって、核全面戦争が自然発生したんだとはいえませんよね……」

「……そうね、でも、反撃を見て、自分が反撃されるかもしれないと思い、核保有国がつぎつぎと反撃に加わったことも考えられる……」

「そうかなあ……」

「反撃の先が一ヶ所ではなく数ヶ所（一ヶ所に絞りきれなくて複数ヶ所への反撃を遂行するケース）に及んだ場合、それぞれが敵と思った国々へ反撃していく。こんなことが繰り返されて

いけば、瞬く間に、世界を巻き込んだ全面戦争へ発展していくことは十分考えられるんじゃないかな……」

「納得できないけど、世界には慌て者が多いということか、それとも未だに戦争好きが多いということですかね……」

「まあ、そうかもしれない……」

「ハクリ、そんなふうに考えてしまっただけじゃないんですか。ぼくが納得できないことは、どうして世界各国の都市という都市が攻撃の対象となっているのかということ、そしてこのこと（世界の全都市の破壊）のために核全面戦争を持ち出してきているように思えることです。まあ、戦争に参加しないものが『漁夫の利』とならないように全面戦争を仕掛けるということも理解できないことはないけど、かといって今回のようなケースにこれを持ち出すのは妥当だとは思えないのです。核全面戦争説は『火の玉』問題を解決するためのこじつけのようには感じるので。でも現に世界の都市の大半が水没……、そうか、水没した都市のすべてが破壊されているとは限らないのではないですか……」

「そうかもしれないな……」

「そうですよ、きつと……」

「ヨウ……、『火の玉』事件も全面戦争説もバーチャル・リアリティか空想の産物だったのかもしれないな……」

『火の玉』もバーチャル・リアリティだということですか、ボクが実際に目撃したんですよ……」

「そうかね……」

「ううん、まあいいや……」

ヨウはあのととき目のまえに突然現われた「火の玉」を思い浮

かべ、あれももしかしたらバーチャルだったかもしれないと思う。そのつぎの暗闇もこれもバーチャルかも。そうかもしれない。

だが海面急上昇は別だ。これによって無傷の都市も水中深く没していったのだし、崩壊した都市も残骸もろともすべてが水中に呑み込まれてしまったのだった。

第三十章 地球に何が (二十三)

「ハクリさん、それでは前へ進むことに致しましょうか、ミサさんもいいですか……」

そう言ったものの、ヨウには「前」とはどこか分からないのだ。さあ、お前はどこへ行くのだ。どこを指して行けばいいのだ。

ヨウはハクリの顔を見ながら、何度も自問自答を繰り返す。

これまでは過ぎ去った過去へ戻ってそこから未来の方向を眺めていたのだ。だから、その未来は過去から見た未来であって、未来の未来ではなかった。そこには『前』はないのだ。

「火の玉」事件を追って過去から未来への階段を上って未来を指してきたが、その未来は過去から見た過去の未来だったのだ。

これから行くこうとしているところは未来の未来である。

「火の玉」事件も都市の水没で終わったのだ。これからは未来の未来に向かって「前」へ行くのだ。

「とにかく、生存者を探すことだ。だがこれは簡単なことではないだろう。なにしろ、核全面戦争と同様なことが起きたのだから、地球上のいたる所が高レベルの放射能で汚染されてしまっているだろう。直接被爆しなかったとしても、生存者といえどもすでに汚染してかなりのダメージを受けているにちがいない」「それは……」

「ヨウ、『永遠の命』を付与されているわたしたちには汚染の心配は無用なんだよ……」

ハクリは続ける……。

これから説明することは、新しい文明を構築するに当たって、是非、心すべきことについてであるが、生存者たちへとというより、きみたちもよく理解してほしいことである。

新しい文明をつくる時、とくに考慮すべきことは、その容器となる地球についてである。その地球は単なる地球ではない。それは地球がひとつの有限なシステムであるということである。

すなわち、地球はひとつのシステム（地球システム）であるということである。これは広大な陸地と、果てしなく広がる海の単なる球体ではないのである。

いいかえれば、これからつくる新しい文明は、この地球システムを容器とし、これに合致する文明、すなわち「地球システム文明」なのである。

それには新しい文明は地球システムの特性を遵守しそれに沿うように設計構築されなければならない。そのなかでもとくに重要なことは地球システムの有限性に関する特性である。

現代科学技術文明はこれを無視して地球システムの限界を超え、地球システムの崩壊をもたらしたのだ。それゆえ、現代科学技術文明の残滓の一部たりとも取り入れてはならないし、模倣したりすることがあつてはならない。また、現代科学技術文明の遺物や放置物の類も無条件で利用や活用することは一切してはならないのである。現代科学技術文明は地球システムとは相容れないものであつたからである。それゆえに、これら

をふたたび利用や活用するには再チェックが必要となるのだ。なお、地球システムに合致するか否かのチェック方法等につ

いては前にも触れたが、要は地球システムの特性に合致するか否かを基準にし、合致しないものは排除するほかないということである。

「ハクリ、『前へ』といわれてもどこへ行けばいいんですか……」

「そうだね、多分、生存者たちは水や食べ物を探して歩き回っているところだろう。なにしろ海面が急上昇したばかりだから海岸近辺の低地は水浸しになって追い出された生存者たちは難民となって内陸部の高台や山地をめざしていることだろう。」

「まあ、彼らは食べ物や水を求めて彷徨を重ねるだろうから、彼らをつかまえるには後を追うほかないかもしれない……」

「後を追うんですか、でも前にいるかさえ分からないのですよ、それでも前へですか……」

「生存者探しをしているんだから、見つからない場合も当然ありうることだよ。これはやってみて確かめるしかないことだよ……」

「そうですか、ではどこからどこへ向けてスタートしますか……」

「人類（現生人類）はアフリカから世界へひろがっていったらしいからそこをスタートラインにしてはどうかな……」

「ここからじゃなくてアフリカ大陸からですか……」

「アフリカがスタート点だとするとここ辺りがゴールじゃないかな、多分……」

「じゃ、ここで待っていてもいいわけ……」

「でもここにたどり着くのはいつになるかな、何万年後かもしれないなうぞ……」

人類（現生人類・現代型ホモ・サピエンス）は『ヒト科ホモ属（ヒト属）ヒト種に属する。現生人類である現代人は十萬年前ごろ、アフリカ大陸から世界に拡散していく。まず、アフリカ大陸内での移動が頻繁に行われたらしい。ほぼ同じ頃、東欧への移動する一群があつた。別の一群は、南アジアへの移動し、さらにオーストラリア大陸へ向かったようだ。

また、北欧、西欧、ユーラシアへ向かういくつかの群れもあり、東南アジア、東アジアへ進む群れもある。そのなかの一団がベーリング海峡を渡り北米大陸へ入り、先頭集団が両大陸の各地へ拡散していく。そのなかの一部が南米大陸へ向かうのだ。

こうして現代人は十萬年掛けて世界各地へ拡散したらしいが、その間、人類はそれぞれの地域でさまざまな文明の興亡を繰り返し、今日の現代科学技術文明へ繋がっていったのだ。

ところがいま、地球を全制覇し、あわよくば宇宙までも食指をのぼす現代人は、巨大化高度化大量化を目指す現代科学技術文明を武器に地球を征服し、自分の生存基盤である地球を食いつぶしてしまい、種としての人類の存続すら危ぶまれている有様ではないか。

「なあ、ヨウ君、きみはどう思うかね……」

「なにがですか……」

「生存者探しのことだよ。飢えた者たちの後を追って行き、追いついたときに、この人たちにきみはなんて話しかけるとつも

りかね……」

「……」

ヨウは隣で耳を傾けているミサを見る。

「それは『サブクトビバッタ』と同じね……」

眩くような低い声だった。ミサはその一言切りで口を閉ざしてしまった。

一機の自律型AIDローンの誘いに乗ってはじまった核弾頭の撃ち合いが世界中に保有されていた核弾頭を打ち尽くし、その他の保有核兵器も残らず撃ってしまって、漸く連鎖する核爆発が終わった。

核の爆発時の閃光や熱風をのがれた生存者の多くは追い討ちを掛けるように降り注ぐ放射性降下物の高レベル放射線を浴び、飢えと渇きの癒しを求める長旅のなかでつぎつぎと命を落していった。

(第六卷 完)

この物語はフィクションです。登場する国や団体、組織、個人等は実在するものとなんら関係はありません。

「天翔け地這う 第六卷 人類はどこへ行くのか

生野以久男

二〇二一年十一月一日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2021

発行所 キノコプレス

代表 森岡正博

所在地 359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島二一五七七九一―一五 早稲田大学

人間科学部 森岡正博研究室

連絡先 www.lifestudies.org/kinokopress/mail/0.1.htm

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁
じられています。

ISBN なし

